

72
123



波蘭寒山獸史
全

羽化生澀江保著

東京博文館藏版

羽化生 澁江 保著

波蘭衰亡戰史 全

東京 博文館藏版



波蘭衰亡戰史ハ、露女皇カタリナ二世ガ、彼得大帝ノ遺訓ヲ奉シテ、蠶食
 狼吞ノ慾ヲ逞クシ、遂ニ之ヲ滅ボシタル顛末ヲ記セル歴史ナリ。而シテ
 權畧絶倫ナル普ノフレデリック大王ガ、露國獨リ此ノ天福ノ地ヲ襲斷
 スルヲ恐レ、己モ亦一栢ノ羹ヲ得ント欲シ、埃露兩國ニ説キテ之ヲ分割
 シタル事、露普埃三國ガ、此分割ヲ以テ足レリトセズ、更ニ再三之ヲ分割
 シテ遂ニ滅亡セシメタル事、又袁世凱的ノ露公使ガ術數ヲ弄シ、威權ヲ
 擅ニシタル事、國姓爺的ノコスシウスコガ、身ヲ以テ國ニ殉シタル事等
 ハ、悉ク載セテ編中ニ存シ、吾人ノ殷鑑ト爲スベキモノ甚ナシト爲サズ。
 生夙ニ此ノ史ヲ編纂セント欲シ、今幸ニ之ヲ編纂スルヲ得タリ。然レモ
 生ガ曾テ望ミタル所ハ、詳密ノ歴史ニ在リテ、今ハ其ノ十ガ一ニモ及バ
 ズ。故ニ隔靴ノ憾ナキニアラザレドモ、其ノ一斑ハ充分ニ窺フヲ得ベシ
 讀者之ヲ以テ梗槩ヲ察スルノ資ニ供セラレナバ、生ノ願奚ツ之ニ加ヘ

從來編纂スル所ノ『普塊戰史』等ノ如キハ、現存國ノ戰史ナレバ、戰略上ノ事實ト云ヒ、政略上ノ事實ト云ヒ、凡テ只開戰前後ノ顛末ヲ叙スルヲ以テ足レリトスレドモ、『波蘭衰亡戰史』ニ至リテハ則チ然ラズ。百年前既ニ滅ビテ、一國トシテハ毫モ根迹ヲ存セザルモノ、戰史ナルガ故ニ、多キ讀者ノ其ノ中ニハ、斯クテハ恰カモ暗中ニ物ヲ搜索スルノ念ヒサセラル、人々モ全ク之ナキヲ期スベカラズ。是ヲ以テ本書ハ、第一編、即チ發端ト題スル編ニ於テ、波蘭建國ノ初ヨリ、衰亡戰前ニ至ル迄ノ歴史ヲ略叙シ、第二編ヨリ衰亡戰史其ノ物ヲ叙スルト爲セリ。

『普塊戰史』ノ如キハ、僅々七週間ニ涉レル戰爭ノ記事ナレバ、クトヒ紙數ハ少ナクトモ、稍々詳細ニ敘述スベキ餘地ナキニアラザレトモ、波蘭分割ノ事タル、第一分割ハ、西曆一千七百七十二年我が安永元年三月ニシテ、第二分割ハ、同九十二年我が寛政二年四月壬子、第三分割ハ、同九十五年我が寛政七年乙卯ニ在リテ、其ノ間

二十三年ニ涉レル事件ノ顛末ヲ記スルナレバ、専ラ大綱ヲ述ベテ瑣事ハ之ヲ省キヌ。又引用書ハ、多クフレッチャヤノ『波蘭史』(Fletcher's History of Poland)ト無名氏ノ『波蘭史』(History of Poland)トナ用井、傍ヲフーロースノ『獨逸史』(Kohlrausch's History of Germany)カ、ライノイルノ『フレデリック大王傳』(Carlyle's History of Friedrich II of Prussia, called Frederick the Great)ネリ、トノ『露國史』(Kelley's History of Russia)等ヲ參考ニ供セリ。

明治二十八年四月
羽化生じらるす

波蘭衰亡戰史目次

第一編 發端

第一章 緒言……………一九

第二章 前時ノ波蘭……………七

第三章 シヨノン、ソビエスキ王、即チシヨン三世ノ傳并ニ

治世……………一九

第四章 波蘭、瑞露二國ノ左右スル所ト爲ル……………三六

第二編 波蘭分割ノ近因(其一)

第一章 露國女皇カタリナ、波蘭ニ對シテ傍若無人ノ舉

動ヲ爲ス……………五二

第二章 露公使恣ニ波蘭正義ノ士ヲ捕フニ委員和談會

……………六五

第三章 正義ノ士竊カニ恢復ヲ謀ルニ露兵正義ノ士ト
戦フ……………七二

第四章 露土兩國干戈ヲ接ユニ同盟黨ノ助靜……………八三

第三編 波蘭分割ノ近因(其二)

第一章 露軍大舉シテ土耳其ヲ攻ムニ希臘土耳其ノ羈
絆ヲ脱セントス……………九五

第二章 普ノフレデリック大王、獨逸帝ヨセフ二世ト
相會スニ同盟黨ノ勢力頂點ニ達シ漸ク衰兆ヲ
現ハス……………一〇〇

第三章 露軍殘酷ヲ極ムニ埃普兩軍、波蘭ニ入ルニ同盟
黨、波蘭王ヲ擁セントシテ誤ル……………一〇七

第四章 露、埃、普ノ三國同盟ヲ結ブニ同盟黨解散ス……………一一五

第四編 波蘭第一回分割

第一章 波蘭分割策ノ起原ニ普、埃、露三國互ニ氣脈ヲ通
ス……………一二三

第二章 三國ノ政略并ニ同盟……………一三〇

第三章 三國各々分割ノ理由ヲ公ニスニ三國、波蘭ニ分
割ノ承諾ヲ迫ル……………一四三

第四章 愛國者激シク分割ノ議ニ反對スニ分割遂ニ行
ハルニ外國冷然タリ……………一五〇

第五編 波蘭第二回分割

第一章 波蘭ノ志士挽回ノ策ヲ講スニ露國益々波蘭ノ
根ヲ絶クント謀ル……………一六〇

第二章 波蘭人、普王フレデリック、ウヰリアムニ欺カレ
テ同盟ヲ結ブニ波蘭新憲法ヲ發布ス……………一六六

第三章 歐洲各國、波蘭ノ改革ヲ祝スニ露國獨リ激シク

之ニ反對スル露軍、波蘭ニ入ルル普軍亦波蘭ニ入ルル……………一七五

第四章 普露兩國波蘭第二回ノ分割ヲ謀ルル露公使暴行ヲ恣ニスル波蘭再ヒ分割セラレ露國猶波蘭ノ實權ヲ掌握ス……………一八七

第六編 波蘭第三回分割、即チ波蘭ノ滅亡

第一章 愛國者、舉兵ヲ謀ルル義士、コスシウスコチ大元帥ニ選フ……………一九八

第二章 コスシウスコノ傳、附文學者ニトムツエウヰツツノ傳……………二〇四

第三章 愛國者、露軍ト戦フル露人、ワルソニ於テ殘虐ヲ極ムル普軍、ワルソヲ圍ム……………二一六

第四章 愛國者ノ軍取績スル波蘭三タヒ分割セラレ遂

ニ亡ブル波蘭王、スタニスラス、アウガスタス、位ヲ廢セラレ……………二三二

波蘭衰亡年表……………二四四

附錄

波蘭滅亡後ノ狀況

第一 愛國者ノ至誠ト、拿破崙ノ助力トニ由リテ波蘭人民再ヒ自由ヲ恢復セントスルソト公國ノ建設……………二五二

第二 拿破崙滅ビテ事敗ル……………二五三

第三 埃領波蘭、普領波蘭、露領波蘭……………二五六

第四 波蘭軍總督コンスタンチン大公、虐政ヲ恣ニス……………二七二

第五 波蘭人義旗ヲ翻ヘスルヲ、ロビツキノ不決斷……………

アマム、ザートリスキ公、波蘭ノ大統領ニ選ハル 二七五

第六 アダム、ザートリスキ公ノ傳 二七五

附 露國女皇カトリナ二世ノ非常ニ淫奔ナリ
シ事 二八〇

第七 愛國者露ノ大軍ト戦フニ波蘭軍終ニ敗績ス 二八六

第八 コンスタンチン公等ノ死去ニ露軍ツルソトコ
入ルニ波軍露ニ降ル 二九〇

第九 波軍降服後ノ狀況ニニコラス帝波蘭ヲ全滅ス 二九七

第十 波蘭全滅以後ノ波蘭人 二九九

波蘭衰亡戰史目次

波蘭衰亡戰史

羽化生 澁江 保著

第一編 發端

第一章 緒言

波蘭ハ昔ニ天下ノ冠國ナルヲ得タル

今ナリルハ百年前波蘭(Poland)ノ盛ナルニ當テヤ、波蘭ハ西曆一七九五年(我カ其死政七年乙卯)ニ亡ビタル

版圖西北ハバルチック海ヨリ、東南ハ、黒海近傍百五十哩弱ニ處ニシテ、面積二十八萬四千平方哩、人口二千五百萬ヲ有シ、其國土ノ大ナル、露國ヲ除キ、他ノ歐洲五大國ト雖モ、之ニ加フルコト能ク、廣ハ二十四萬平方哩、獨ハ二十萬四千平方哩、英ハ十二萬平方哩、伊ハ十一萬四千平方哩、普波蘭ヨリモ小サシ、獨リ露ノ三十九萬平方哩アリテ、波蘭ヨリ大ナリ。加フルコト氣候溫和、地味膏腴ニシテ、物産頗ル富ミ、數流ノ大河、國內ヲ貫通セルヲ以テ、運輸ノ便ヲ占ム。故ニ一時ハ兵馬精銳、勢威強盛、雄ニ歐洲ニ稱セシ也。然ルニ此邦國

波蘭滅亡ノ原因

緒言

二

(其一)國王公選

ガ次第ニ國力疲弊シテ漸ク他國ノ干涉ヲ受ケ、遂ニ覆滅ノ災ヲ被ムルニ至リタル所以ノモノハ何ソヤ。願フニ(第一)國王ノ公選、(第二)外國ノ干涉、(第三)人民ノ無政權ヲ以テ其衰亡ノ要因ト爲スベキニ似タリ。

(第一)何故ニ國王公選ヲ以テ波蘭滅亡ノ第一因ト爲スヤ。立君共和兩政體ノ得失優劣ハ、茲ニ開陳スルヲ要セザレド、苟モ主權ノ活人書ナリ、尊嚴ノ靈ハインリッホフケイン牌タル所ノ國王ヲ置ク以上ハ、選舉制ヨリモ、寧ロ世襲制ヲ可トス。何トナレハ國王公選ノ制ハ、王室ノ尊嚴ヲ傷ケ、朋黨ヲ止ム時ナカラシムルノ制ナリトハ、夙ニ識者ノ定論ナレバ也。而シテ波蘭ニ於テハ、初メ國王世襲ノ制ナリシモ、一千五百七十年代ヨリ國王公選ノ制ト爲リ、而カモ國王ヲ自國ニ選バズシテ、概チ外國ニ選ビタルヲ以テ、例ハバ甲派ノ貴族、佛國ヨリ王ヲ迎ヘ、若クハ迎ント欲シテ、心チ同國ニ傾ケ、其援ヲ求ムレバ、乙派ノ貴族ハ獨逸ヨリ王ヲ迎ヘ、若クハ迎ヘント欲シテ、心チ同國ニ傾ケ、亦其援ヲ求メ、丙派ノ貴族ハ露國ニ依リ、丁派ノ貴族

(其二)外國ノ干涉

ハ瑞典ヲ頼ムト云フ如クニ、黨派分歧シテ互ニ相軋轢シ、人心更ニ統一セズ。加フルニ、外國ハ其ノ隙ニ乘シテ、暗ハシムルニ賄賂ヲ以テ、公利ノ爲メニ王ヲ選バズシテ、私利ノ爲メニ之ヲ選バシメタルガ故ニ、是ヨリ外國干涉ノ端緒ヲ開キ、其ノ恐迫、瞞着ヲ受ケテ、遂ニ併呑セラレ、ニ至レリ。是レ予ガ國王公選ヲ以テ、波蘭滅亡ノ第一因ト爲ス所以ナリ。

(第二)何故ニ外國ノ干涉ヲ以テ波蘭滅亡ノ第二因ト爲スヤ。初メ波蘭王アウガスタスハ、瑞典ノ地ニ垂涎シ、其ノ主ノ年少ヲ侮リテ、露ノ彼得大帝ト結ブ、之ヲ襲撃セシニ、豈圖ランヤ。年少ノ君主ハ、有名ナルチャールス十二世ニシテ、露波ノ兩軍ハ脆クモ其敗ル所ト爲リ、就中波蘭ノ如キハ、城下ノ盟ヲ爲スニ至リシカバ、チャールスハ、アウガスタスノ位ヲ廢シ、レスクジンスキヲ立テ、波蘭王ト爲セリ。其後十餘年、彼得大帝、瑞典ニ勝テ、其ノ勢旭日ノ如ク、アウガスタスヲ援ケテ、再ヒ波蘭王ノ位ニ即カシメ、爾來約ニ背キテ、露兵ヲ波蘭ニ置キ、又其軍事ニ干涉シテ、從

發端

三

來ノ十萬人ヲ二萬人或ハ曰ク一萬八千人ニ減シ、其ノ他、手チアウガスマスニ借リテ、漸ク併呑ノ方便ヲ運ラセリ。是レ則チ露國干涉ノ濫觴ニシテ、彼ガ野心ヲ逞フセントシタルハ、此時ヨリセリ。是ヨリ、日チ逐テ、益々干涉ノ度ヲ高メ、威權ヲ恣ニシ、國王ヲ以テ自家藥籠中ノ物ト爲シケレバ、波蘭ノ首府ハ、ワルソニアラズシテ、寧ロ聖彼得堡ニ在ルノ觀アリキ。カマリナ二世位ニ即クニ及ビテ、露人益々波蘭ニ跋扈シ、波蘭國ハ、獨立國ノ空名ヲ有スレバ、其實際ハ露ノ爲メニ屬國視セラレ、其國王ハ一地方知事ノ如ク待遇セララル、ニ至レリ。カマリナ又波蘭ノ内外ニ數萬ノ露兵ヲ置キ、兵力的干涉ヲ爲シテ、國王ヲ恐迫シ、國會ヲ壓服シ、愛國正義ノ士チ西伯利ニ遠竄シ、酷刑ヲ施シ、無辜ヲ殺シ、志士憤リ、良民怨ムモ、恬トシテ顧慮スル所ナク、數年ヲ待タズシテ、全ク之ヲ併呑セントスルノ勢ヒアリ。炯眼ナル普ノフレデリック大王、夙ニ其ノ事情ヲ觀察シ、露國ノ爲ニ此地ヲ專占セラル、チ快トセズ。其ノ利益ニ與カラント欲スルヨリ、埃帝

シヨセフニ説キ、普埃露ノ三國聯合シテ、波蘭ノ若干部ヲ分割セリ。茲ニ至リテ、波蘭ハ、外國ノ野心ノ爲メニ、半ハ滅亡シタルモノト謂フベシ。(波蘭第一回分割)第一回分割ノ後、露國ハ依然トシテ波蘭ノ主權ヲ僭シ、濫刑多殺、漸ク有爲ノ士チ一網ニ驅リ盡シテ、將ニ全國ヲ併呑セントセリ。普ノフレデリック、ウヰリアマフレデリック大王ノ姪。其ノ後嗣亦竊カニ望獨ノ念アリ。露普、心チ合セテ、遂ニ復タ其若干部ヲ分割セリ。茲ニ至リテ、波蘭ハ、外國ノ野心ノ爲メニ、過半滅亡シタルモノト謂フベシ。(波蘭第二回分割)其ノ後ニ至リテモ、露國ハ益々苛刻ヲ以テ政チ波蘭ニ行ヒ、普埃亦一栝ノ羹ヲ味ハント望ミケレバ、波蘭ノ危キ一ハ、風前ノ燈モ管ナラス。コスシウスコ等愛國誠忠ノ士出テ、畢生ノ力ヲ振ヒタリト雖モ、命數ノ盡クル所亦如何トモ爲シ難ク、三國遂ニ全ク之ヲ吞滅シ了レリ。茲ニ至リテ、波蘭ハ、外國ノ野心ノ爲メニ滅亡シタルモノト謂フベシ。(波蘭第三回分割)是レ手ガ外國ノ干涉ヲ以テ波蘭滅亡ノ第二因ト爲ス所以ナリ。

(其三)人民ノ無政權

(第三)何故ニ人民ノ無政權ヲ以テ波蘭滅亡ノ第三因ト爲スヤ 波蘭國ハ夙ニ國王公選ノ制ナリ、國會ノ設ケアリタレドモ、其ノ所謂公選トハ貴族ガ公選スルノ義ニシテ、人民ハ之ニ與カルヲ能ハズ。國會ト云フハ貴族ノ國會實ハ貴族會ト稱スルヲ密ニ當ト爲スベキニ似タリニシテ、人民亦之ニ與カルヲ能ハズ。左レハ人民ハ國家ヲ念フヲ殆ンド他人ノ物ノ如ク、國家ノ大事ヲ賭ルヲ對岸ノ火ニ異ナラズ。波蘭ノ盛時ニ當リテ、外征ニ勝チテ喜ビタルハ貴族ニシテ、其ノ衰フルニ及ビテ、外侮ヲ受ケテ憂ヒタルモ亦貴族也。人民ハ毫モ喜愛ヲ感セザル也。凡ソ文事ニ、武事ニ、内治ニ、外交ニ、一臂ノ力ヲ添ヘント欲スル者ハ、皆花タリ、枝タル所ノ貴族ノミニシテ、其根タリ、幹タル所ノ人民ハ、知ラザルモノ、如シ故ニ國家ノ基礎オノツカラ薄弱ナラサルヲ得ズ。之ヲ以テ獅虎豺狼ニ當ラントス。安ソ政畧敏捷、軍事統一スルヲ得ンヤ。是レ予ガ人民ノ無政權ヲ以テ、波蘭滅亡ノ第三因ト爲ス所以ナリ。

總結

要スルニ、波蘭ハ、國王公選ノ爲ニ朋黨傾軋シテ國家ノ統一ヲ欠キタルト、野心アル外國ニ接壤シ、其干涉ヲ蒙リタルト、貴族跋扈、國民政權ニ與ラザルトノ三ツニ由リテ、覆滅ノ禍ニ陥リタリ。苟モ後ノ波蘭ヲラザラント欲スルモノハ、安ソ國民ノ統一ヲ謀リ、外國ノ干涉ヲ排セザルベクンヤ。

第二章 前時ノ波蘭

人種

波蘭人ハ、スラヴァチコツク人種ニ屬シ、遠ク古代ニ遡ルキハ、サイシア人ト同一種ナリト云フ。スラヴァチコツク人種ハ、一時歐洲ノ全東南部、即チバルチツク及ヒアドリアチツクノ海岸ヨリ、烏拉山脉ニ至ル迄ノ地方ニ蔓延シ、其ノ一派、數多ノ種族ニ分カレテ、夙ニウヰルスチエラ河(今ノ露西亞ノ地)オトデル河(普魯士ニ在リ)附近ノ地方ヲ占メ、而シテ其ノ中ノ一ナルポーラニ(平地ノ住民ト云フ意)種族、自餘ノ種族ヲ壓服シテ權勢ヲ擅ニシ、ポー

面積

人口

ラニ種族トシテ一般ニ知レ渡リ、爾來漸ク發達シテ遂ニ波蘭國ヲ建テ
タリ。波蘭國ハ其ノ最モ隆盛ノ時代ニ當テハ、面積二十八萬四千平方哩
之ヲ佛國ニ比スルニ三分ノ一以上大ナリ。予カ著ハス所ノ「萬國地理」ニ、佛國ノ面積
ハ二十萬零四千平方哩トアリ。即チ波蘭
ノ面積ハ凡ソ三分
ノ一小サシ。人口ハ、凡ソ一千五百萬アリキ。

スラヴチニツク人種ニ風スルハ、歐洲大陸ノ中央ヨリ東部ノ人民即チ黑海ヨリバルチック海ニ至ル迄ノ中間
ノ人民ナリ。露西亞、匈牙利、匈牙利ニハ、蒙古、バルマシア、波蘭、ポヘミア等ノ人民、其ノ他多瑙河附近
ヨリ、バルチック海ニ流スル諸地ノ人民ハ皆此ノ人種ニ風ス。

宗教

波蘭人ハ元ト偶像信者ナリシガ、西曆十世紀ノ末葉ニ當リ、獨逸及ヒボ
ヘミアヨリ、基督教ノ宣教師屢々來リテ教ヲ説キタルヲ以テ、遂ニ基督
教ニ改宗シ、爾來同國ノ歴史并ニ事情ハ、漸ク英佛諸國ノ知ル所ト爲レ
リ。

ピアスト朝

西曆八百三十年我カ淳和天皇ノ
天長七年庚戌ピアスト(Piast)ナル者、波蘭王ノ位ニ昇リテ曰
リ、其ノ子孫相繼テ此ノ國ニ君臨シ、此ノ朝チ名ケテ、ピアスト朝ト云フ。後年路易王(Louis)路易ハ、元
王ナレバ、波蘭王カシミアノ姪ナルニ依リ、西曆一三七〇年(我カ建徳元年庚戌。即チ足利
三代將軍義滿ノ時)カシミア王崩御ニ及ビ、其ノ後チ繼ヤテ波蘭王ノ位ニ即キタルナリ。崩シテ男子ナ

ジャゲロン朝

カリシカハ、皇女ヘドゥヰガ(Hedviga)王位ヲ繼キ、西曆一三八四年(我カ元中元年甲
子。即チ足利三代將軍義滿ノ時)テリチユアニア公ジャゲロン(Jagellon, Duke of Lithuania)ト合登ノ禮ヲ
舉ケシガ、其後、ジャゲロン立チテ波蘭王ノ位ニ即キ、爾來凡ソ二百年ノ
間、子孫相繼テ波蘭王ナリ。此ノ朝チ名ケテ、ジャ
ゲロン朝ト云フ。

文化駁々トシ
テ長足ノ進歩
ヲ爲ス

コペルニカス

ジャゲロン朝ノ時、波蘭ノ文化駁々トシテ長足ノ進歩ヲ爲シ、就中文學
ハ、文明國中ニ高地位ヲ占メ、シラゴノ大學ナリ。今、波蘭ノ一府ハ、中央歐羅巴
最重要ノ學校ト爲レリ。コペルニカス(又ニコラス、コペルニツクトモ云
フ) Copernicus, or Nicolas Copernic)ノ如キハ、當時最モ有名ノ人ナリ。

コペルニカスハ、西曆一千四百七十二年(我カ文明五年癸巳)ニ生レ、同一千五百四十三年(我カ天文十二年
癸卯)足利十三
代將軍義滿ノ時)死ス。波蘭國トルンニ風ス。今、波蘭ノ一府ハ、中央歐羅巴
最重要ノ學校ト爲レリ。コペルニカス(又ニコラス、コペルニツクトモ云
フ) Copernicus, or Nicolas Copernic)ノ如キハ、當時最モ有名ノ人ナリ。

太陽、地球ノ周圍ヲ巡リ行クカ、
將タ地球、太陽ノ周圍ヲ巡リ行クカ

ト云ヘルニ、二種ノ重大ナル問題ニ就テ考察サ下シ、而シテ其ノ一大著書「天體運行論」(Revolutions of the
Celestial Orbs)ニ於テ之ヲ解釋セリ。其ノ說ク所ハ則チ今日一般ニ行ハル、地球ニ二種ノ運行アリトノ說ナ
リ。氏曰ク。

太陽ハ、地球ノ周圍ヲ運リ行クガ如クニ見ユルト雖モ、其ノ實ハ決シテ然ラズ。地球ニ日動、年動ノ運行アルヨリ、斯クハ見ユルナリ。日動トハ、毎日一回地球ノ周圍ヲ運ルヲ云ヒ、年動トハ、毎年一回太陽ノ周圍ヲ運ルヲ云フ。

當時此ノ理論ハ、世人ノ深信スル所ニ反シタルヲ以テ、反對ノ徒頗ル多ク、頑僻固陋ナル天主教徒ハ、其ノ聖經ノ旨趣ナリトスル所ノモノ、即チ聖經ノ旨趣ナリト爲ル所ノ牽強附會ノ意見ヲ拮据トシテ、力ヲ極メテ之ニ抵抗ヲ試ミシカド、真理ノ向フ所焉ンテ敵アラシ。久シカラズシテ千古不動ノ確説トハ爲リメ。(蓬江保著「萬國發明家列傳」)

人民ノ階級

波蘭ノ人民ハ、露西亞ノ人民ト同シク、近年ニ至ルマデ、二種ノ階級ヨリ成レリ。一チ貴族ト云ヒ、一チ奴僕(平民)ト云フ。貴族即チ特權社會ノ人々ハ、僧侶ヲ合セテ其ノ數凡ソ二十萬人アリ。自餘ノ數百萬人ハ、悉ク奴僕ナリキ。是レ等僅々ノ貴族ハ、社會ノ上流ニ位シテ、殆ンド別種族ノ如ク、ミツカラ其ノ身体ヲ以テ、神聖ニシテ犯ス可ラザル者ト爲シ、生殺與奪ノ權ヲ掌握シテ奴僕ヲ視ルコト、犬馬モ當ナラズ。奴僕即チ平民ハ、地ヲ耕シ、手足ヲ勞シ、貴族ニ驅使セラレテ休息ノ暇ナク、社會ノ下層ニ蟄伏シテ、歲月ヲ奴隸的生活ニ送ルノミ。故ニ吾人が波蘭史ト各クル所ノモ

波蘭史ハ波蘭ノ貴族史ナリ

ノハ、其ノ實、波蘭ノ貴族史ノミ。

波蘭ノ奴僕、即チ平民ハ、皆憫ムベキ不幸ノ人類ナレドモ、其ノ中マダ數多ノ階級ナキコアラズ。農 僕 ト云ヘルハ、其ノ數最モ多クシテ、最モ下級ニ位シ、無學無識ニシテ、禽獸ト殆ンド其ノ等ヲ同シフセリ。左レド、ポーセン、ソルソー、プロムヘルヒノ如キ都會ノ地ニ住スル奴僕ハ、諸種ノ技藝ヲ有シ、文化ノ度遙カニ高カリキ。

一千五百七十二年我カ元德三年壬申(信長ガ淺井朝倉ヲ滅シタル前年)波蘭王シグスマンド、アウガスマス(Sigismund Augustus)崩シテ子ナカリシカバ、サシモ百八十六年ノ間、波蘭ニ君臨シタルシヤゲロン家ノ系統ハ、茲ニ終ヲ告ゲ、諸侯相議シテ、佛王シヤール九世(Charles IX)ノ弟ニシテ、キヤサリン、デ、メ、チ、ン(Catherine de Medicis)佛王ヘンリノ子ナルアンジョー公ヘンリー(Henry, Duke of Anjou)ヲ立テ、波蘭王ト爲ス。而シテ波蘭ハ此ノ時ヨリ公選王國ニ變ジタリ。此選舉王政ニ於テ國王選舉ノ權ハ立法議院ノ手ニ在リ。立法議院ハ、元

波蘭、公選王國ニ變ス
波蘭選舉王政ノ組織

老院即チ重

セキヤムス、カフ、チフ、ノールス

貴族院ト、代議院即チ代議貴族院

他ノ貴族ノ代議士トシテ出席スル貴族ヨリ成レル議院ナリ

トチ以テ成リ立チ、此ノ二院ト、王トチ以テ波蘭國會ヲ組織ス。波蘭國會ハ、毎二年ニ一回開會スルヲ常トスレバ、別ニ明文ノ存スルアルコアラズ、王ノ意ニ隨フナリ。左レハ王若シ開會ヲ欲スルキハ、議員ニ向テ召集狀ト議案トヲ送附シ、貴族ハ相會シテ、各貴族領毎ニ三人ノ議員ヲ選ビテ、之ニ代議士トシテ處置スベキ大綱ヲ訓示ス。愈々開會ノ期日到來スレバ、國王、元老、及ビ代議士ノ三者ハ、議場ニ集マリ、議場ハ、概チ首府ワルソトニ設ク。一小室ニ會シテ議事ニ着手ス。此ノ際、坐次又ハ應接等ニ關シ、尊卑ノ別極メテ嚴コシテ、何人モ敢テ之ヲ犯スモノナケレドモ、立法上ノ權力發育ノ權等チ云フニ至リテハ、皆同一様ニシテ、毫モ區別アルコトナシ。初メ波蘭國會ハ誠心誠意以テ一般ノ利益ヲ進歩スルヲ目的トシタリシガ、晩年漸ク腐敗シテ射利ヲ目的トスルニ至レリ。

波蘭國會ニハ、馬鹿ヲシキ習慣アリテ、爲メニ議事ノ活氣ヲ失ヒ、立法官

ノ勢力ヲ滅殺シタリシヲ笑止ナル。今一二ノ例ヲ舉レバ、第一會期ヲ嚴コク大週間ト定メ、此ノ期限ヲ過グルキハ、如何ニ最重要ナル事務ガ半バニ止マルモ、議院ハ茲ニ閉會ヲ告グ、第二何事ニ依ラズ、之ヲ可決センニハ滿場ノ同意ヲ要スルガ故ニ、最良ノ策ト雖ドモ、多クハ通過スルコトヲ得ズ、只各議員ノ心ヲ悅バシムヘキモノ、ミ通過セラル、ノ類是レナリ。是ヲ以テ、折角議院ガ六週ノ間、心力ヲ疲ラシテ、議シタル事項モ、只一人ノ反對者アルガ爲メニ、全ク水泡ニ歸スルコト多シ。是レ實ニ國家ノ

振興セザル所以ノ原因也。

又王ガ國家ニ對スル權力ハ甚微弱ニシテ、憫ムニ堪エタリ。而シテ其ノ意見ガ議場ノ批評ヲ免カレザルコトハ、通常ノ議員ニ異ナラズ。代議士ハ貴族領ヨリ選舉セラレタルモノ、外、又都會ノ地ヨリ選舉セラレタルモノ、亦貴族アリ。又普魯士普魯士ト云ヘル地也、亦當時波蘭領タリ。蓋キニ子ガ網羅セシ「普魯戰史」ニ據レハ、普魯士王ノ祖先アラントアルガ侯アルベルト、四層一五二五年モノナリ。

(我が大永五年乙酉、即チ足利十二代將軍義隆ノ時)ニ、波蘭王シグマンドヨリ、普魯士ノ地ヲ受ケテ普魯士公ニ封セラルト云ヘリ。左レハ、此ノ頃普魯士公ハ、波蘭王ガ配下ノ貴族トシテ波蘭ニ隸屬シ、普魯士モ亦波蘭ノ屬地タ

ヨシナニハ、別ニ立法議院ノ設ケアリシカド、波蘭王選舉ノ場合ノ如キ、最モ重大ノ場合ニハ、國會ニ代議士ヲ送リタリキ。
 以上掲グル所ハ、即チ第一頁第七行以下掲グル所ヲ云フ十六世紀ヨリ十八世紀ニ至ル迄ノ波蘭國政体ノ概畧ナリ。而シテ當時ノ政体ハ、所謂貴族政治ニシテ、貴族ノ選ヘル議員ト官吏トヲ以テ國政ヲ料理セシメ、奴僕ノ如キハ、タトヒ國ノ本ヲリ、勞力ニ由リテ全社會ヲ維持スルモノタルニモ拘ハラズ、唯々諾々トシテ貴族ノ命ニ維レ從ヒ、毫モ参政ノ權ヲ有スルヲ能ハザリシナリ。

前既ニ述ベシ如ク公選王國ト爲リテヨリ、始メテ王ニ選ハレタルハ、ア
 ンジョー公ヘンリー又ツアロンヘンリー(Henry of Valois)ト云フ。ナルガ、此ノ王ノ治世ハ甚短カリ
 キ。何トナレバ、此ノ王位ニ即キテ後僅ニ一年、佛王シャール九世崩シテ
 嗣子ナク、佛王ノ崩シタルハ、西曆一五七四年(我カ天正二年甲戌)即チ滿洲朝創始(一五八六年)ノ事ナリ。遺命シテヘンリーニ佛王ノ位
 ヲ讓リシカバ、ヘンリーハ、波蘭王タルヨリモ、寧ロ佛王タランヲ望ミ

波蘭王ヘンリー
 其位ヲ去ル

スチアブ、
 トリ王位ニ
 即ク

テ竊カニ波蘭ヲ逃レ、波蘭王ノ位ハ空虚ト爲リタレバナリ。是ニ於テ西
 曆一千五百七十五年我カ天正三年乙亥諸侯相議シ、スチアブ、バトリイ(Stephen Bat-
 hoti)西曆一五三二年(我カ天文元年壬辰)生レ、同一年(我カ天正十四年丙戌)崩ス。ヲ選ビテ王ト爲ス。スチアブ、バトリイハ
 智勇ヲ兼備シ、藝キニ徹々タル匈牙利ノ貴族ヨリ主權アルトランシル
 ヴニア公ノ位ニ昇リタル人ナリ。
 バトリイ王ノ治世ニ於ケル波蘭ノ名譽ハ、露國ト久シク干戈ヲ接エテ
 遂ニ戰勝ヲ博シタルニ在リ。王ハ嘗ニ其ノ襲來ヲ防ギタルノミヲ以テ
 足レリトセズ、我レヨリ進ンテ莫斯科ノ中心ニ侵入シ、大ニ之ニ勝チテ
 數多ノ分捕品ヲ携ヘテ凱旋セリ。莫斯科ノ戰終ルヤ否ヤ、王又驍勇ナル
 騎兵ヲ用井テ、國ノ東方ニ境ヲ接スル韃靼人ヲ撃テ、之ヲ懲ラシテ、再ヒ
 國邊ニ寇スルヲ能ハザラシメ、コサツク兵ヲ從ヘテ之ニ技術及ヒ其ノ
 他文明ノ生活ヲ教ヘタリ。晩年瑞典人亦露人ニ倣ヒテ、波蘭ニ屬スルハ
 ルナツク海濱ノ地ヲ畧セント謀リシカバ、王之ヲ邀ヘ撃ントシテ其ノ

波蘭王ノ候補者四人

準備ヲ整ヘツ、アリシガ、偶々病ニ罹リテ崩セリ。實ニ一千五百八十六年在リナリ。

ハトリ王ノ崩後、波蘭王ニ選ハレント欲シテ候補者ト爲リタルモノ四人アリ。其ノ二人ハ、埃地利家ノ親王ニシテ、一人ハ莫斯科帝即チ露ノ

オドル、イウアノウヰツナ(Fedor Ivanovitch)又一人ハ、瑞典王ヨン三世

シスマンド三世

(John III.)ノ公子シスマンド、ヅアサ(Sigismund Vasa) 四曆一五六六年(我カ永祿九年丙寅)生、同二六三二年(我

カ寛永九年壬申)崩ス。ナリ。左レバ此ノ選舉ニ就テハ、激烈ナル争アリシガ、シスマン

ド、ヅアサ遂ニ選ハレテ王位ニ昇レリ。之ヲシスマンド三世ト云フ。此

ノ王位ニ即キテヨリ、四十五年ノ間、波蘭ニ君臨シ、其ノ間、波蘭ノ政治史

ハ、常ニ露西亞、及ヒ瑞典ノ政治史ト混合セリ。左レド長文ニ渉ルノ恐レ

アルヲ以テ之ヲ畧ス。

一千六百三十二年在リ王崩シ、太子ウラヂスラス(Vladislas)萬人ノ同意ヲ

以テ王ニ選ハレ、同四十八年我カ慶安元年戊子ウラヂスラス崩シテ、太弟ウヨン、カ

ウラヂスラス王

カシミル王

シミル(John Casimir)選ハレテ王位ヲ嗣グ。ウラヂスラス王ノ治世ハ、露西

亞人、土耳其人、瑞典人ト戦争ノ絶エザルヲ以テ世ニ知ラレシカド、カシ

ミル王ノ治世ニ至リテハ、韃靼人、コサツク人ノ來襲アリ、且ツ此ノ來襲

ト同時ニ、貴族ノ謀叛、奴僕ノ暴動アリタルヲ以ツテ、更ラニ一層世ニ知

ラレタリ。カシミル王ハ、人ト爲リ、國王タルニ適セズシテ、寧ロ遁世ノ僧

侶ニ適シタリシガ、同六十八年我カ寛文八年戊申位ヲ辞シテ佛國ニ退隱シ、同七十

二年我カ寛文十二年壬子同國セント、ゼルマイン寺院ニ崩セリ。是レヨリ先キ、前王ノ

代ニ、波蘭ハ、露人ノ爲メニ若干ノ地ヲ奪ハレシガ、王ノ時ニ至リテ、又ア

ランデンブルグ(即チ今ノ普魯士國ノ萌芽)ガ獨立國ト爲リタルヲ以テ

從來アランデンブルグハ、更ニ一層縮小シタリキ。

波蘭ノ版圖ニ属セシナリ。

カシミル王位ヲ遜レテ後、二年ノ間、波蘭ハ、輓近ノ兵乱ト、王位相續ニ關

スル陰謀トニ由リテ、國內頗ル動搖セシガ、同七十年我カ寛文十年戊戌小諸侯強盛

ナル徒黨ヲ組ミテ、ミカエル、ウヰスニオウヰ(Michael Wisniowiecki)

ウヰスニオウヰ
井一キ王

土軍ノ來襲

土耳其ト耻ツ
ベキ條約ヲ結
ブ

ソビエスキ王

ナ王ニ選ベリ。ウヰキスニオウヰキハ、人ト爲リ、甚タ愛嬌アレドモ、昏愚
 ニシテ年尙少カシ。此ノ王選ハレテ位ニ即クヤ、大諸侯ハ、大ニ不滿ヲ懷
 キテ、將ニ内乱ヲ起サントス。偶々土耳其ノ大敵襲ヒ來レルヲ以テ、同胞
 昨日ノ不和ハ忽チ解ケテ、今日ノ一致團結ト爲リ、高キモ、卑キモ、氣力ノ
 有ラン限リヲ盡シテ以テ共同ノ敵ニ當ラントセリ。然ルニ土耳其人ハ
 無數ノ大軍ヲ率ヰテ、東南ノ境ヨリ侵入シ、破竹ノ勢ヲ以テ攻メ來リシ
 ガバ、波蘭將帥ノ才幹モ、部下兵士ノ勇氣モ、其ノ鋒ニ當ルヲ能ハズ。同七
 十二年<sup>我カ寛文十
二年王子</sup>和ヲ乞フテ、耻ツベキ條約ヲ結ビ、此ノ條約ニ由リテ、波蘭
 ハ土耳其ニ若干ノ土地ヲ割讓シ、且ツ毎歲二萬二千ダカツト<sup>凡ソ我カ五ノ
萬圓ニ當ル</sup>貢ヲ土耳其帝ニ納ル、トナ約セリ。

既ニシテ波蘭貴族ハ、頗ル此ノ條約ヲ耻トシ、死ヲ決シテ、土耳其ト血戰
 セントス。是ノ時ニ當リテ、波蘭國ノ命脈ハ、一髮千鈞ヲ引リガ如クナリ
 キ。幸ニシテ、此ノ瞬間ニ於テ、ウヰキスニオウヰキ王崩シ、シヨソソビ
 エスキ(John Sobieski)選ハレテ王ト爲リシカバ(ソビエスキガ王位ニ即キ
 タルハ、西曆一千六百七十四年<sup>我カ延寶
二年甲寅</sup>ノ事ナリ)能ク禍ヲ轉シテ福ト爲
 スヲ得タリキ。

第三章

シヨソソビエスキ王、即チシヨ

ソ三世ノ傳并ニ治世

シヨソソビエスキハ、一千六百二十九年<sup>我カ寛永
六年己巳</sup>ノ夏ヲ以テ、オレスコニ
 生ル。オレスコハ、リチニアニアト、波蘭トノ境ニ聳ユルカーパミアン山
 麓ブラツク、ルシアノ一小都會ニシテ、最モ高キ高原ノ中央ニ位スル地
 ナリ。其ノ家ハ貴族ニシテ、父ハ、クラコーノ城代ヲ勤メ、大ナル封土ヲ領
 シ、母ハ波蘭最モ有名ナル將軍ノ一人ツアルキウスキ(Zaleski)ニシ、<sup>シヨソソ
三世</sup>
 ノ時、露軍ヲ撃チテ大ニ^{ノ時、露軍ヲ撃チテ大ニ}ノ子孫ナリ。シヨソソビエスキ幼キ時、兄マールク(Marek)ト共ニ父
 ノ領地ニ人ト成リテ、高位ノ人ニ相應ハシキ教育ヲ受ケ、十六歳ノ時、兄

シヨソソ、ソビ
エスキノ少時

ソビエスキ、
國ノ爲メニ戦
フ

ソビエスキ、
司令官ニ任ス

ソビエスキノ
武名全歐羅巴
ニ轟カ

弟相携ヘテ巴里ニ遊學シ、一時ノ間、路易十四世(Louis XIV)ノ近衛士
官タリ。既ニシテ佛國ヲ去リ、亦兄弟相携ヘテ伊太利ニ遊ビ、次テ土耳其
ニ遊ベリ。但シ其ノ頃ハ、波土兩國未ダ戦ヲ交エザリシナリ。
ソビエスキ兄弟ガ君士但丁堡コンスタンチノープルニ在リシ時、適々本國ニ於テ奴僕ノ一揆
起リ、且ツコサツク人來リ襲ヒシカバ、兄弟ハ此ノ報ニ接スルヤ否ヤ、急
ニ國ニ歸リテ波蘭軍ニ入り、ジョン、カシミール王ノ爲メニ力ヲ竭シタリ
キ。其ノ後、韃靼戰ノ時、兄マールクハ、不幸ニシテ戰死セシガ、ジョン、ソビエ
スキハ、猶依然トシテ戰爭ニ從事シ、漸ク其ノ官職ヲ進メ、西曆一千六百
六十年我カ萬治
三年庚子露軍ガ國ノ東邊ニ寇スルニ當リテハ、征討軍ノ司令官ニ
任セリ。

此ノ役コ、ソビエスキハ、露將シエレメトツフ(Sheremetof)ヲ、スロバヂツ
サニ撃チテ大ニ之ヲ敗リ、非常ノ大捷ヲ博シタリシカバ、其ノ武名ハ忽
チ世界ニ轟キ、全歐到ル處彼レガ名ヲ知ラザルモノナキニ至レリ。

ソビエスキ、
大臣大將ニ任
ス

波蘭ノ滅ビザ
リシハ、ソビ
エスキノ力ナ
リ

爾來六年ノ間ニ、彼レノ名聲ハ益々高キヲ加ヘ、波蘭全國其ノ右ニ出ル
者ナキニ至リシカバ、波蘭王ジョン、カシミールハ、先ツ彼レヲグラント、マ
ーシャル我カ内閣總理大臣
ノ如キモノナリニ任シ、其ノ後又グラント、ヘットマン我カ陸軍大將ノニ
如キモノナリ
兼任セリ。甲ハ最高等ノ文官ニシテ、乙ハ最高等ノ武官ナリ。此ノ二官ヲ
兼スルハ、波蘭未曾有ノ事ナリシト云ヘリ。我カ邦ニテ、保元平治ノ昔、大臣、大
將ヲ兼任スルノ難カリシガ如シ。而シ
テ波蘭王ハ、一タビソビエスキニ此ノ二官ヲ兼任セシメタル以上ハ、再
ヒ之ヲ免ズルコト能ハザリシナリ。何トナレバ、波蘭ノ憲法ニ於テ、王ハ榮
譽ヲ人ニ與フルコト得レドモ、之ヲ再ヒ奪フコト能ハザレバナリ。
千六百六十七年我カ寛文
七年丁未コサツク軍、韃靼軍再ヒ波蘭ニ來寇シタリシガ、
此ノ時ソビエスキハ陸軍元帥前ニ記セシグラント、
ヘットマンノ事ナリトシテ拒戦ノ責ニ任シ、自
費ヲ抛チテ、二萬ノ兵ヲ集メ、躬ラ之ヲ率テ、遊ヘ撃チテ大ニ敵ヲ敗リシ
カバ、敵周章狼狽シテ和ヲ乞ヒ、事茲ニ平ラグヲ得タリ。此ノ時ニ當リテ、
歐洲各國ハ、波蘭必ラズ大軍ノ爲メニ覆滅ノ禍ヲ免カレザルベシト期

シタリシガ、其ノ豫期ニ反シテ、波蘭ガ能ク社稷ヲ全フスルヲ得、却テ敵
ヲシテ我レニ和ヲ乞ハシムルニ至リシハ、一ニソビエスキノ力ト謂ハ
ザルベカラズ。

シヨーン、カシミル、王位ヲ辞シ、暗弱ナルウヰスニオウヰキ其ノ位ヲ繼
グニ及ビテ、ソビエスキハ、猶陸軍元帥ノ任ヲ帶ビテ、土耳其征討軍ノ總
督タリ。一千六百七十一年我カ寛文十一年辛亥、七十二年我カ寛文十二年壬子ノ役ニ、勁敵ヲ敗リテ
奇功ヲ奏セシカバ、土軍一人トシテ舌ヲ捲キテ驚嘆セザルハナカリキ。
然レドモ當時滿朝皆昏愚ニシテ治道ニ疎ク、士民ヲ懷ケ、心ヲ一ニセシ
ムルノ術ヲ知ラザルニ依リ、一ノソビエスキアリト雖モ、焉ンゾ能ク腐
懲ノ功ヲ全フスルヲ得ン。前章既ニ叙述セシ如ク、波蘭國會ハ、土耳其帝
ニ向テ和ヲ請ヒ、耻ツベキ條約ヲ結ビ、又國內ニハ騷乱各處ニ起リテ、貴
族、奴僕、僧侶互ニ相爭ヒ、貴族ノ大半ハ、徒黨ヲ結ビテ、王ヲ廢シ、政府ヲ顛
覆セント企テケルニゾ、誠實ナルソビエスキハ、己レガ國家ニ執掌スル

ソビエスキノ
奇功

ソビエスキ、
時勢ノ如何ト
モ爲シ難キヲ
察シテ、郷里ニ

退リ

革命黨

ノ無益ナルヲ悟リ、ワルソ一ヲ去リテ菜地ニ退キヌ。

是ノ時ニ當リテ、革命黨前ニ記セシ、徒黨ヲ結ビテ、王ヲ廢シ、政府ヲ顛覆セント企テケル所ノ貴族等ヲ云フハ、ワルソ一府ニ在リ

テ、ミツカテ『勤王同盟』ト稱シ、憲法ヲ全ク改正セント謀レリ、國會ニ於

テ議スルヲ得ザル所ノ目的ヲ達セント欲スルハ、相集リテ徒黨ヲ結

ブハ、波蘭貴族得意ノ慣手段ナリ。ソビエスキノ私敵ハ、此ノアリサマヲ

見テ奇貨居クベシト爲シ、彼レヲ謀叛人ナリト誣ヒテ、此ノ團體ノ前ニ

訴ヘシカバ、ソビエスキハ、團體ノ爲メニ召喚セラレテ、ワルソ一ニ出テ

シガ、數十名ノ大貴族、數聯隊ノ騎兵ハ、彼レヲ慕フノ餘リニ、其ノ身邊ニ

災アラントテ慮リテ、一同ニ之ニ伴ヒケルニゾ、法廷即チ勤王同盟モ、告訴人モ、恐

レテ只默然タルノミナリキ。是ニ於テ、ソビエスキハ、波蘭國總理大臣前

肥セシ、グラント、マ一シヤルノ事ナリ、タルノ資格ヲ以テ、『勤王同盟』ト云ヘル團體ノ國法ニ背

ケルヲ咎メ、之ヲ舊來ノ國會ニ復セシムベキ旨ヲ諭シ、彼レ等ヲシテ其

ノ旨ニ遵ハシメ、又彼ノ告訴ノ全ク誣妄ナル所以ヲ一々辨解シケレバ

ソビエスキ、
革命黨ノ逆黨
ヲ實メテ之ヲ
舊來ノ國會ニ
復セシム

ソビエスキ、
波蘭ノ爲メニ
會稽ノ耻ヲ雪
ガント論ス

ソビエスキ、
土軍ヲ敗リテ
波蘭ノ爲メニ
會稽ノ耻ヲ雪
ガント論ス

告訴人ハ震慄シテ、面色土ノ如ク、遂ニ死刑ニ處セラレタリ。
ソビエスキ又此ノ辨解ノ後、陸軍元帥タルノ資格ヲ以テ、曩キコ土耳其
ト結ビタル條約ノ最モ國體ヲ毀損スベキモノタルヲ論ジ、速ニ之ヲ解
キテ以テ彼ノ國ト雌雄ヲ戰場ニ争ハントヲ勸告セシコ、聽ク者悉ク之
ガ爲メニ感動セラレ、一同熱心ニ彼レノ説ヲ嘉納セリ。
是ヲ以テ、ソビエスキハ、百方力ヲ竭シテ三萬ノ軍ヲ集メ、土耳其ニ向テ
進行シ、コトシノ城ヲ圍ミテ遂ニ之ヲ陥レタリ。此ノ城ハ土耳其其堅城ノ
一ニシテ、敵精兵ヲ簡ビテ之ヲ守リタレバ、從來侵シ難シト稱セラレタ
ルモノナリ。ソビエスキ猶モ進ミ擊テ、モルダヴ、及ビワラシアノ
兩地ヲ占領シケレバ、土軍多惱河ヲ涉リテ退キ、河北復ターノ土軍ナキ
ニ至レリ。西洋ノ史家ガ稱シテ「歐洲人一同ニ、基督教國ガ異教國ニ對シ
テ、三百年來未曾有ノ大捷ヲ得タルヲ、上帝ニ感謝シタリ」ト云フハ、此ノ
時ノ事ナリ。波蘭軍、勝ニ乘ジテ益々進行セントシタリシニ、會々ウヰス

ウヰスニオウ

井一キ王崩御

選王會

ニオウ井一キ王崩御ノ報、陣中ニ達セシカバ、新王選舉ノ會ニ列ラント
欲シテ、諸軍悉クワルソ一ニ歸リケル。王ハ林檎ヲ過食シタルニ依リテ
病ヲ得、遂ニ崩御シタリト云ヘリ。
ソビエスキト、彼レニ征土ノ役ニ從ヒタル諸貴族トガ、ワルソ一ニ歸ル
ヤ、選王會ハ、早既ニ開ケタリ。而シテ選舉人ノ多數ハ、兩様ニ分カレ、一ハ
ロルライ子公チャールス(Charles, Duke of Lorraine)ヲ選ハントシ、埃國之
レガ後援タリ。又一ハ、ノユブルグノフ、キリツフ(Philip of Neuburg)ヲ選ハ
ントシ、佛王路易十四世之ガ後援タリ。但シ兩候補者共ニ外國人ナルコ
ソウタテケレ。况ンヤ、貴族ハ多ク腐敗シ、而ソ外國ノ黄金ト、外國ノ勢力
トハ會場ヲ左右スルニ於テチヤ。左レハ選舉人ハ埃國ノ候補者ルス、右
選ハントスル者多ク、今ニモ彼レハ當選センズ有様ナリシガ、會々此ノ
時ソビエスキハ、議場ニ入り來リテ、コンデ公(Prince of Conde)ニソ然ルベ
シト述べケレバ、忽チ一場ノ激論ヲ生シケル。然ルニ此ノ激論ノ最中ニ、

ソビエスキ、
選ハレテ王位
ニ昇ル

萬般ノ改良ニ
着手ス

王ノ大目的

「波蘭ヲ統治スル者ハ波蘭人ヲラザルベカラズ」ト絶叫スル一人ノ貴族アリ、此ノ人猶モ聲ヲ厲マシテ「ソビエスキヲ選ブベシ」ト論セシガ、此ノ論多數ノ意氣ニ投合シケレバ、ソビエスキ遂ニシヨーン三世(John III)ノ名義ヲ以テ波蘭王ニ選ハレタリ。實ニ一千六百七十四年我カ延寶二年甲寅ナリ。ソビエスキ、波蘭王ノ位ニ即クヤ、直チニ萬般ノ改良ニ着手シ、貴族ノ教育ニ關スル制度ヲ設ケ、兵數ヲ増加セリ。當時土耳其ノ勢猖獗ニシテ、歐洲ヲ震懾セシメ、就中波蘭ノ如キハ、輒モスレバ饑饉ヲ免カレ難ク、最モ危険ノ地位ニ立テリ。然ルニ王ノ大膽ナル、我レヨリ進テ彼レヲ攻撃シ、百戰百勝ノ勢ヲ以テ彼レヲ歐洲ヨリ驅逐シ、若シ能フベクンバ、ビザンチン帝國ビザンチン帝國トハ、東帝國ト云フ義ニテ、今ノ歐羅巴土耳其ナリ。ヲ恢復セント企圖セリ。王ハ、此ノ大目的實行ノ事ニ一心ヲ委テ、歐洲諸大國ヲ聯合セシムルヲニ勉メタリキ。而シテ土耳其人ハ、既ニ伊太利ヲ侵襲セントシ、曾テ君士但丁堡コンスタンティノブルヲ略取シタルガ如ク、羅馬ヲモ略取セント謀レルガ故ニ、羅馬法王ノ如キハ、オノ

王屢々土軍ト
戰フ

土耳其ノ大軍
來寇ス

ツカラ王ノ計畫ニ同意ヲ表シ、熱心ニ之ヲ贊成セリ。

爾來王ハ屢々土軍ト小戰闘ニ從事シタルノ後、更ニ一大戰爭ヲ開カント欲シテ、專ラ其ノ準備ニ忙ハシカリキ。然ルニ其ノ準備ノ未ダ整ハザルニ先チ、ダマスカス府亞細亞土耳其ノ一府ノ副王副王ハ、土耳其領内ノ諸州ニ在リ。土耳其帝ヨリ各府ノ權ヲ掌握スルモノナリ。三十萬ノ兵ヲ率ヰテ、波蘭ノ國境ニ現ハレ、一ト呑ミニ波蘭ヲ呑ミ盡サントセリ。王僅々一萬未滿ノ兵ヲ集メテ、ノステル河岸ノ二小村ニ位置ヲ占メ、二十日ノ間、砲撃ニ抵抗シテ、糧食彈丸ノ既ニ盡キタルヲモ物トモセズ、敵ヨリ擊テタル大小彈ヲ拾ヒ集メテ、之ヲ我カ銃砲ノ中ニ投シ、之ヲ以テ十重二十重ニ圍メル寄セ手ヲ擊テ惱マセシカバ、寄セ手ハ驚キ恐レテ漸ク砲撃ヲ見合セタリ。既ニシテ一千六百七十六年我カ延寶四年丙辰十月十四日ノ早朝ニ至リ、土軍ハ波蘭軍ガ隊伍ヲ乱サズ、整々トシテ岩外ニ出テ、正サシク勝利ヲ確信スルノサマヲ爲セルヲ見タリシカバ、此ノ處、無名氏ノ筆ニ成リタル波蘭史(History of Poland)ト題スル一小冊、但シ英書ニ據ル。忽チ宗教的疑悞ノ念ヲ生シ、以爲ラ

土軍恐怖

ク「是レ決シテ凡人ノ爲シ能フベキ所ニアラズ。彼ノ王コソ必ラズ妖術師ナラメ」ト。誰レ言フトナク「妖術王」コト向ヒテ、由シナキ怪我ヲ爲セソト叫ビケル。副王ハ、流石ニ斯ル馬鹿ヲシキ考ヘチモ懐カザレド、部下ノ兵士ガ既ニ恐怖ノ心ヲ起シタル以上ハ、逆モ必勝チ期シ難ク、殊ニ敵ハ、近日援兵來ルトノ噂ヲモ聞キ込ミタレバ、止ムヲ得ズシテ和議ヲ申込ミ、又波蘭軍ノ方ニ於テモ、之ヲ承諾シケレバ、難テ和議成リテ、ソビエスキ王ハ、喝采ノ間ニ歸京シヌ。

兩軍緩和

施治ノ困難

爾來七年ノ間ハ、泰平無事ナリシカバ、ソビエスキ王銳意シテ國政ヲ改革セリ。然レドモ、當時波蘭ノ貴族ハ、門地ヲ恃ミテ兎角王命ニ抗シ、王ノ名譽ヲ妬ミテ、輒モスレバ之レヲ傷ケント好ミ、王ガ折角國益民利ヲ謀リテ行ハントセラル、トモ、或ハ王權ヲ増サンカチ危ブミテ之ヲ妨グルモノアリ。王ノ施政モ亦困難ナリキ。王又憲法ノ欠点多キヲ感シ、就中如何ナル妙案名法モ滿場ノ同意ヲ得ザレバ、之ヲ實行スルヲ能ハザル

皇后ノ隱謀

王、外戰ニ由
テ却テ心ヲ
休ムルヲ得
タリ

土軍、據軍ヲ
終フ

佛土、謀ヲ通
ス

ノ一事ハ弊害ノ最モ甚シキモノナレバ、是非トモ之レヲ改メザルベカラズト思考シ、朝暮心ヲ勞シケル。然ルニ皇后マリイ(Mary)ハ、陰險ノ婦人ニシテ、隱謀ヲ企テケレバ、王ガ心ヲ痛シムルヲ更ラコ一層深カリキ。既ニシテ一千六百八十三年我カ天和三年癸亥土耳其復ク基督教國ニ寇セシカハ、王ハ兵士ヲ率非テ戰場ニ出テタリ。此ノ役ヤ、其ノ外觀上ニ於テハ、王ノ苦心ヲ増シタルニ似タリト雖モ、其ノ實ハ、姦徒ノ心ヲ暫ラシ外ニ向ハシメ、聊カ王ノ配慮ヲ休マシメタルモノナリ。

土耳其人ハ、空前ノ大軍ヲ以テ基督教國ノ地ヲ侵畧セントシ、久シク其ノ準備ヲ整ヘタリ。而シテ其ノ銳鋒ヲ向シベキ点ハ、波蘭ニアラズシテ、埃地利ナリキ。今其ノ理由ヲ尋ヌルニ左ノ如シ。

ソモ佛王路易十四世ハ、好猜ナル兵畧家ナレバ、土帝ト結託シテ隱謀ヲ運ラシ、手ヲ土軍ニ借リテ、我カ敵國ヲ襲撃シ、其ノ勢力ヲ滅殺セント欲シ、且ツ土軍ノ勝利ヲ確乎ダラシメンガ爲メニ、竊カニ波蘭貴族ニ向テ

奸計發覺

ソビエスキ王ノ
機密ヲ叛徒チ
謀ニ從事セシ
征

謀叛ヲ煽動シ、ソビエスキ王ノ廢位ヲ企テシメリ。何トナレバ、土軍ノ恐
ル、所ハ、獨リソビエスキ王ノミナルガ故ニ、王ヲ退クルキハ、戰捷ヲ必
トスルヲ得ベケレバナリ。然ルニ、ソビエスキ王ハ、或ル手段ヲ用キテ、佛
公使ヨリ路易王ニ宛テタル密書ヲ得タリシカバ、路易王ノ奸計悉ク此
ノ密書ノ爲メニ發覺シタルコソ笑止ナレ。

是ニ於テソビエスキ、國會ヲ召集シテ、議場ニ彼ノ密書ヲ朗讀シタリ。此
ノ密書ニ由レバ、今現ニ議場ニ列席セル貴族ノ中ニモ連累者ノ多キ事
ハ、固ヨリ判然タレドモ、ソビエスキハ、故サラニ、コハ何カ間違ナルベシ
ト稱シ、朕ハ彼レ等ガ不忠不義ノ徒ニアラザルヲ確信スト述ベ。左ハ左
リナガラ卿等ハ萬民チシテ卿等ガ叛徒ニアラザルヲ信セシメシメ、ガ爲
メニ、率先シテ土軍追討ニ從事セザルベカラズト勸告シ、遂ニ滿場ノ同
意ヲ經テ、土耳其軍ニ向テ開戦ヲ宣言シタリ。

是ノ時ニ當リテ、土軍ハ、大臣カラ、マスダンノ(Kara Mustafa)之ヲ率キテ

土軍、奧國ニ

編隊ヲ極ム

匈牙利ノ平地ヲ襲撃シ、將ニ埃都維也納ニ向テ進入セントス。歐洲各國
之ヲ聞キテ一驚ヲ喫セザルハナシ、中ニモ獨逸帝レオポルト(Emperor
Leopold)ハ、周章狼狽シテ、全宮廷ヲ率キテ、維也納ヨリ逃レ、防禦ノ
任ヲ一切ロルライチ公ナヤールスニ委テリ。チヤールスハ、幾キコソビ
エスキト波蘭王位ヲ争ヒタル人ナリ。第二十五頁七月十五日、四一六土軍愈
々維也納ヲ圍メリ。ソビエスキニアラザレバ、基督教國ヲ助ケ得ベキモ
ノナカリキ。獨逸帝モ、羅馬法王モ、續々使節ヲワルツ。波蘭ノ送リテ、切
コソビエスキ王ノ來援ヲ乞ヘリ。然レドモ埃地利ハ、當時波蘭ト交親國
ニアラズ、殊コソビエスキ王ノ爲メニハ、寧ロ怨ヲ懷カル、コソハアルト
モ、決シテ好意ヲ以テ迎ヘラル、コソハアラザルベシト信スルガ故ニ、必
定應援ヲ謝絶セラル、ナラント思考シ、維也納ヲ既ニ敵ニ取ラレタル
ノ念ヒテ爲シテ、上下一同ニ悲メリキ。左レド、ソビエスキハ、土耳其人チ
以テ歐洲舊來ノ讐敵ト爲シテ深ク之ヲ憎ミ、基督教國ノ爲メニ必ラズ

シヨン、ソビエスキ王、即チシヨン三世ノ傳并ニ治世

之ヲ驅除セザルベカラズト思フガ故ニ、瑣々タル一身上ノ怨ミ、若クハ
基督敎國相互ノ政畧ノ如キハ、一切之ヲ顧ミズ、斷然征討ニ從事セント
決意シ、諸軍ヲ催促シテ維也納府ヘト向ヒケル。時ニ一千六百八十三年
我カ天和三年癸亥九月ナリ。歐洲各國ハ、此ノ報ヲ聞キテ、勝敗如何ヲ氣遣ヒ、安キ心
ハナカリシト云フ。

波蘭同盟軍維也納ニ向フ

ソビエスキ王ノ軍ハ、ヘールブルグノ於テ、ロルライチ公チヤールスノ軍ト聯
合シ、九月十一日ヲ以テ、カレムブルグ山ノ巔ニ達セリ。其ノ維也納ヲ瞰
下シ、同府附近ニ群集セル土軍ノ狀況ヲ視察スルヲ得ベキヲ以テナリ。
翌十二日、波蘭王先ツ例ノ如ク、讀經ヲ聽キ、聖餐ニ陪食シタルノ後、山ヲ
下リテ、群ガル敵軍ノ中ヘ突進セリ。敵軍、王ノ名ヲ聞キ驚キテ城濠ノ中
ニ逃ケ籠レリ。王固ヨリ陣ノ固クシテ容易ニ敗ルベカラザルヲ信ス
ルガ故ニ、當日ハ兵ヲ休メ、明日ヲ以テ大舉シテ之ヲ拔カント決セシガ、
偶々午後五時、豫テ敵ノ城中ヘ入り込マセ置キタル間諜ヨリ、カラ、マス

波蘭王大ニ土軍ヲ敗ル

タフア土軍大將ガ閑暇無聊ノ様子ヲ報シ越シ、彼レハ華麗ナル天幕ノ中ニ於
テ、喜樂ニモ其ノ二子ト共ニ珈琲ヲ飲ミツ、アル由ヲ告ゲ來リシカバ、
王ハ此ノ機ニ乘シテ、彼レノ不意ヲ擊クント思ヒ立チ、直チニ諸軍ニ總
攻撃ノ令ヲ傳フ。諸軍ハ急ニ其ノ準備ヲ整ヘ、三部ニ分レテ、敵ノ中隊、及
ヒ左右翼ヲ同時ニ攻撃シタリシガ、敵軍ニ於テハ、韃靼兵、コサツク兵等
豫テ波蘭王ノ容貌ヲ知レルモノカラ、王ガ陣頭ニ進ムヲ見テ大ニ驚キ、
退テ之ヲ己レガ陣中ニ報ス。是ニ於テ甲告ケ、乙傳ヘテ、土耳其軍中、一人
トシテ恐怖セザルモノナク、是レ迄半信半疑ノ間ニ在リシ大將カラ、マ
スタフアスラモ、波蘭王眞ニ來レリト知リテ、殆ント絶望ノ域ニ陥リ、長
大息スラク。噫、妖術師ソビエスキ指スナリ。第廿八頁ヲ參看スベシ。果シテ敵ノ軍中ニ在ルカ。然ラバ
我カ事畢レリ矣。此ノ瞬時ニ際シテ、波蘭ノ騎兵ハ、上帝我カ波蘭ヲ助
ケ給フト叫ビツ、城壕ヲ超エテ敵ノ營中ニ侵入シタリシカバ、土軍辟
易メテ敢テ之ニ當ルモノナク、四土路ニ爲リテ隊伍ヲ乱シ、カラ、マス

ツヨシ、ソビエスキ王、即チツヨシ三世ノ傳并ニ治世

波蘭王ノ美名
全歐ニ輝ク

フアモ亦乱軍ノ中ニ捲キ込マレテ、思ハズ逃レ走り、奥國ノ領内復ター
 人ノ敵ヲ見ズ、歐羅巴ハ辛クモ、波蘭王一人ノ爲メニ助ケテレタリ。此ノ
 ハ、英國發見「四季發刊外國評論」(Foreign
 Quarterly Review)ノ語ヲ其ノ儘引用ス。

波蘭王ハ、此ノ大捷ノ後、軍ヲ率ヰテ維也納ニ入り、寺院ニ詣リテ神恩ヲ
 感謝セリ。王ガ禮拜堂ニ到リテ壇上ニ跪キシ時、機智ニ長ケタル一僧、聖
 書ノ句ヲ其ノ儘ニ借り用ヰテ、茲ニ神ノ遣ハシ給ヘルヨハネ約翰ト云ヘル者
 アリ」新約聖書約翰傳ノ句ナリ。ソビエスキ王ノ名チ
 ツヨシト云ヒシ故ニ、此ノ句ヲ用ヰタルナリ。ト高ラカニ讀ミ上ケケレバ、忽チ電
 氣的ノ作用ヲ以テ、聽客一同ノ心ヲ感動セシメ、皆涙ヲ流シテ退出シケ
 ル。既ニシテ、此ノ事、歐羅巴一般ニ傳播シタリシニツ、苟クモ基督教信徒
 タルモノハ、其ノ新教徒タリ、天主教徒タルヲ問ハズ、悉ク感動セラレザ
 ルハナク、英ニ、普ニ、埃ニ、西ニ、何處ノ教會モ、神ノ前ニソビエスキノ名ヲ
 頌讚シ、就中羅馬法王インノイセント十一世(Innocent XI)ノ如キハ、凡ソ
 全一ヶ月ノ間、神ノ前ニ、及ヒ十字架ノ前ニ、波蘭王ノ名ヲ稱ヘテ、感涙ニ

ソビエスキ王
ノ晩年

王、波蘭ノ將
來ヲ前知ス

咽ビタリトツ。左レバ、ツヨシ、ソビエスキ王ノ美名ハ、此ノ時ヨリシテ、全
 歐羅巴ニ輝キ、彼レハ全歐羅巴人ガ崇拜スル所ノ偶像ト爲レリ。
 ソビエスキ王既ニ埃國ヨリ土軍ヲ驅逐シケレバ、國ニ歸リテ再ヒ政務
 ナ執レリ。左レド皇后ノ陰險ト、貴族ノ朋黨トハ、舊ニ依リテ王ヲ惱マシ
 メ、王ヲ壓制者、謀叛人、自由ノ敵ト稱ヘテ誹謗ノ目的ト爲シ、決闘ヲ申シ
 込ム者サヘアルノミカ、波蘭ノ將來ヲシテ無政府ノ境遇ニ陥ラシムベ
 キノ徵候ヲ呈ハシケレバ、王ハ此ノ徵候ヲ察シテ憂慮ニ堪エズ。波蘭ノ
 永ク榮エ能ハザルベキヲ前知セリ。

一千六百八十八年 我カ元祿
 元年戊辰 議會將サニ閉ヂントスルニ際シ、王ハ相會
 セル貴族ノ前ニ述テ曰ク、朕ハ世ニ前表ナルモノアルヲ信セズ。然レ
 ドモ、基督教徒ノ一人トシテ、正シク、且ツ力アル造化ガ國家ノ運命ヲ
 司リ給フヲ信シ、當路ノ人苟クモ不正ノ所業アルキハ、造化ハ必ラ
 ズ其ノ罰トシテ、其ノ國ヲ滅ボシ給フヲ信ス」ト。王ガ波蘭ノ將來ヲ

前知シタルハ、此ノ一語ニ於テモ明カナリ。
 是ニ於テ、王ハ位ヲ遜ラント望ミシガ、貴族ハ大ニ驚キテ其ノ本心ニ歸
 リ、固シテ讓位ヲ思ヒ留マラレントナリテ請求シテ止マズ。左レバ、王ハ心ナラ
 ズモ、國家ノ爲メチ念ヒテ、依然萬機ヲ總裁シタリキ。
 王、晩年ニ至ル迄モ、家庭ノ不和ニ苦メラレ、國家ノ前途ヲ憂ヒケレバ、文
 學ヲ玩ヒ、又ハ信心ヲ旨トシテ、ミツカラ其ノ心ヲ慰メシガ、惜ムヘシ、一
 千六百九十六年我カ元禄九年丙子、基督聖禮節ニ、六十七歳ヲ一期トシテ、不意ニ崩
 御シヌ。史家後世ヨリ之ヲ弔シテ曰ク、「波蘭國ノ榮光ハ、此ノ王ト共ニ墳
 墓ニ埋葬セラレタリト」。

第四章 波蘭、瑞露二國ノ左右スル所ト爲ル

シビエスキ王崩後、波蘭王ノ位ハ、恰カモ最多額ノ入札者ニ落札セシ

波蘭ノ腐敗

シビエスキ王

アウガスタス二世ノ即位

Lithuania

波蘭、露西亞ト同盟シテ瑞典ヲ伐ツ

ムルノ有様ト爲リシガ、當時其候補者トシテ數ヘラレタルモノハ、ウエ
 ームス、ソビエスキ先王シヨン、ソビエスキノ皇子(James Sobieski) 先王シヨン、ソビエスキノ皇子、コンナ公Prince of Conti、巴威
 里選舉公(Electeur of Bavaria)及ヒ索遜尼選舉公Frederick Augustus, Electeur of Saxonyナリ。而シテフレデリック、アウガ
 スタスハ、一方ニ於テハ、最多額ノ金ヲ出シテ波蘭貴族ノ半数以上ヲ味
 方ト爲シタルニ依リ、又一方ニ於テハ、兵力ヲ以テ他ノ半数ヲ恐迫シタ
 ルニ依リ、遂ニ選ハレテ波蘭王ノ位ニ即キ、アウガスタス二世ト稱ス。
 王ハ、此ノ暫時以前ニ、索遜尼選舉公ノ位ニ即キ、既ニ歐洲中最強最美ノ人トシテ有名ナリシナリ。

アウガスタス二世ハ、夙ニ戰捷者タラントノ大望ヲ懷キ、就中バルチツ
 シ海濱ナル、リヴァニアヲ得ント欲スルノ念切ナリ。此ノ地ハ、モト、チユ
 トトニツク種族ニ屬シ、瑞典、波蘭、露西亞ノ久シク垂涎スル所ナリキ。其
 ノ後瑞典ノ有ニ歸シテヨリ、殆ンド五十年ノ星霜ヲ經過シケルガ、今ヤ
 アウガスタス二世カ此ノ地ニ望ミヲ懸クルト同時ニ、露國ノ彼得大帝

Peter well...

波蘭、瑞露二國ノ左右スル所ト爲ル

(Peter the Great) 西曆一六八二年(我カ寛文十二年壬子)生レ、同一七二五年(我カ享保十年己巳)崩ス。生ガ著メス所ノ「神童」ニ傳アリ。モ亦瑞典ニ屬スル某地ヲ得ント望ミケレバ、相共ニ同盟ヲ結ビ、此同盟ニ由リテ、兩國力ヲ戮ハセテ瑞典ヲ伐チ、バルチツク海及ビフネランド灣ニ瀕セル同國ノ領地ヲ攻略センコトヲ約シ、而シテアウガスタスハ、リグチニアニ進ミテリガチ圍メリ。

瑞典王チャールス十二世(Charles XII) 西曆一六八二年(我カ天和二年壬戌)生レ、同一七一八年(我カ享保三年戊戌)那威國ノ際、砲丸ニ中リテ崩ス。年紀僅ニ十七歳ノ少年ニシテ、未ダ世人ノ爲メニ、其ノ不世出ノ豪傑ナルコトヲ知ラズ、只其危豪ナル舉動ヲ爲スコト、片意地ニシテ、一ト癖アルコトハ世ニ知ラレタリ。波蘭王 アウガスタス 露帝 ピートル大帝 ハ以爲ラシク、瑞典ハ一撃ノ下ニ打破スベシト、笑ツ圍ラン、彼レハ、是レ迄眠リツ、アリタル狂獅ニシテ、砲聲一發、忽チ眼ヲ瞑ラシ、爪ヲ磨ギテ、數萬ノ羊群中ニ荒レ廻ハラントハ、左レバ、彼レノ武名ハ、此時ヨリ頓ニ歐洲ヲ震懾セシムルニ至レリ。史家、吾人ニ告ゲテ曰ク、チャールスハ、此ノ時ヨリ、快樂、安逸、馳騁、奢侈ヲ棄テ、垢衣糞糞、糲食ヲ食ヒテ、心ヲ戰事ニ専ラニシタリト。

瑞典王チャールス十二世
眼レテ狂獅ニシテ
チ奮迅ノ勢ヒ
チ爲ス

チャールス十二世
アウガスタス
軍ヲ大ニ敗ル

アウガスタスハ、チャールスガ、處女陣ニ於テ、大ニ露軍ヲ敗リタリト聞キ、其ノ豫想外ニ驚キシガ、此ノ時早シ、彼ノ時遅シ、チャールス亦破竹ノ勢ヲ以テ進ミ來リシカバ、王、當ルベカラズト爲シ、急ヨリガノ國ミチ解キテ波蘭ニ歸ル。瑞典軍北グルチ追フテ索遜尼兵 アウガスタスハ、此ノ時多クチ擊テ、容易クリグチニアヲ恢復セリ。アウガスタス、波蘭兵ヲ率テ、再ヒチャールスノ軍ニ當ラントス。然レドモ波蘭人ハ、王 アウガスタス ガ輿論ニ背キテ瑞典ト戦ヲ交エタルヲ怨ミ、數多ノ索遜尼兵ヲ國內ニ引キ入レタルヲ憤リシカバ、實ニ其指揮ニ從ハザルノヨリ止マラズ、剩ヘ瑞典軍ノ國內ニ進入スルヲ許シ、元老ヨリハ、波蘭民主國ノ名義ヲ以テ、リチニアナルチヤールスノ許ニ媾和ノ使節ヲ送レリ。チャールス、使節ノ許ニ人ヲ遣シテ言ハシメテ曰ク、朕固ヨリアウガスタスト和約ヲ結ブチ好マズ。左レド國民ノ使節トアラバ、喜ンデ之ガ商議ニ與カラント。然ルニ使

波蘭、瑞蘭二國ノ左右スル所ト爲ル

四〇

節ハ、兎角隔意アリテ充分ニチャールスノ言フガ儘ニ爲ルベシモ思ハレザリシカバ、チャールスハ、返答ヲ與ヘズ、朕ミツカタワルソノ城門ニ到リテ答フル所アラント言ヘリ。

チャールス十
二世ノ軍ヲ
ソノニ入ル

是ニ於テ、チャールスハ、リチニアコアヲ發シテ波蘭ニ進ミ、一千七百二年我カ元祿十五年壬午五月五日ヲ以テワルソニ着セリ。王ノ着スルニ先ナテ、波蘭

王アウガスタスハ、軍勢催促ノ爲メニ索遜尼ニ赴キシカバ、瑞典王チャールスハ、教長ヲ

デヨースキ (Radjowski the primate) ニ謁シ賜フテ言ヘラク「朕ハ波蘭國民

ガ廢立ヲ遂グル迄、決シテ和議ヲ承諾セザルベシ」ト。左レド波蘭人ハ速

ニ瑞典王ノ言ニ從ハザルニ依リ、瑞典王ハ、精兵ヲ率ヰテ、アウガスタス

ノ軍ト戦ヒ、屢々之ヲ敗リテ、戰場ヨリ戰場ヘ、アウガスタスヲ逐ヒ廻ハ

リシカバ、波蘭軍大ニ恐レテ、再ヒ和ヲ乞ヒ、波蘭國會ハ、遂ニ瑞典王ノ要

求ニ從テ、アウガスタスノ位ヲ廢シ、瑞波兩國ノ和議始メテ整ヘリ。

アウガスタス既ニ位ヲ廢セラレケレバ、瑞典王チャールスモ、波蘭ノラ

波蘭王アウガ
スタス二世廢
位セラレ
レヌクジメ

キ、波蘭王ニ
選メル

デヨースキ黨モ、ジエームス、ソビエスキ前ニ在リ。先王ツヨク、ソビエスキノ子ナリ。チ王ニ選ハント

企テリ。然ルニ廢王アウガスタスハ、此ノ計畫ヲ妨碍セント欲シ、竊カニ

ソビエスキチ、ブレスローノ住宅ヨリ執ヘ去レルニツ、更ニ其ノ弟アレ

キサンダー、ソビエスキ (Alexander Sobieski) チ立テ、王ト爲サントス。然

レドモ、固ク辞シテ受ケザルニ依リ、波蘭國會困リ果テ、使チチャール

スノ許ニ遣ハシテ之ヲ謀ル。此ノ使ノ任ニ當リタルハ、年猶若キボスナ

ニア伯スタニスラス、レスクジンスキ (Stanislas Leszczinski) ナリキ。此ノレス

クジンスキト云ヘルハ、波蘭屈指ノ舊家ニシテ、父ラフエール、レスクジ

ンスキ (Raphael Leszczinski) ハ、曾テ波蘭ノ大蔵大臣ナリ。遠ク祖先ヲ尋ヌレ

バ、レスクジンスキ家チ知ラザル者ハ、波蘭チ知ラザルモノナリ」ト唱ヘ

ラレシホドノ名家ナリ。

レスクジンスキノ瑞典ニ使スルヤ、瑞典王ハ、深ク其ノ人ト爲リテ頌讚シ、

波蘭諸黨ノ間チ能ク調停スルモノハ、彼レチ置キテ他ニナカルベシト

波蘭ニ二王ヲ生ス

チヤールス、アウガスタスニ追テ限リ、ナク波蘭王ノ位ヲ去ラシム

瑞露戦争

信シ之ヲ推舉シケレバ、彼レ遂ニ一般ノ同意ニ由リテ、選ハレテ波蘭王ノ位ニ即ケリ。實ニ一千七百四年我カ寶永元年甲申七月十二日ナリ。此ノ選舉ニ由リテ、波蘭ニ二王レスクジンスキ及ビ、アウガスタスヲ生シ、爾來凡ソ二年ノ間二王ノ間ニ争ヒノ絶ユル時ナク、波蘭ハ之ガ爲メニ頗ル疲弊シタリシガ、瑞典王ハ新王ヲ援ケテ、大ニ舊王ヲ敗リ、彼レヲ追窮シケルニツ、彼レ屈服シテ、一ニチヤールスノ言フガ儘ニ從ヒ、波蘭王ノ位ヲ去レリ。アウガスタス、ガントルスドルフニ於テ、チヤールスト會見ノ際、チヤールスハ、只朕ノ長靴ハ、佩キ始メテヨリ既ニ六年ニ及ベリト云フコトノ外、他ニ一語ヲモ交エザリシガ、會見ノ後、アウガスタスハ、新王ニ書ヲ送り、辞ヲ卑フシテ其ノ即位ヲ賀シ、波蘭人民ガ倍舊ノ幸福ヲ享ケンコトヲ希望スル旨ヲ述ベ、然ル後索遜尼ニ退キテ、波蘭ト全ク聯絡ヲ絶テリ。斯クテ、チヤールスハ、波蘭ノ局ヲ了シ、又獨逸ノ諸地ニ勢威ヲ振ヒケレバ、今ヤ專ラ露國ノ征討ニ從事シ、唯雄ヲ決スベキノ準備ヲ整ヘリ。抑モ

チヤールス王ト、彼得大帝トハ、共ニ稀世ノ英雄ニシテ、チヤールス、四隣ヲ蠶食セント欲スレバ、彼得モ亦版圖ヲ西ニ開キ、バルチック海ノ周圍ヲ領地ニ歸セシコトヲ圖リテ、遂ニ兩雄二十餘年間ノ戦争ニ及ビ、西曆一六九七年（我カ元禄十年丁丑）ヨリ、同（一七八年）我カ享保三年戊戌）ニ至ル。其ノ間前後二十二年ナリ。而シテ勝利ハ、常ニ瑞典軍ノ方ニ在リ。然レドモ彼得ハ、敵軍ノ成功ノ全ク其ノ熟練ニ在ルヲ察知シ、已レモ亦蠻習ノ殘存セル臣民ヨリ精兵ヲ得ント決シ、銳意シテ其ノ準備ヲ整ヘタリキ。帝常ニ言ヘラク、瑞典軍ハ必ラズ永ク吾人ヲ窘ムベシ。然レドモ、吾人ハ、此ノ薰陶ニ由リテ、遂ニ全捷ヲ博スルコトヲ得ルナラント。サテ瑞典王ハ、愈々征露ノ師ヲ興シ、露國ノ中心ヲ衝テ、露帝ノ位ヲ廢スルコトヲ彼ノ波蘭王ノ如クセント欲シテ、嚴寒ノ候ヲ物トモセズ、軍ヲユークラインニ進メリ。是レ瑞典軍ハ、勇將ノ下ニ在リテ、多年艱苦ヲ凌ギ、經驗ノ功ヲ積ミタルガ故ニ、寒威ノ如キハ毫モ恐ルルコト足ラズト爲シ、殊ニユークラインノ住民ハ、露帝ニ叛キテ、竊カニ志ヲ瑞典軍ニ通スルヲ以テ、同地

發端

波蘭、瑞露二國ノ左右スル所ト爲ル

四六

リ。波蘭王レスクジンスキハ、其敵スベカラザルヲ知リテ波蘭ヲ逃レ、土
耳其ナル其ノ恩人ルサーノ許ニ到ル。土耳其人暫ラシ彼レヲ幽閉シタリ
シガ、既コシテ之ヲ許シケレバ、チヤールスヨリ受ケタル小サキヅエリ、
ボン公國ツエー、ボンハ、獨逸ノ一地ニシテ、ニ退キテ茲ニ閑日月ヲ送レリ。
從來瑞典王ノ世襲スル所ナリ。

レスクジンスキハ、一千七百六十六年我が明和三年丙戌崩ス。著ハス所願ル多シ。其ノ女マリー、レスクジンスキ
(Mary Leszcynski) ハ、路易十五世(Louis XV) 佛ニ嫁シテ、佛國ノ皇后ト爲レリ。

是ニ於テ、アウガスタス再ビ波蘭王ノ位ニ昇レリ。然レドモ波蘭國ニ起
リタル此ノ變動ハ、決シテ利益ト稱スルヲ得ザルナリ。抑モ先王ヌタ
コスラ即チレスクハ、單ニチヤールス十二世ノ被指名者ニ止マルヲ以テ、
其ノ在位ノ間、波蘭ハ稍々瑞典ノ附庸タルノ觀ナキ能ハズ。然レドモ、チ
ヤールスハ、寛大ノ君主ナルガ故ニ、實際ニ於テハ、苦痛ヲ感スルヲ甚少
ナカリキ。アウガスタスガ祚ヲ重スルニ及ヒテ、名ハ獨立ヲ恢復シタリ
ト稱スルモ、其ノ實ハ、露國ノ爲メニ更ラニ一層煩累ナル干渉更ラニ一

アウガスタス
二世再ヒ波蘭
王ト爲ル

波蘭衰亡ノ徵
候現ハル

露國ノ干渉
東

露國既ニ波蘭
ニ垂涎スル漸
ク併呑ノ策ヲ
行フ

アウガスタス
二世崩シ其ノ
子三世繼グ

層苛刻ナル束縛ヲ蒙ルニ至レリ。アウガスタスハ、既ニ民心ノ叛ク所
ナレドモ、露國ノ勢力ニ由リテ位ニ在ルヲ得タルナリ。而シテ貪婪厭ク
トナキ露國ハ、早既ニ波蘭ニ垂涎シテ早晚呑噬ノ慾ヲ逞フセント欲シ、
其ノ第一着手トシテ、從來ノ波蘭軍十万人ヲ二萬人ニ減省シ、ウレツチャヤ
ハ一萬八千人ニ減省ストアリ。其ノ他、手ヲアウガスタスニ借リテ、漸ク併呑ノ方便ヲ行ヘリ。
波蘭ノ一史家曰ク、アウガスタスハ、波蘭ニ平和ヲ與ヘタリ。然レドモ其
ノ平和ハ、則チ波蘭ヲ滅亡ニ導クノ平和ナリ。ト評シ得テ妙ナリト謂フ
ベシ。

一千七百三十三年我が享和十一年アウガスタス二世崩シ、其ノ子アウガスタス
三世(Augustus III) 王位ヲ嗣グ。父ト同ク、波蘭王兼索遜尼選舉公タリ。
索遜尼選舉公トシテハ、風流家トシテ、及ヒ美術ノ保護者トシテ、名望ヲ
博シタレドモ、波蘭王トシテハ、其ノ才幹、父ヨリモ劣リタリキ。彼レハ、露
國ノ庇蔭ニ由リテ九五ノ位ヲ得タルガ故ニ、其ノ治世ノ間、露人ハ跋扈

發端

四七

跳梁ヲ極メ、實際ニ於テハ、波蘭ノ主權ヲ握レリ。彼レハ、常ニ索藩尼ノ首
府トレスデンニ住シタルガ故ニ、名義上ヨリ言ヘバ、ドレスデンハ、波蘭
政治ノ中心ナレドモ、實際ニ於テハ、露都聖彼得堡ヲ中心ナルヲ以テ、波蘭人
ハ、甲ニ行カズシテ、寧ロ乙ニ集リメリキ。

アウガスタス
三世崩ス

ラウツキル黨
長ロザートリ
ニ、斯ク言
フナリ。

一千七百六十三年我カ實曆十三年癸未アウガスタス三世、ドレスデンニ崩シテヨリ、
凡ソ一年ノ間、波蘭國ハ例ノ如ク、無政府ノ有様ニ陥リ、混雜ノ姿ナリキ。
其ノ頃波蘭貴族ノ間ニ兩黨アリ。一チラジウキル黨ラウツキル黨、
ニ、斯ク言即チ代議政治黨ト云フ。現在ノ儘ニ代議政治ヲ維持セント勉
ル政黨ナリ。他ノ一チザートリスキ黨ザートリスキ黨、
其ノ首領タリシカ故ニ、斯ク言フナリ。即チ獨
裁政治黨ト云フ。波蘭當時ノ政體ヨリ生スル弊害ニ眼ヲ注ギ、獨裁政治
ニ變更シテ、舊弊ヲ一洗セント企ツル政黨ナリ。前者ハ、獨逸及ヒ佛蘭西

宗教上ノ爭論

スタニスラス
ボニアトリス
キ伯、波蘭王
ノ位ニ即ケル
ニ、國勢ノ衰
弱、漸ク波蘭

ノ勢力ヲ恃ミ、後者ハ、援チ露國ニ仰ケリ。夫レ斯ノ如ク、政黨ノ差アルガ
上ニ、又宗教ノ争アリ。ソモ波蘭ニ於テハ、ジエスート宗ノ勢力較近漸ク
増加シ、一千七百三十六年我カ元文二年丙辰ニ至リテハ、遂ニ國會ニ迫リテ、凡ソジ
エスート信徒ニアラサル者ハ、公務ニ與カルヲ得ス、其ノ他重要ナル
公權パブリックライツヲ有スルヲ得ストノ條例ヲ發布セシメ、他宗徒ヲシテ、恰カモ
猶太人ト同等ノ下層ニ沈淪セシメタリキ。爾來三十年ノ星霜ヲ經過シ
タリト雖モ、宗教爭論ノ精神ハ年ヲ逐フテ高度ニ昇リ、而シテ獨裁政治
黨ハ、天主教ノ方ニ傾キ、又代議政治黨ハ、基督新教ヲ奉シテ、信教自由ヲ
可トセリ。

前既ニ述ベシ如ク、波蘭王アウガスタス三世ハ、一千七百六十三年ヲ以
テ崩御シ、例ニ由リテ新王ヲ選舉スベキ事トナリシカバ、ザートリスキ
ノ率ユル獨裁政治黨ト、ラヂウキルノ率ユル代議政治黨トハ、各々自黨
ヨリ君主ヲ出サント欲シテ、非常ノ競争ヲ爲シタリシガ、獨裁政治黨ハ

腕力ニ由リテ勝ヲ制セントスルヨリ、援テ露國ニ乞フ。時ニ露國ハ、彼得大帝以來傑出ノ英主ト稱スルカタリナ二世(Catherine II.)西曆一七二九年、我が政八年丙辰、崩ス。ノ支配スル所ナリシカバ、女皇即チカダリナ二世ハ、縦横ノ機智ヲ運ラサントシ、笑坪ニ入りテ、早速ニ之ヲ承諾シ、軍ヲ出シテ獨裁黨ヲ援ケシメ、遂ニスタニスラス、ポニアトリスキ伯(Count Stanislas Poniatowski)ヲ選ヒテ波蘭王ト爲シ、スタニスラス、アウガスタス(Stanislas Augustus)ト稱ス。王ハザトリスキ家ノ親戚ニシテ、女皇ノ寵遇ヲ蒙レル人ナリ。此ノ王ノ世ニ、波蘭國ハ、露普塊三國ノ分割スル所ト爲リ、覆滅ノ禍ヲ蒙リケルコソアハレナレ。女皇ハ、波蘭ヲ自在ニ振キ廻ハサント思ヒテ、此ノ情耶ヲ王位ニ据エタルナリ。

波蘭分割ニ至ル迄ノ概要

以上ハ、波蘭建國ノ初ヨリ、最後ノ君主即位ニ至ル迄、凡ソ一千年間ノ歴史ヲ略陳シタル者ナリ。爾來波蘭國會ハ、獨裁黨ノ意見ニ從テ、從來只一人ノ不同意者アル毎ニ、國會ヲ解散シタルノ弊第十三頁ヲ改メ、又之ト同時ニ、天主教以外ノ信徒ヲ薄待スルノ法、公權ヲ與ヘザル等ノ事ヲ云フ。ヲ設ケシカ

ハ、カタリナ二世ハ、此ノ乙法ノ大ニ露國ノ勢力ヲ滅殺スベキヲ怒リ、普魯士、丁抹、及ヒ英吉利ノ諸國ト共ニ、波蘭國會ニ向テ、信教ノ自由ヲ箝制スルコトノ不可ナルヲ痛諭セリ。此ノ一事ニ由リテ、露國ハ、基督新教徒、及ヒ其ノ他信教自由論者ノ心ヲ繫ギ、彼レ等ヲシテ其ノ厚意ニ感佩セシメ、露國ノ爲メニ一臂ノ力ヲ振ハント望マシメケレハ、是レヨリ露國ハ、一方ニ於テハ、露國黨ヲシテ波蘭國會中ニ多數ヲ制セシメ、又一方ニ於テハ、數多ノ露軍ヲ波蘭國內ニ置キテ、恐怖ノ念ヲ國民ノ心裏ニ印刻セシメ、此ノ二様ノ手段ニ由リテ、ザトリスキ黨ノ行ヒタル改革ヲ全廢シ、悉ク舊法ニ復セシメリ。是レ迄、露國黨ト云ヒタルハ、ザトリスキ黨ノ事ナレド、茲ニ所謂露國黨ハ、全ク之ト異ナリテ、今回露國ノ爲メニ力ヲ盡サントスル黨ヲ云フナリ。左レド天主教黨ハ猶クラコト僧正(Bishop of Cracow)ヲ首領トシテ、他教薄待ノ法ヲ廢セシメザラント痛ク争ヒシカバ、露兵ハ其ノ張本人等ヲ捕ヘテ之ヲ西伯利ニ遠竄シ、西曆一千七百六十八年我カ明和五年戊子ヨリ、露國全ク波蘭ノ主權ヲ得テ、國會ヲ左右シ、ス

クニスラス、アウガスタスハ、單ニカマリナ二世ガ部下ノ一地方官吏タルニ過キザルニ至リ、其極波蘭ハ遂ニ三國^{露普奧}ノ爲メニ分割セラルトトハ爲ナリヌ。左レド、スタニスラス、アウガスタス王即位以後ノ事ハ、猶次編ニ叙述スベキニ依リ、茲ニ之ヲ略ス。

第二編 波蘭分割ノ近因(其一)

第一章 露國女皇カマリナ、波蘭ニ對シ

テ傍若無人ノ舉動ヲ爲ス

一千七百六七十年代ノ波蘭ハ、獨立ト稱スト雖、是レ全ク空文ノミ。其實際上ニ於テ、露國ノ爲メニ屬國視セラレ、其國王ハ一地方ノ長官ノ如クニ待遇セラル、サマハ、宛ナガラ日清戰爭以前ノ朝鮮ガ支那ニ於ケルト相鬻鬻タリ。而シテ袁世凱的ノ露公使レプニン(Bernin)ハ、ワルソ^ルニ

露國、波蘭ヲ
屬國視ス

在リテ、波蘭王ヲ立テタルハ予ノ力ナリトノ廣言ヲ吐キ、且ツ廢立ノ權ハ我カ一身ニ存ストノ意ヲ波蘭王ニ諷シテ、暗ニ之ヲ恐迫シ、二萬以上ノ露兵ハ、全國各地ニ散布シテ、イザト言ハハ、一撃ノ下ニ國土ヲ蹂躪セシメ有様ナリ。

波蘭王、普國
ノ怒ヲ招ク

大勢已ニ斯ノ如キヲ以テ、曩キニ匈牙利ニ逐ハレシブラニツキ(Branic-^ニラウウ^ルル^ル黨^ノ首領ナリ。國王選舉ノ際、露國及ヒ其ノ黨ノ人々ハ、波蘭ニ歸リタリト^ニ黨^ニ反對シタルヲ以テ波蘭國ヲ逐ハレタリ。)

雖モ、亦如何トモスルコト能ハサリキ。是レヨリ先キ、普國ノフレデリック大王(Frederick the Great) ^{四曆一七二二年八月三十日生、一七九七年八月二日歿。我カ正統二年壬辰(一七三九年)八月八日(我カ天明八年戊申)崩ス。}ハ、露國ガ波蘭ニ威風スルヲ憤リテ、其ノ威力ヲ抑制セントシ、ラウウ^ルル^ル黨^ノ如キハ、大王ノ弟ヘンリー親王(Prince Henry)ヲ迎ヘテ波蘭王ニ立テント謀リシカド、露國ノ兵力的干涉ノ爲メニ妨ゲラレテ果サソリキ。茲ニ至リテ、波蘭王スタニスラス、アウガスタスハ、奧國ノ一皇女ヲ娶ラント欲シテ、普國ノ死敵タル同國ト同盟ヲ結ビシカバ、大王之ヲ聞キテ大ニ怒リ、叫ビテ曰ク、咄

天主教徒、新教徒ヲ排斥ス

露國女皇カタリナ、波蘭ニ對シテ傍若無人ノ驕動ヲ爲ス

スタニスラス。朕ハ彼レノ冠ヲ以テ彼レノ頭ヲ打破セザルベカラズト。』當時波蘭ニ於テハ、各州其ノ奉スル所ノ宗派ヲ異コスト雖モ、其ノ最モ勢力アルヲ天主教ト爲シ、次ヲ希臘教ト爲ス。此ノ二教ノ信徒ハ、官職ニ任スルヲ得、其ノ他諸種ノ特權ヲ有スルヲ以テ、意氣頗ル揚々タレドモ、第四十九頁參看。獨リ基督新教ニ至リテハ、之ヲ異教徒ト稱シテ之ヲ蔑視シ、アウガスタス三世ノ時、之ガ政權ヲ剝奪シタリ。然レドモ、舊軍人ト爲ルノ權利ヲ有セシメ、又代議士ヲ選ブノ權ヲ有セシメタリ。トヒ代議士ニ選バル、ノ權利ハ剝奪シタルニモセヨ。然ルコトニシテ、一千七百六十六年、我カ明和三年丙戌ノ國會ニ於テハ、天主教徒、其ノ多數ヲ制シテ、新教徒ガ是レ等ノ諸權ヲモ、悉ク剝奪シタリシカバ、新教徒ハ大ニ其ノ處置ヲ不當ト爲シ、國會ニ向テ權利ヲ恢復セラレンコトヲ乞ヘリ。左レド國會ハ其ノ請ニ應セザルノミカ、請願書ヲ寸斷シテ之レヲ拋棄シタリ。新教徒ハ、猶懲リズニ請願書ヲ出セシカド、國會ハ廢トシテ充耳ノ如クナリシカバ、新教

新教徒、露國

ノ保護ヲ仰ケ

カタリナ女皇
試道的干渉ヲム

徒ハ憤怒ノ極、遂ニ國家ノ利益ヲ犧牲トスルモ、寧ロ自黨ノ利益ヲ保護セントノ志ヲ決シ、露國ノ庇陰ニ頼リテ、己レ等ノ目的ヲ達セント謀リシコソ、淺マシケレ。露國女皇カタリナハ、機會ノ來リタルヲ喜ヒテ、快ク新教徒ノ請ヒテ容レ、聖彼得堡駐劄ノ波蘭公使ニ向テ、彼レ等ノ請願ヲ許可スベシト勸告シ、且ツ恐迫スラク、足下若シ朕ガ今要求スル所ニ從ハズンバ、朕ノ要求ハ今後無限ナルコトヲ記臆セザルベカラズト。露公使レフコン又波蘭國會ニ向テ、請願ヲ許可スベキヲ告ケテ曰ク、女皇陛下ノ意ハ、希臘教徒タリ、新教徒タルニ論ナク、悉ク之ニ舊來ノ特權ヲ復セシメント欲スルニ在レバ、請フ諒セラレヨ。貴國若シ之ニ抗抵セラル、ナラハ陛下ハ止ムヲ得ズンテ兵力ニ訴エラルベキナリト。而シテ露國ハ、飽ク迄モ此ノ要求ヲ貫徹センガ爲メニ、從來波蘭ニ駐屯セシメシ、二萬以上ノ兵ノ外、更ラニ四萬以上ノ兵ヲ國境ニ駐屯セシメリ。

波蘭分割ノ近因(其二)

カタリナ二世ノ、一千七百二十九年、我カ皇保十魯國ボメラニア州ステツチンニ生ル。父チアンハルト、ツェルンストク(Prince of Anhalt-Zerbst)ト云フ。魯國ノ陸軍少佐タリ。カタリナ初メアンハルトノソフナ、アウグスタ(Sophia-Augusta Von Anhalt)ト稱ス。其ノ後、露國ニ來リテ、希臘教ノ洗禮ヲ受ケテ、カタリナ、アレキソワナ(Catherine-Alexovna)ト改ム。容姿ノ輝煌タルト、才能ノ卓越ナルトヲ以テ、十六歳ノ時、四曆一七四五年(我カ延享二年乙丑)露國皇太子ピートル、フェルドロウヰツチ(Peter Feodorovich)ニ配セラレ、皇太子、帝位ニ即クニ及ヒテ、皇太子、帝位ニ即キ、立テラレテ皇后トナル。然ルニ、皇后ハ其ノ容色ノ花ノ如キニモ似ズ、其ノ心ハ鬼ノ如ク、夫帝ヲ廢シテ、ミンカラ女皇ノ位ニ即キ、總テ龍臣アレキシス、オールドフ、Alexis Orloff)ニ命シテ、彼レヲ弑セシメタルコソ恐ロシケレ、(オールドフ、廢帝ニ毒酒ヲ參フセシカドモ、帝、毒ト悟リテ酒盃ヲ地ニ抛ケケレバ、オールドフ遂ニ手中ヲ以テ彼レヲ殺セリ。)爾來三十四年ノ間、女皇ハ、政治ヲ革メ、武威ヲ輝カシ、又放恣ヲ極メ、波蘭ヲ滅ボシ、土耳其ヲ征服シテ、四隣ヲシテ震懾セシメ、四曆一千七百九十六年、我カ寛政八年丙辰我カ寛政ヲ以テ崩セリ。此ノ人ノ智略ニ長ケタルハ、古今ノ女主中、無双ト謂フベク、英國ノ史家マカウニスラモ、エリザベ奸惡ナルハ、股ノ起己モ三會ヲ避クルベカリナリ。而シテ露國人民ハ、其ノ功績ノ赫々タルニ眩マサレテ、大女皇ノ尊嚴ヲ附レリ。(遼江保者、ウリヤ戰史)

波蘭王、露國
女皇ノ勳告ニ
反對ス

是ニ於テ、波蘭王スタニスラス、アウガスタスハ、各僧正及ヒ元老中ノ熱心ナル新教反對黨ト思ホシキ人々ヲ集メテ會議ヲ開キシガ、其ノ大半ハ、王ノ後援ト爲リテ露國ノ勳告ニ異議ヲ唱ヘント誓ヒケルコト、王大ニ悦ビ、乃チ露公使ニ向テ答ヘラシ、朕ハ朕ノ神聖ナル宗教天主ヲ保護ス

波蘭國會、露
國ニ反對ノ決
議ヲ爲ス

ルガ爲メニ、飽ク迄モ他宗ノ上ニ制限ヲ置カザルベカラズ。故ニ貴族ニ從ヒ難シト。

既ニシテ國會ハ愈々十月六日ヲ以テ開ケタリ。忠愛至誠ナルコト、僧正ソルナツク(Soltyk)先ツ起テ、天主國立教保護ニ關スル意見ヲ述ベ、

異教徒新教ノ請願ハ、管ニ之ヲ許スベカラサルノミナラズ、其ノ法ニ背キテ外國ノ援ヲ求メタルヲ嚴責シ、之ヲ刑法ニ問ハザルベカラズト論セリ。僧正ガ此ノ意見ヲ述フルヤ、滿場ノ議員ハ、其ノ黨派ノ如何ニ論ナク

從來ノ行キ懸リヲ捨テ、悉ク僧正ノ説ニ左袒シ、異口同音ニ請願部下スベシ。露國ノ干涉拒絕セザルベカラズト叫ベリ。

一方ニ於テハ、右ノ如ク、露國ニ反對ノ決議ヲ爲シケルニ、又一方ニ於テハ、露公使ハ、女皇ノ勸告ヲ行ハレシメント欲シテ、種々ナル詭計ヲ運ラシ先ツ代議政黨ヲ訪ヒテ、今ヤ足下等ガ羈絆ヲ脱スベキ時節ナリト説キケレバ、ラヂウヰル黨即チ代議政黨及ヒ索遜尼黨等ハ稍々公使ノ甘言ニ

露公使ノ奸策

欺カレケル。是ノ時ニ當リテ、露國ノ股肱ト爲リ、其ノ奸策ヲ行ハレシムルコト最トモ力ヲ盡ス者ノ一人ナリ。ポドスキ (Podolski) ト爲ス。ポドスキハ、本ト僧侶ニシテ、幼時ヨリ天主教會ノ教育ヲ受ケタル人ナレドモ、今ヤ新教信仰ノ一寡婦ニ想ヲ懸ケタルヨリ、遂ニ異教徒新教ノ辯護人トシテツルツトニ現ハレ、辨舌ニ任カセテ喋々シタリ。シカバ、誠心誠意ノ愛國者モ往々其ノ説ニ惑ハサレテ、彼レノ意見ニ從ヒ、遂ニ左ノ意見ヲ主張スルニ至レリ。曰ク「我レ等ノ目的ハ、難キニ失ヒタル自由ヲ恢復シ、民望ニ背ケル國王ヲ廢スルニ在リ。而シテ此ノ目的ヲ遂ゲント思ハ、露國ノ援ヲ假ラザルニカラズ」ト。

偶々波蘭王ハ、租税及ヒ陸軍ニ關スル議案ヲ國會ニ提出スルニ當リ、之ヲ通過セシメンガ爲メニ、從來ノ滿場決議滿場決議ク異議ナキニアラザレバ議案ヲ通過セシムルコト能ハザルノ法ヲ廢シテ、多數決議ニ改メタリ。此ノ改革ハ固ヨリ善良ナラザルコアラズト雖、王ハ機ヲ察スルノ明ニ乏シク、爲メニ改革ヲ行フベキ時節ヲ誤リシカ

波蘭王出衆ヲ行ヒ民心益々離ル

露國只五百餘名ノ意見ヲ強テ波蘭多數ノ輿論ト爲ス

ハ、折角ノ良案モ好結果ヲ得ルコト能ハザルノミニ止マラス、却テ議員ヲ戒嚴セシメ、之ヲ憤怒セシメタリ。而シテ一ヶ月前途、最モ熱心ナル王黨タリシ議員モ、一朝反對黨ニ加擔シ、益々ソノ氣燄ヲ盛ナラシメタルコトウマテケレ。

カマリナ今ハ一層要求ヲ嚴ニシ、波蘭朝廷ニ迫リ、波蘭駐屯ノ露兵ヲ四萬ニ増加シテ、益々氣勢ヲ張レリ。又異教徒ハ一千七百六十七年我カ明和四年丁亥

三月二十日ヲ以テ、トルンニ集マリテ政府反對同盟ヲ結ビ、老人兒童迄ヲモ脅迫シテ同盟ニ加ハラシメタリ。然レドモ、其ノ數ハ合計五百七十三名ニ過ギス。當時此ノ同盟ノ手ニ成リタル印刷物ニハ、只三百零四人ノ姓名ヲ掲ケアルノミナリ。而シテ其ノ多數ハ、ルーテル宗、又ハカルヴヰン宗ノ紳士及ヒ農工ナリシト云ヘリ。是レ等ハ、露國ノ爲メニ強テ多數ト認メラレ、露國ニ黨シテ本國ニ害ヲ加ヘタル人々ナリ。

此ノ外ニモ、猶波蘭政府ノ處置ニ不平ヲ懷キ、波蘭王ニ對スル君臣ノ情誼ヲ絶テタル人アリ。左レド此ノ同盟ニハ加入セズ。且ツ彼レ等ト事ヲ共ニセザリシナリ。又同盟ガ唱フル所ノ苦情ハ、

波蘭分割ノ近因(其一)

露國女皇カタリナ、波蘭ニ對シテ傍若無人ノ舉動ヲ爲ス

- (一) 基督新教ヲ公許セザル事
- (二) 新教徒ヨリ官職ノ權、公民ノ權ヲ剝ギタル事
- (三) 法廷ニ出テ、証人ト爲ルノ權ヲ剝ギタル事

新露國黨ノ團

露公使レプコンノ股肱タルポトスキハ、代議政治黨ヲ驅リテ悉ク同盟ニ加入セシメントノ希望ヨリ、彼レ等ニ向テ、ザートリスキ黨ヲ撲滅スベキト、ポニアトリスキ現國王スタニスラフウガスタスガ國憲ヲ蔑如スルヲ禦グベキトヲ約シ、且ツレプコンノ名ヲ以テ、今王廢止ノ事ヲ誓ヒタリシカバ、此ノ誓約ヲ聞クト、同時ニ、同盟書ニ加判スル老功ノ有志者ハ、先チ爭フテ招キニ應シ、頃刻ノ間ニ、同盟書ニ加判スルモノ雲ノ如ク、其數凡ソ六萬人以上ノ多キニ及ヘリ。編者今便宜ノ爲メ、假リニ是レ等ノ人々ニ向テ新露國黨ノ名ヲ與ヘン。

新露國黨ハ斯ク多數ノ團結ヲ遂ケケレバ、先ツ第一着手トシテ總理ノ任ニ當ルベキ者ヲ選ハントス。黨中ノ人々ハ、躊躇シテ決セザリシガ、カ

ラザウ井ル同
盟ノ總理ニ選
ハル

「陛下ハ只從
順ノ一事ノミ
ニ由リテ王位
ヲ保チ給フテ
得ベシ」

露國大佐ノ亡
狀

「陛下ハ只從順ノ一事ノミニ由リテ王位ヲ保チ給フテ得ベシ」

ト命マシ、之ヲ招カシム。是ニ於テラヂウキル六月三日ヲ以テ、其ノ管轄地ハ首府ウキルナニ至リ、既往ノ官職ト家産トヲ恢復セラレタリ。

此ノ頃、レプコン露公使ハ、同盟者ノ名簿ヲ波蘭王ニ示シ、意氣揚々トシテ「見ラレヨ、臣ハ陛下ノ主ナリ。陛下ハ只從順ノ一事ノミニ由リテ王位ヲ保チ給フテ得ベシ」ト述ヘタリトゾ。無禮モ亦甚シカラスヤ。左レド波蘭王ハ我カ地位ノ危フキヲ知リテ、稍々レプコンニ讓ル所アリシカバ、流石無情ノレプコンモ聊カ氣ノ毒ニ思ヒシコヤ、廢位ノ事ヲ躊躇シタリト云フ。

輕率ナル同盟黨新露國黨モ、今ハ露國ノ誠實ヲ妄信シタルノ愚ナリシヲ悟リシカド、所謂六浦十菊、既ニ遲キヲ如何セン。今ソノ事情ヲ述ヘンニ、露兵ノ一分隊ハ、ラドム近傍ニ陣シ、露國ノ大佐某ハ、ラヂウキルニ伴ヒテ會議ノ席ニモ臨マントシタリシガ、ラヂウキル之ニ退去ヲ乞ヒケレバ

波蘭分割ノ近因(其一)

彼レハ傲然トシテ露公使ノ命令書ヲ示シ、予ハ孰レノ會ニモ臨席スベキ筈ナリト云ヘリ。彼レ又懷中ヨリ一通ノ約定書ヲ取出シ、是レハ女皇^{カタリナ}陛下ガ足下等ニ向テ、異議ナク領承スベキヲ命シ給フ所ナリト言ヒ、^{カタリナ}陛下、同盟黨把テ之ヲ披見スルコト、豈ニ圖ラシヤ、書中ニ記ス所ハ、彼レ等ノ特權ヲ恢復スルコトノ外、第一波蘭王ニ對スル忠義ノ誓ヲ絶ツベク、(第二)カタリナガ干渉ノ權利ヲ承諾スベシトノ二條アリ。而シテ大佐ハ更ニ一層尊大ニ構ヘ、恐迫的口氣ヲ以テ同意ヲ促ガシケレバ、同盟黨ハ露國ノ奸策ニ陥リタルヲ悟リテ、且ツ驚キ、且ツ怒リ、寧ロ同盟ヲ解クトモ、決シテ女皇ノ意ニ從ハザラント斷言セリ。是ニ於テ黨員百七十八人ノ中、女皇ノ意ニ從ヒタル者僅ニ六人ニ過ギズ。露國大佐ハ、名ヲ保護ニ託シテ悉ク同盟黨ヲ監禁シ、斯クテレバ、公使ノ指令ヲ待テリ。

翌日大佐ハ、波蘭貴族ノ集會セル會堂ノ前面ニ砲臺ヲ築キ、六人ノ黨員ヲ呼ビ出シテ、上諭ニ調印セシメ、^{カタリナ}陛下、此ノ際數人ノ兵卒ニ命シテ大砲

波蘭公使、^{カタリナ}陛下ノ御裁
ヲ主ニシ

露公使、^{カタリナ}陛下ノ御裁
ヲ主ニシ

ノ處ニ立テ、火繩ニ火ヲ点シテ、イザト言ハ、一發ノ下ニ擊テ殺サンズ勢ヲ示シケルトゾ。又ボロスキハ、レバ、コンヨリ法教師ノ欠コ補セラレテ、今シモワルソトニ到着シタリシガ、直チニ率先シテ彼ノ上諭ニ調印セリ。其ノ他ノ黨員モ亦各自ニ調印ヲ爲セシガ、兼チテ其ノ傍ニ暗語ヲ記セリ。此ノ暗語ハ、實ニ調印ヲ無効ヲラシムベキモノナリ。又ラヂウ^{カタリナ}ハ、愈々總理ニ任セラレ、自餘ノ同盟黨ハ、皆大佐カ彊中ノ鼠ト爲リテ姑ク同地ニ留マレリ。

波蘭王今ハ復タ爲スベカラザルヲ知リテ、避難ノ爲メニ、任ゲテレバ、^{カタリナ}陛下ノ意ニ從ヒ、孰レノ黨派モ皆一ニ彼レニ左右セラレ、ラヂウ^{カタリナ}ハ亦監禁同様ノ身トナリケレバ、レバ、コンハ宛ナク、波蘭ノ獨裁君主ノ如ク、百事意ノ如クナラザルハナカリキ。是ニ於テ國會議員ノ選舉ニ干渉シ、又ミツカラ一通ノ書面ヲ作りテ、議員ニ迫リテ之ニ記名調印セシメタリ。其ノ書面ノ文言ハ左ノ如シ。

波蘭分領ノ近因(其一)

露國女皇カメナ、波蘭ニ對シテ傍若無人ノ舉動ヲ爲ス

手ヲ指ス。ハ、ミツカラ記名調印シ、且ツ露西亞女皇陛下ノ全權大使ヲ
ルレフニン公(Prince Rejnin)ニ向テ左ノ數事ヲ誓フ。

(第一) 元老大臣、代議士、外國ノ大使、公使、其ノ他何人ニ論ナシ、レフ
ニ公カ國會ニ提出セル意見ト反對ノ意見感情ヲ懷クモノニ
ハ、決シテ交際スマシキ事。

(第二) 凡テ前項ノ人々トハ、一切語ヲ交ユマシキ事。

(第三) 何事ニ拘ハラズ、我カ議員各自地方ノ諸貴族ヨリ命シ、又ハ勅
メタル事項ハ、一切之ヲ國會ニ提出スマシキ事。

(第四) 要スルコト一切露西亞全權大使ノ意ニ逆フマシキ事。

(第五) 萬一此ノ誓約ニ背クコトアラバ、或ハ貴族ノ稱號ヲ剝カル
トモ、又ハ財產ヲ沒収セラルトモ、死刑ニ處セラルトモ、其
ノ他如何ヤウノ罰ニ處セラルトモ、一ニ露西亞全權大使ノ命
令ニ從フベキ事。

咄咄、露國ノ專横茲ニ至リテ又極マレリト謂フベシ。

第二章 露公使恣ニ波蘭正義ノ士ヲ捕

フ——委員相談會

露公使、波蘭正義ノ士ノ口ヲ箝セントス

一千七百六十七年我カ明和四年丁亥ノ波蘭國會ハ、十月五日ヲ以テ開ケタリ。露公

使レフニンハ、開會ノ數日前、各僧正、及び其ノ他露國ノ政界ニ抵抗スベ

キ嫌疑アル人々ヲ會シ、凡ソ何人ニ論ナク、猥リニ自説ヲ主張シ、抵抗ヲ

恣ニスル者ハ、後悔ヲ免カレザルベキ旨ヲ諭シテ、議員悉ク開會ノ曉ニ

默從ス可ラシメタリキ。サテ愈々開會ト爲ルヤ、先ツ第一着手トシテ立

法委員設置ノ議案提出セラレケルガ、此ノ委員ハ、全ク露國ノ監督ノ下

ニ立ツベキ規定ナレバ、議員中ニ猶ホ幾分カ殘存セル愛國正義ノ士ハ、

曩キニ露公使ノ爲メニ其ノ口ヲ箝セラレタルニモ拘ハラズ、シラコ

僧正ソルヲツク前ニ在リノ如キ先ツ起テ、之ヲ不條理ナリト論駁シ、壓制極

波蘭分割ノ近因(其一)

露公使恣ニ波蘭正義ノ士ヲ捕フニ委員相談會
利ニ流放ス

レリト難詰セリ。他ノ議員モ亦彼レノ例ヲ襲ヒ、續々起テ、議案ニ反對
シタリシガ、專横不法ノレプニ何條此ノ有様ニ堪ユヘケン、忽チ憤怒
ノ色ヲ顯ハシ、部下ニ命シテ、反對者ヲ捕ヘテ之ヲ西伯利ニ送致セシメ
タリ。即チ其ノ重モナルモノハ、シラゴロ僧正、キヨロ僧正 (The bishop of
Kioo) シラゴロ教長 (The palatine of Cracow) 及ヒ其ノ子ナリキ。

シラゴロ僧正
ノ遺難

初メシラゴロ僧正ハ、十月十三日ノ夜、一人ノ朋友ト共ニ飲食シツ、ア
リシガ、時ニ數多ノ露兵來リテ、其ノ家ヲ圍ミ、三方ヨリ家内ニ侵入シケ
ル。家ニハ、豫テ普公使ノ許ニ逃レ去ルベキ一條ノ拔ケ道アレドモ、僧正
ハ卑怯ノ譏ヲ恐レテ逃ル、一チ肯ンセズ。露兵ノ室内ニ亂入シ來ルナ
見ルヤ否ヤ、日頃大切ニ携帶セル愛國者ト往復ノ秘密書類ヲ手ニシ、起
チテ之ヲ暖爐ノ火中ニ投シ、露兵ノ士官ニ向テ「足下ハ予ヲ知ルヤ、足下
ハ、予ガ一箇ノ主權者タリ、シラゴロ僧正ハ、セグエリア
公ニテ、主權者タリシナリ。元老タリ、僧侶タルヲ知
ルヤ」ト言ヘリ。左レド士官ハ、露公使ヨリ逮捕ノ命ヲ受ケタル趣ヲ答ヘ

キヨロ僧正ノ
遺難

クレバ、僧正復タ敢テ抵抗セズ。悠々トシテ士官ニ勝ハレ行ケリ。
同夜、他ノ有名ナル愛國者モ亦同シ運命ニ遭ヘリ。當時名僧智識トシテ
尊崇セラレタルキヨロ僧正ツアルスキヨ (Zaluski) ハ、波蘭中興ノ學者ト
シテ、學問ノ再興者トシテ最モ世ニ知ラレタル人ナリ。豫テ貯ヘ置キタ
ル大金ト、現在ノ所得トヲ散シテ書籍ヲ購ヒ、二十萬部ノ書籍ヲ文庫ニ
滿テ、之ヲ公衆ニ寄附シタレバ、其ノ功實ニ少ナシト爲サズ。然レドモ
露國ハ固ヨリ斯ル大功ヲ度外ニ置キ、彼レヲモ亦逮捕セシメタルコソ
無慘ナレ。

露國、波蘭正
義ノ士ヲ虐待
ス

露國ハ、是レ等數名ノ愛國者ヲ捕ヘ、兵卒ニ命シテ波蘭ノ國境ニ護送セ
シメシガ、其ノ待遇ノ殘忍苛酷ナル筆紙ノ能ク盡スベキニアラズ。而シ
テ互相ノ間ニハ言語ヲ交ユルイヌラモ許サバリキ。カタリナ女皇ハ、彼
レ等ニ向テ、若シ前日ノ反對ヲ取消シ、露國ノ命令ヲ遵奉スルナラバ、再
ヒ青天白日ノ身ト爲スベキ旨ヲ傳ヘシメタリ。然レドモ金石ノ如キ人

々安ソ一身ノ安逸ノ爲メニ其節操ヲ變スベケン。彼等ハ管ニ固ク前説ヲ執リテ助カザルノミナラス、却テ此ノ命令ニ對シテ輕蔑ノ意ヲ表シケレバ、忽チ西伯利ニ護送セラレケル。

老猾至極ナル女皇ハ、斯ル愛國者ヲ虐待シタリトノ譏ヲ後世ニ遺サソフヲ恐レ、彼レ等ニ關スル記事ハ、一切之ヲ禁シタリト云フ。

露國ノ此ノ處置タルヤ、實ニ國民ノ權利ヲ辱シメ、個人ノ權利ヲ蔑ニスルノ甚シキモノナレバ、波蘭人民ハ、之ヲ聞キテ憤怒ニ堪エズ。元老及ヒ代議士ハ、論議スル所アラント欲シ、一團體ト爲リテ、波蘭王ノ面前ニ出デシガ、時ニ王ハ恬然トシテ頻リニ書類ヲ調査シ、即位節ニ於ケル裝飾品ノ事ニ關シテ設計シツ、アリキ。團體ハ露國ノ不法ニ就テ意見ヲ述ベシカドモ、王ハ多ク之ニ同意ヲ表セズ、只露公使ノ許ニ使ヲ送リテ、近日ノ處置ニ對スル辨解ヲ求ムベキノ一事ノミヲ決定セリ。既ニシテ使者ハ、公使ノ許ニ至リケルニ、公使ハ例ノ如ク侮慢ノ色ヲ顯ハシ、予ハ此

ノ事ニ關シ、只我カ女皇ニ對シテ責ヲ負フノミ。他人ニ向テ辨解ヲ與フルヲ要セズト答ヘ、且ツ囚徒ハ女皇ニ敬禮ヲ欠キ、女皇ノ聖旨ヲ疑訝ノ間ニ埋沒セシメント勉メタルニ由リテ罪ヲ蒙ムレルナレバ、國會ノ事務ノ全ク確定スル迄ハ放免セラレザルベシト辨シ、諸君若シ此ノ上ニモ立法委員設置ノ議ニ反對スルナラバ、誰レ彼レノ容赦ナク、悉ク之ヲ死刑ニ處シ、ワルソ一府ハ忽チ修羅場ニ變セラレ、ナラソ露國之ヲ政界トストノ意ナリ脅カシタリ。

間モナク、國會ハ再ヒ開ケタリ。ラヂウ、井ルハ、同盟黨ノ領袖トシテ、議長ノ席ニ就キ、露國ノ提出案ニ就テ議事ヲ開カシメシガ、同意者ハ甚少ナカリキ。是ニ於テ露公使ノ命令ニ依リテ、元老及ヒ代議士ノ中ヨリ六十名ノ委員ヲ撰ビ、之ニ全權ヲ附シテ、宗教、法律、政治、邊境、特權ニ關スル法度ヲ撰定スベカラシメ、既ニ撰定シタル上ハ、之ヲ本會ニ回附スルコト爲シ、本會ハ只之ヲ承諾スルノ權ノミヲ有スルコト爲セリ。又此ノ委員

ハ、露公使ノ許可ナクシテ欠席スルヲ得ズ、其ノ十四名ヲ以テ定數ト爲シ、斯クテ八名ノ過半數ニ付スルニ、憲法ノ運命ヲ決定スルノ權ヲ以テセリ。

露公使ノ權力愈々無限ト爲ル

レ[◎]プ[◎]ン[◎]ノ[◎]權[◎]力[◎]ハ[◎]愈[◎]々[◎]無[◎]限[◎]ト[◎]爲[◎]リ[◎]テ、波蘭ノ萬機ヲ專斷シ、賞罰黜陟一ニ其ノ手裏ニ在リ。波蘭王ハ唯々諾々トシテ一ニ彼レノ命令ニ遵ヒ、只露軍ノ觀兵式ニ臨ミ、演習ヲ目撃スルヲ以テ無上ノ快樂ト爲スガ如ク、
羽化生曰ク。此ノ一句ハ、歴史ノ報スル所ニ據ル。願フニ、快樂ト云フハ、只外見上ナルベシ。百方手術ヲ盡シテレプコンニ媚ビ、以テ其ノ愛顧ヲ買ハント勉ムルガ如クナリキ。

委員相談會
(其一)新教徒權利ヲ恢復ス

委員ノ相談會ハ、露公使ノ宅ト、教長ノ宅トニ於テ交互ニ之ヲ開キ、第一番ニ異教徒^{基督新}問題ニ着手セリ。而シテ彼レ等^{基督新}ノ氣勢ヲ張ラシメ、
ンガ爲メニ、新教國朝廷ノ諸公使、即チ英、普、瑞典、丁抹ノ諸公使ニモ臨席隨意ノ旨ヲ報シ、レプコンハ、議長ノ席ニ就キテ、堅ク言論ノ自由ヲ禁セリ。既ニシテ、十一月十九日ヲ以テ、此ノ議事全ク決了シケレバ、新教貴族

モ天主教貴族ト同等ノ權ヲ得、只國王ニ選ハルベキ權利ナキノミノ差ト爲レリ。

(其二)滿場決

次ニ憲法改正ノ議事ヲ開キ、彼ノ馬鹿ラシキ滿場決議^{前ニ記セシ、一人ニテモ不}
同意ノ者アレバ、可決スルルノ法ヲ恢復セリ。其ノ他二三ノ有益ナル改革ナキコアラザレドモ、要スルニ、此ノ法再興ノ過ナ價フニ足ラザルナリ。

國會ノ紛議并ニ解散

委員相談會全ク終テ告ケタレバ、更ニ國會ヲ召集シテ其ノ決議ヲ批准セシメントス。然ルニ出席議員ノ數ハ、波蘭建國以來未曾有ノ少數ニシテ、元老ノ如キハ殆ンド皆無トモ謂フベク、リチユアニア代議士ノ如キハ全ク皆無ナリキ。左レド斯ル少數ト雖モ、猶多クハ露國ノ僭越ニ異議ヲ唱ヘ、普魯士代議士ノ一人ノ如キハ、恐迫召集ノ不條理ナルヲ論シ、踪跡ヲ晦マセリ。而シテ露國黨ハ、ミヅカラ滿場決議ノ法ヲ議定シ、自餘ノ新法ヲ議定セシメンガ爲メニ、強テ開期ヲ連續シタリシカド、出席議員ノ數漸ク減少シテ、未ダ數日ナラザルニ、定數未滿ト爲ケレバ、遂ニ三月

五日ニ至リテ國會全ク散解シ、委員相談會ノ盡力モ水泡ニ歸シタルコソ笑止ナレ。

第三章 正義ノ士竊カニ回復ヲ謀ルニ

露兵、正義ノ士ト戦フ

是ノ時ニ當リテ、露國ノ暴横其絶頂ニ達シ、波蘭ノ運命ハ露公使レプロ
ンノ一舉手一投足ニ在リシナリ。然レハ波蘭人ガ獨立ノ精神ハ未ダ全
ク滅絶セズ。露人ガウルソニ於テ擅横ノ處置ヲ行ヒ、威權ヲ恣ニシツ
、アルニ際シ、憂國正義ノ士ハ、竊カニ同志ヲ集メテ挽回ノ策ヲ講ヅル
、アリキ。其ノ領袖ノ中ニ、カミエニール僧正シラメンスキ(Krasinski, bi-
shop of Kamieniec)ト云ヘル人アリ。此ノ人ハ、シラコイ僧正ノ志ヲ繼ギテ
露國ノ擅横ニ抗シ、社會ノ頗ル重ニスル所ナリ。人ト爲リ、體質虛弱ニシ
テ腕力ニ乏シク、一見怯懦ナルガ如シト雖モ、沈勇ニシテ百難ニ逢フモ

波蘭人獨立ノ精神ヲ存ス

カミエニール僧正シラメンスキ

挫屈セザルノ氣象アリ。曩キニシラコイ僧正カ國會ニ於テ氣餒ヲ吐キ
ツ、アルニ際シ、カミエニール僧正ハ、露國ニ抵敵セント欲シテ、竊カニ
土耳其ノ援ヲ求メ、土帝モ亦埃國マニ局外中立ヲ守ラハ、必ラズ波蘭ニ
援ヲ與フベキ旨ヲ答ヘケルニ由リ、僧正猶帝ト條約ヲ結ハント企テニ
キ。會々彼レガシラコイ僧正ト親密ナリトノ評、露公使ノ耳朶ニ觸レシ
カハ、露公使深ク彼レヲ疑ヒテ、シラコイ僧正等ト共ニ逮捕セントス。彼
レ迅速ニ失踪シタルヲ以テ、辛クシテ禍ヲ免カル、ヲ得タリ。

彼レ既ニ家ヲ逃ル、ヤ、露人ノ搜索極メテ嚴ナリ。然レドモ醫師ノ扮装
ヲ爲シタルヲ以テ危フキ虎口ヲ脱カレ、現ニ搜索者ノ依頼ニ應シテ診
察ヲ施シ、藥劑ヲ投シタルヲアラリシカドモ、猶幸ニシテ看破セラレ
ザリキ。又他ノ折ニ於テハ、アハヤ發覺センズ有様ニテ、最ト危フカリシ
ガ、農夫ノ車体ニ供スベキ古箱ノ中ニ隠レテ、辛クモ其ノ場ヲ逃レタリ
ト云フ。既ニシテ安全ノ場處ニ達シ、茲ニ數名ノ從者ハ、彼レノ命令ニ應

シテ彼レヲ待テ受ケシカバ、從者ト共ニ普國ノ軍服ヲ着シ、此ノ扮装ニ於テ、屢々露國分隊ノ目ヲ泳リ、ワルソトニ到リテ、黨與ト二三ノ打テ合セテ爲シタル後、維也納ニ趣キテ、埃國政府ヨリ局外中立ノ約束ヲ得ンガ爲メニ、出發シ、道ツガラシレシニアニ到レリ。

然ルニ、僧正ガ折角ノ苦心勉力モ、一人ノ輕操ノ爲メニ水泡ニ歸シケルコソ痛マシケレ。請フ是ヨリ其頗末ヲ述ベン。カミエニク僧正ト、クラコト僧正トノ間ニ密使ノ役ヲ勤メタルワルカ長老ヨセフ、プーロースキ(Joseph Pulawski)ト云フ者アリ。此ノ人ハ、久シク代言ヲ業トシ、曩キニラドソ同盟會會員ノ一人ニ選バレタルモノナリ。露公使レアコンハ、心ニ彼レヲ侮リ、彼レガ同會員ト爲リシ際モ更ニ之ヲ意ニ介セザリシガクラコト僧正ノ知遇ヲ受ケ、信任ヲ蒙ルリシカバ、爾來漸ク露公使ノ疑フ所ト爲レリ。一日着帽ノ儘、公使ノ目前ニ在リシ時、公使ミツガラモ亦着帽セルコモ拘ハラズ、痛ク彼レノ無禮ヲ咎メテ、打テ懲ラサント脅セ

ワルカ長老ヨセフ、プーロースキ

シテアリ。彼レ此ノ侮辱ヲ受ケテヨリ、愛國ノ熱情ハ更ニ一層ノ烈シサヲ加ヘ、深ク其跋扈跳梁ヲ憤リテ、國家ノ爲メニ、將タ一身ノ爲メニ、一日モ早ク之ヲ驅逐センコトヲ希ヒ、カミエニク僧正ノ處置ヲモドカシク思ヒケレバ、斷然、策ヲ決シテ、別ニミツガラ運動ヲ試ミ、ワルソトノ諸貴族ニ謀ヲ通シテ、或ハ兵力ヲ借り、又ハ金穀ヲ出サシメ、斯クテ若々密計ノ歩武ヲ進メツ、アリケリ。會々カミエニク僧正ノ弟ミカエルクラシンスキ(Michael Krasinski)モ亦プーロースキノ密計ニ一味シケレバ、相共ニ提挈シテ全國ニ同志ヲ募リ、事ヲ起サント欲シテ、ワルソトヲ出發シケル。

プーロースキハ、其ノ三子ト、姪トヲ伴ヒ、其一人ハ猶妙齡ナルコモ拘ハラズ、ワルソト近傍ニ在ル我カ領地ニ居ラシメ、己レニ代ハリテ自他交渉ノ事ヲ司ラシメタリ。同志ノ集會場ハ波領露西亞ノ首府レオポルコソ宜シカラメトノ、説モアリシカド、手近カニ過ギテ事ノ露顯シ易カラ

正義ノ士竊カニ回復ヲ謀ルル兵、正義ノ士ト呼ブ

シヲ慮リ、更ニバーナ以テ集會場ト定メケル。バーハ、ポドリア伯爵領
ノ一小都會ニシテ、ガミエニクナ距ルヲ五リ一リハ、三哩ナリ。土耳其ノ境
ヲ距ルヲ七リ一リハ、グノ地ナリ。是ニ於テ一千七百六十八年我カ明和五年戊子二月二
十九日ヲ以テ、第一回ノ集會ヲ開キ、露國ノ羈絆ヲ脱スルノ方法ヲ議セ
シ。當日會合ノ人々ハ、プーロースキ、及ヒ其ノ一族四名、クヲシンスキ伯
(Count Krasinski)、外貴族二名、合ハセテ八名ニ過ギズ。然レドモ檄ヲ發シ
テ露國ノ罪ヲ數ヘ、同志ヲ召募セシニ、加盟ヲ申込ミタル者既ニ三百名
以上ノ多キニ及ベリ。

久シカラズシテ、同志ノ數一躍シテ八千名ニ達シケレバ、土耳其、索遜尼
韃靼ニ使者ヲ送リテ聯絡ヲ通シ、今ハ公然同志ヲ募ルニ至レリ。噫々彼
レ等ノ志ヤ實ニ嘉ミスベシ。然レドモ其ノ舉動ニ至リテハ、少シク大早
計ノ憾ナキニアラズ。何トナレバ、當時波蘭全國ハ、既ニ敵ノ占領スル所
ト爲リ、四方以上ノ露兵、各所ニ駐屯セリ。而カモ貴族ノ大半ハ兵備ヲ有セザレバナリ。

波蘭ノ愛國者
土耳其、索遜
尼、韃靼ニ使
者ヲ送ル

ガミエニール
同盟黨
ノ輕便、事ヲ
破ルベキナ前
知ス

露公使、愛國
者ノ處置ヲ憤
ル

左レバ、ガミエニール僧正ハ、同盟ノ舉動ヲ聞キテ大ニ驚キ、且ツ怒リ、一
時ハ彼レ等ト聯絡ヲ絶ント欲セシガ、愛國ノ衷情ヨリ之ヲ絶ツコ忍
ビズ。又思ヒ直シテ援ヲ與ヘ、ミツカラ維也納、ウエルサイユ佛國ノドレス
ダン案、露國ノニ至リテ一臂ノ力ヲ添ヘラレシヲ乞ヘリ。

露公使レプコンハ、愛國者ガ近日ノ動靜ヲ聞キテ大ニ驚キ、且ツ其ノ檄
文中ニ已レテ攻撃セルヲ見テ、烈火ノ如クニ怒リ、直チニ令ヲ發シテ彼
レ等一同ヲ誅戮セント脅カセリ。左レド土耳其人ハ其ノ間ニ立チテ調
停ヲ試ミ、露國ガ曩キニ撤兵ノ事ヲ約シツ、今猶之ヲ實行セザルヲ咎
メケレバ、レプコン此ノ一擊ニ銳鋒ヲ挫ガレ、其ノ辨解ヲ看出ス。トニ汲
々トシテ、オノツガラ處刑問題ヲ等閉ニ附シヨリキ。然ルニ波蘭王スタ
ニスラス、アウガスタスハ、愚カニモ同盟黨ノ舉動ヲ恐レ、却テ露公使ニ
黨シテ、露兵ヲ依然駐屯セシメシヲ求メ、怯懦ナル少數ノ元老モ亦露
國ノ保護ヲ仰ギテ、『叛賊』ヲ鎮撫センヲ乞ヒケレバ、レプコン恰カモ

愛國者、露兵
ト闘フ

波蘭王及ヒ元
老亦望ヲ同盟
黨ニ屬ス

正義ノ士竊カニ回復ヲ謀ルル露兵、正義ノ士ト戦フ

七八

一渡リニ橋ヲ得タルガ如ク、露兵ニ向テ同盟黨追討ヲ命シ、又波蘭人民ニ
向テ同盟黨ト聯絡ヲ禁セリ。是ニ於テ同盟黨ト露兵トノ間ニ屢々小戦闘ヲ
起シタリシガ、勝利ハ常ニ愛國者ノ方ニ在リケレハ、プーロースキ猶盛
ンニ部下ノ兵ヲ集メ、慷慨ナル演説ニ由リテ頻リニ彼レ等ヲ鼓舞奮激
セシメタリ。

是ノ時ニ當リテ、元老ハ同盟黨ト商議スル所アラント欲シ、モクヲノ
スキ(Mokranowski)ニ令シテ同盟黨ニ使セシム。モクヲノスキ固ヨリ一
個ノ愛國者ナレバ、竊カニ志ヲ同盟黨ニ属セザルコアラズ。然レドモ未
タ全ク之ヲ信用スルコト能ハズ、或ハ其ノ無妄ノ叛徒ナラント疑フガ
故ニ、親シク其ノ動靜ヲ視察セント欲シテ、喜テ使節ノ任ニ當リ、以爲ラ
ク「若シモ其ノ力強クシテ、回復ノ功ヲ全フスルコト得ルナラバ、須ラク
王ヲ勝ヒテ之ニ加擔セシムベク、若シ又其ノ力弱クシテ斯ル大事ヲ遂
クムコト足ラザルナラバ、畢生ノ力ヲ振ヒテ其ノ誅戮ヲ免カレシメント」。

露國女皇、波
蘭ヲ叛徒ト追
討ヲ命ス

加之ノミナラズ、王ハ彼レノ出發ニ臨ミテ「朕ハ波蘭人中ノ最モ切ニ露
國ノ羈絆ヲ脱セント望ムモノナリ」ト明言シ、元老モ亦彼ノ愛國者等ヲ
同盟黨ト認ムベキノ委任狀ヲ與ヘ、斯クテ違法ノ叛徒ナル惡名ヲ蒙ラ
ザラシムルコトニ勉メタリ。

適々露國女皇カマリナ二世ハ、露公使レプコンニ命令ヲ下シ、同盟黨ヲ
以テ波蘭國、及ヒ波蘭王ノ敵ナリト宣言シ、波蘭若シ其ノ軍ヲ露軍ニ合
シテ其ノ追討ニ從事セザルニ於テハ、朕ハ速ニ大舉シテ全國ヲ蹂躪ス
ベシト勅セリ。是ニ於テ既ニ商議ノ間ハ休戦ヲ約シタルコトモ拘ラズ、レ
プコンハ、露國正兵七聯隊、コサツク兵七千人ヲハトニ送り、道ツガラ放
火、掠奪、殺戮ヲ恣ニセシメ、少數同盟黨ノ不意ヲ襲ハシム。此ノ時、プーロ
ースキノ許ニ、三子戰死ノ由ヲ報スルモノアリ。プーロースキ神色自若
トシテ言ヘラク「予ハ豚兒ガ當務ヲ盡シタルヲ聞キテ甚満足ス」ト、然ル
ニ第三子カシミル、プーロースキ(Casimir Pulawski)ハ、辛クシテ虎口ヲ免

波蘭分割ノ近因(其一)

七九

カレ、僅々二十一歳ノ妙齡ヲ持チナガラ、奮激突進シテ、三タビ露軍ヲ驅逐シタルサマハ、老功ノ勇士モ舌ヲ捲キテ驚嘆スルハカリナリシト云ヘリ。

モクワノース
キノ苦節

モクワノースキノ苦心ハ膏餅ニ歸シタルノミカ、却テ欺騙ノ形迹ニ陥リタルヲ嘆カハシキ。左レド、彼レガ誠心誠意以テ商議ニ從事シタルハ、十目ノ均シク視ル所ナレバ、不幸ナル犠牲同盟黨ヲ指スハ、毫モ彼レヲ疑ハザリシ。彼レ王ニ復命シテ言ヘラク、陛下ヨ、今回ノ事ハ實ニ言フコ忍ビザルナリ。臣ハ暫ラク身ヲ外國ニ避ケテ以テ後事ヲ謀ラザルベカラズト。去リテ佛國ニ行キ、佛廷ノ援ヲ借リテ、海命ナル國人ヲ救ハント企テケリ。

露國ノ恐迫ニモ拘ハラズ、同盟黨ノ數ハ、日ニ益々多キヲ加ヘ、其ノ勢旭日ノ如シ。而シテシヨイチム、ポロツキ伯(Count Joachim Polecki)ハ、ガリシアニ於ケル愛國者一派ノ牛耳ヲ執リ、全國到ル處、彼レヲ援ケント欲シ

ナルツアノ
スルキ、露國公
使ヲ捕ヘント
謀ルルハ、彼レノ
小傳

テ好機會ノ來ルヲ待テリ。左レバ波蘭人民ハ、殆シト一人トシテ露人ヲ憎ハガルハナク、レアニシテ罵ルノ聲ハ九重ニ聞エ、波蘭王モ亦竊カコ侍從ナルツアシリスキ(Dziarowski)ガ露公使捕獲ノ計畫ヲ認可セリ。ト

此ノナルツアノリスキト云ヘルハ、彼ノ甲比丹スキメ(Capt. John Smi-

(一)西曆一五七九年、我が天正七年巳卯、即チ徳川二代將軍秀忠出生ノ年ノ生レ、同一六三二年(我が寛永八年辛未)死ス。英國ノ冒險家ナリ。屢々危險ニ遭遇シテ幸キ生命ヲ免カレタルナリ。亞米利加殖民地ニ行キ、米國史等ニト同シク、屢々危険ヲ冒カシ、冒險的ノ生活ヲ爲シタル人ナリ。初

メ東印度ニ行キ、佛軍ニ入りテ、同國ノ爲メニ戦ヒ、又歐羅巴風ノ軍制ヲ用キテ、シポイ兵ヲ編制シ、亞米利加、葡萄牙、西班牙ヲ遊ビ、歸國シ後、波蘭王ガニアトリスキ即チスキメノ宮廷ニ事ヘテ、其ノ快活ナルト、奇事ニ富ミタルヲ以テ頗ル寵遇ヲ行タリ。其人ト爲リ、至誠惻怛、愛國ノ心最モ深ク、露國ノ跋扈擅横ナルヲ見、慷慨ノ念勃興シテ、ミツカラ禁スルコト能ハズ。輒モスレバ、公然同盟黨ヲ辯護スルコトアリキ。遂ニ斷然意ヲ決メテ、レプレンヲ捕獲セントス。然ルニ事成ラズニテ發覺シタリカバ、畢生

露公使怒リテ
益々愛國者ヲ
驅リテサント
ト

露軍バリーチ政
メテ之ヲ陷ル

正義ノ士縮カニ回復ヲ謀ルル露兵、正義ノ士ト戦フ

八三

ノ力ヲ振ヒテ其ノ場ヲ切り抜ケ、辛クシテ逃レ去ルヲ得タリ。
捕獲ノ密謀發覺シタリシカバ、レプコン益々怒リテ、同盟黨勦滅ノ命令
ヲ嚴ニシ、之ヲ攻撃スルヲ愈々急ナリ。是ニ於テ、ポロツキ伯ハ、其ノ軍少
ナク、衆寡敵スベカラザルヲ知リテ土耳其ニ逃レリ。露軍次アバリーノ同
盟黨ヲ勦絶セント欲シテ、同地ニ進ミ、又ユリシレインニ在ルコサツク
兵ハ、波蘭ノ多事ニ乗シテ、最モ酸鼻スベキ殘酷ノ處置ヲ行ヘリ。是レ皆
露國政府ノ指揮ニ依レルモノト知ルベシ。

プーロースキハ、ポロツキ伯ノ敗軍ヲ集メント欲シテ、暫ラクバリーヨリ
ガリシアニ到リシガ、露軍之ヲ機トシテ、バリーチ襲ヒ、一撃ノ下ニ之ヲ陷
レントセリ。抑モバリーノ地タルヤ、堡築甚タ堅固ヲ欠キ、壘低ク、溝乾キ、柵
極メテ弱キヲ以テ、逆モ大適ヲ引キ受ケテ、久シキニ堪ユベキコアラズ
左レド國ノ爲ニ一死ヲ誓ヒタル同盟黨ハ、飽ク迄モ敵ニ抵抗シ、堅ク之
ヲ守ラントノ志ヲ決シケルコソ健氣ナレ。此ノ時、同盟黨ノ中ニマヨク

(Mark)ト呼ベル一僧アリ。常ニ非常ノ狂信家ナルガ故ニ、我レ等ハ一同ニ
宗教ノ爲メニ戰フナリト稱シ、率先テ衆ヲ鼓舞シケル。此ノ僧、露軍ガ
第一發ノ大砲ヲ放タントスルニ當リテ、城壁ニ登リ、十字ノ印ヲ結ビシ
ガ、忽チニシテ大砲破裂シケレバ、城兵ハ此ノ奇瑞ヲ見テ、頗ル敬神ノ念
ヲ起シ、上帝、我レヲ保護シ給フト稱シテ大ニ喜ビ勇ミケルトゾ。

當時露國ノ大砲ハ粗悪ヲ極メタレバ、發砲ニ臨ミテ破裂スルハ、珍ラシカラヌ事ナリシト云フ。

左レド久シカラズシテ、同盟黨ノ中ニ異論[◎]ヲ生シケレバ、折角死ヲ決シ
タル勇氣モ、其ノ効ヲ奏スルヲ能ハズ、僅々數日ノ間ニ、都城ハ全ク敵軍
ニ陥ラレ、一千二百名ノ同盟黨ハ、鎖繫ギト爲リテ露西亞ニ送致セラレ
タリ。

第四章 露土兩國干戈ヲ接ユル同盟黨

ノ動靜

波蘭分割ノ近因(其一)

八三

抵抗ノ精神、各處ニ發揮ス

露土兩國干戈ヲ接ユル同盟黨ノ動靜

愛國者抵抗ノ精神ハ全國ニ發揮シ、リチニアニアニ於テ、シラコーニ於テ、及ヒワルンノ附近ノロクロクナムニ於テ、新ニ同盟黨ヲ團結セリ。而シテシラコーハ、其ノ位置上ヨリ、曩キニ離散シタル愛國者ノ集合場ト爲ルシカバ、其ノ人員モオノツカラ多ク、六週ノ間、敵ノ攻撃ヲ禦ギタリ。此時ニ當テ、同盟黨ノ爲メニ、最モ勢力ヲ加フベキ出來事起レリ。ソモボドリアノ境ニ、バルタト名クル一小都會ノ地アリ。土耳其ノ版圖ニ屬シ、僅カニ一小河ニ由リテ、波蘭ト區別セラレ、地ナリ。茲ニ太守ノ任ヲ帶ブルハ、ジャコーバガ(Jakoubaga)ト呼ベル鞑靼人ニシテ、少時ヨリ露國ヲ隣敵視シ、早晚機會ニ乘ジ、土軍ヲ以テ之ニ當ラント謀リシガ、今ヤ佛公使ノ勸誘ニ從ヒテ、曩キニ潰散セル少數ノ同盟黨ニ露國攻撃ヲ促カシ、之ヲ土領ニ誘ヘリ。是レ露軍ヲ我カ領内ニ侵入セシメ、之ヲ口實トシテ露土戰爭ヲ開カンガ爲メト知ルベシ。露軍ハ、同盟黨ノ土領ニ逃レタルヲ見、之ヲ追フテ、バルタニ進ミ、遂ニ同府ヲ陥レテ之ヲ焚キ、數多ノ土耳

露軍、土境ヲ荒ラス

プロロニスキ露軍ニ捕ヘラ

リチニアニア同盟黨

埃普兩國ノ動靜

波蘭分割ノ近因(其二)

其人ヲ屠リテ然ル後引キ返セリ。ジャコーバガ是ニ於テ思フ笑坪ニ入リケレバ、速カニ使ヲ君士但丁堡ニ馳セテ、事ノ顛末ヲ土耳其帝ニ奏ス。依リテ土耳其帝ハ、同府駐劄ノ露公使ヲ召シテ露軍ノ不法ヲ責問シ、西曆一千七百六十八年^{我カ明和五年戊子}ノ冬、土軍、鞑靼軍聯合シテ^{ボリスレヤフ}新塞爾維ニ入り、三萬五千人ヲ擒ニシテ歸レリ。新塞爾維ハ、曩キニ露國ガ不正ニ奪ヒタル地ナリ。此ノ評判ノ同盟黨ノ耳朶ニ觸ル、ヤ、同黨ノ勇氣之ガ爲メニ倍奮シ、プロロニスキノ如キハ、モルダヴ^{土耳其ノ地}ノ潛伏地ヨリ歸リテ再ヒ回復ヲ謀レリ。左レド憐ムベシ、輕々シク鞑靼太守^{ツヤゴ}信ヲタルヲ以テ、露軍ノ爲メニ其ノ隙ニ乘ジテ捕ヘラレタリ。又リチニアニアノ同盟黨ハ、ラヂウ^{ツヤゴ}キル。パツク伯(Count Pac)及ヒ其ノ他ノ人々之ガ領袖ト爲リテ、加盟者日ニ益々多シ。又或ル人々ハ、刮目シテ露土戰爭ノ起ルヲ待チ、其ノ模様ニ依リテ身ヲ處セント企ルモアリ。現ニ埃普兩國ノ如キハ、互ニ相

檢束シツ、各々二十萬ノ兵ニ進軍ノ準備ヲ整ヘシメ、露土兩國ノ交渉如何ヲ待テリ。

一七六九年ノ役

一千七百六十九年 我カ明和六年巳丑 露土再ヒ干戈ヲ接ニ開戦ノ當初、土軍不幸ニ

シテ敗績シ、露軍破竹ノ勢ヲ以テモルダヴヰアニ入り、土軍ヲ逐フテ、ナヨシムヲ攻略セリ。然レドモコハ只一時ノ勝利ニ過ギズシテ、忽チ土軍ノ驅逐スル所ト爲レリ。露軍ト同盟黨トノ間ニモ、亦小戦闘ヲ開キタリ。左レド彼此共ニ勝敗ナカリキ、愛國者プロロースキノ一家ハ、是ヨリ先キ、既ニ死没シ、獨リカシミルノミ生存シケレバ 第七九頁及ヒカシミル僅カ第八〇頁參看 二十人ヲ率ヰテ、匈牙利ニ退ケリ。

是ノ時、土耳其ノ本隊三十萬人、モルダヴヰアニ進入シ、將サニ波蘭ニ向ハントシタリシガ、波蘭人ガ土軍ヲ恐ル、トハ恰カモ露軍ニ異ナラズ。カシエニ一ク僧正ハ、其ノ頃同盟黨ノ本營トセシ埃領シレシアナルテスチンノ退隱所ヨリ、ポロツキ伯ニ書ヲ送リテ曰ク。

土耳其亦波蘭ニ利アラズニカシエニ一ク僧正ノ先見

露西亞人ヲ逐ヒ出サンガ爲メニ、土耳其人ヲ引キ入ル、ハ恰カモ小動物ヲ逐ヒ出サント欲シテ、家ニ火ヲ放ツニ異ナラズ。

ポロツキ伯、土陣ニ到ル

ト。ポロツキ伯ミヅカヲ土陣ニ到リ、土軍ヲシテ露國ノ方位ニ進マシメント勉メタリキ。此ノ土軍ノ總督マホンツトエミン(Mahomet Emin)ハ元來絹類ヲ販賣スル旅商ヨリ現在ノ地位ニ登リシ人ナレバ、其ノ才幹ハ固ヨリ衆人ノ許ス所ナレド、軍事ニ至リテハ未ダ嘗テ講究シタルナク、今回ノ出陣ハ則チ彼レノ處女陣ナレバ、其ノ兵略ニ拙キトモ亦推シテ知ルベシ。彼レハ常ニ露西亞ト同シク波蘭軍ヲモ憎ム由チ明言シ、且ツ之ヲ勦滅スルヲ以テ其ノ攻略ト爲セリ。

西洋ノ史家彼レノ攻略ヲ記シテ言フク。彼レノ政畧ハ、波蘭ヲ荒野ニ變シ、決テ他國ノ野心、猜忌、戦争ノ題目ヲラザラシムルニ在リ。蓋シ波蘭ヲ保護シ、之ヲ利用シテ露國ニ對スル藩屏ト爲スガ如キハ、基督教國朝廷ノ利益タルベキモ、土耳其政府

波蘭分割ノ近因(其一)

ボロツキ伯ト
土將トノ對話

ニ至リテハ、決シテ斯ル主義ヲ執ラザルナリ。何トナレバ、同政府ノ政略ハ、常ニ其ノ周圍ヲ荒野ト爲スニ在レバナリ。

斯ノ如キ人ガ波蘭ノ利益ト爲ザルベキハ、火ヲ賭ルヨリモ明カナリ。サテボロツキ伯ハ、土軍總督トホムシニ向テ聊カ「世辭ヲツカヒ」「我カ同盟黨ハ、貴政府ガ從來屢々敝國ニ援助ヲ興ヘタル如ク、今回ニ於テモ亦援助ヲ興ヘラルベキヲ信シ、貴軍ガ敝國ニ自由ヲ恢復セシメラルベキヲ信シテ感謝ニ堪エザルナリ」ト陳セシニ、土將ハ左右ヲ顧ミテ言ヘラシ。彼レハ、吾人ヲ以テ土耳其ノ歴史ヲ知ラザルモノト爲スナリ。彼レニ教ヘヨ。吾人ハ我カ政府ガ決シテ異教徒基督教徒、即チ波蘭ヲ援ケタルヲナキヲ知り、屢々波蘭人ヲ苦メタルヲ記憶セルヲ予ハ今虛偽ト眞實トナ取り交セタル一箇ノ基督教國ト同盟ヲ結ビツ、アルナリ。

土將又左右ニ言ヘラシ。

是レ等ノ人民ガ自由ト稱スルハ何事カ。願フニ法律ナキニ生活スル

ニスデル河畔
ノ戦

ノ權利ヲ稱スルナラン。

是ニ於テ、ボロツキ猶土ノ總督ト約シ、而シテ土軍及ヒ韃靼軍ノ一分隊ハ、土耳其皇子ノ部下ニ屬シテ、ニール河ノ方位ニ進行スベキ事、同盟黨ハ之ト同時ニ、援兵ヲ伴ヒテ自國救護ノ爲メニ進ムベキ事、總督ハ本隊ヲ率ヒテ、遠クヘンダトニ進ミ、敵軍ノ動靜ヲ偵察スベキ事ヲ定メリ。

此際露軍ハ、ニスデル河畔ナルヲヨシム。攻略ノ嚴命ヲ受ケテ同地ニ進ミ、同盟軍及ヒ土軍ノ分隊モ亦一方ヨリ進ミシカバ、日ヲ逐フテ彼此相接近シツ、アリ。左レド敵モ味方モ更ニ之ヲ知ラザリキ。既ニシテ兩軍不意ニ邂逅シケルニ、土軍ハ一發ノ砲聲ヲ聞クヤ否ヤ、忽チ逃レ去レリ。

ソモ此ノ土軍ハ、多ク未熟ノ兵卒ニシテ、大砲ヲ使用スルニ慣レズ。敵ガ自在ニ之ヲ使用スルヲ見テ、大ニ驚キ、以爲ラシ。是レ必ラズ妖術ナラント。サテハ一撃ニ逢フテ斯ク敗走シタルナリ。

土將ノ一人ハ、露軍ノ爲メニ擒ニセラレシガ、露將ニ向テ左ノ要求ヲ

爲セリト云フ。

君ヨ彼ノ人言ヲ聞キ分ケテ能ク運轉シ、裝藥スルヲナクシテ百回以上ノ發射ヲ爲ス魔砲ヲ予ヨ見セ給ハラズヤ
ト。土軍カ歐洲流ノ大砲ヲ妖術視シタルヲ此ノ一言ヨ由リテモ明カナリ。

サテ此ノ敗走シタル土軍ハ、チヨシムニ到リテ、ポロツキガ部下ノ同盟軍ト聯合シタリ。

露軍又七月十四日ヲ以テ、チヨシム府ヲ圍ミ、又海港ヲ封鎖シテ以テ同盟軍ヲ苦メリ。然レドモ、ポロツキノ勇氣ト深慮トハ、能ク同盟軍ノ志ヲ堅フシ、死力ヲ盡サシメケレバ、三週ノ久シキコ渉ルモ、露軍之ヲ陥ルハ不能ハズ。兎角スル間ニ、土將モルダヴァンシ(Moldavanski)四千ノ兵ヲ率ヰテ來リ援ヒ、皇子モ亦露軍侵入ノ報ヨ接スルヤ否ヤ、直チニ軍ヲ復ヘシテ、同地ニ向ヒシカバ、露軍叶ハズトヤ思ヒケン、夜ヨ乘ジテ再ヒコス

露軍、チヨシムヲ圍ム

露軍チヨシム

ヲ退ク

土軍之ヲ追フ

土軍、天災ノ爲メニ大敗シチヨシムヲ陥ル

テル河ヲ涉リ、橋梁ヲ撤シテ退ケリ。此ノ戰ニ、總督シヤコロバガハ首ヲ失ヒテ死去シケレバ、モルダヴァンシ其ノ後ヲ襲ギテ總督ノ任ニ當レリ。依リテ假橋ヲ架シ、且ツ之ヲ渡ルニ先チテ、一編ノ告文ヲ發セリ。此ノ告文ノ精神ハ、前任總督ト全ク異ナリテ、波蘭人ヲ宥メ、之ヲシテ土軍ガ波蘭ノ國境ヲ超ユルニ異議ナカラシムベキモノナリ。是ニ於テ總督ハ九月十六日、六萬ノ兵ヲ率ヰテ、ニステル河ヲ涉リ、露軍ヲ擊テテ稍々勝利ヲ得タリ。然レドモ、連日ノ大雨ヨ河水漲溢シ、急流ノ爲メニ假橋墜ツルニ垂ントシタリトノ風説、土軍ノ間ニ流布シタリシカバ、士卒皆周章狼狽シテ歸心矢ノ如ク、戰ヲ止メテ、大軍一時ニ動搖セル假橋ヲ渡ラントス。假橋ハ大砲ノ重量ニ堪エ兼チテ墜落シケレバ、六千乃至七千ノ兵ハ、敵境ニ遺サレテ四潰五散シ、渡リ果セタル土軍モ士氣沮喪シテ、露ノ追兵ヲ支フルヲ能ハズ、遂ニ全ク敗績シ、露軍ハチヨシムヲ陥レテモルダヴァンシアノ通路ヲ開ケリ。

波蘭分割ノ近因(其一)

土軍ノ敗北ハ、忽チ同盟黨ノ盛衰上ニ影響ヲ及ホシ、昨日開ケシ愁眉モ、再ヒ以前ノ盛類ニ復セリ。ソモ土軍ガ戰フ毎ニ勝利ヲ重テタル其ノ間ハ、波蘭全國到ル處、同盟黨ノ起ラザルハナク、只斷然タル勝利ノアラザルヲ以テ、人民未ダ悉ク兵器ヲ手コスルニ至ラザルノミナリキ。然ルモ此ノ敗報ニ連レテ、一般ニ疑懼ノ念ヲ生シ、失望ノ巷ニ向ヒタルコソ口惜シケレ。然レドモ愛國ノ志士ハ一小黨ト爲リテ更ニ屈スル所ナク、地方同盟黨ノ首領及ヒ代表者ハ、十二月初旬ヲ以テ、ピエラ(又ピリツトモ云フ)ニ會シ、而シテクラシンスキ伯ヲ波蘭王國總理大臣ニ、ポロツキ伯ヲ陸軍元帥ニ撰ビ、又パツク伯ハ、二伯不在ノ場合ニ之ヲ代理セシムルコトニ定メリ。

ピエラ、又ピリツクハ、シレシア邊境ノ一部會ニシテ、一半ハ波蘭ニ在リ、又一半ハシレシアニ在ルナリ。波蘭王ハ、此際依然トシテ、有レドモ無キガ如ク、其ノ部下ニ七千ノ兵アレドモ、只近衛兵トシテ王室ニ勤仕スルノミ。壓制擅斷ナル波蘭駐劄露

公使レプコンハ、本國へ呼ビ還へサレタレドモ、彼レガ政略ハ猶舊ノ如ク痕迹ヲ存シ、彼レノ歸國以後、朝廷黨カ自由ヲ得タルハ、局外中立ノ地位ニ立チテ、露國ノ壓制者ト、土耳其ノ代戰士トノ間ノ戰爭ヲ傍觀スルノ一事ノミ。

既ニ冬期ト爲リケレバ、露軍ハ、寒氣ヲ恐レテ波蘭ニ歸レリ。然レドモ新任公使ヴナルコンスキ(Volkonski)ハ、古稀ニ垂ントシタル老人ナレバ、苛刻ノ氣象モオノヅカラ和ラギテ、同盟黨ニ對スル處置モ、前任者ニシテノ如ク殘酷ナラズ。只波蘭ニ在ル同盟黨ト、ピリツクノ會場トノ聯絡ヲ遮斷スルヲ以テ足レリトセリ。

又愛國正義ノ士即チ同盟黨ノ人々ハ、長キ小戦闘ニ艱難辛苦ヲ極メ、而シテ十ガ八九ハ、野獸ノ如ク驅逐セラレ、惡徒ノ如クニ虐待セラレテ流離ノ身ト爲リタル者其ノ數ヲ知ラズ。憐レト云フモ愚ナルベシ。然レモ猶敵愾ノ心ハ毫モ失セ遣ラズシテ、或ハ村落ノ農家ヨリ奪ヒタル軍資ヲ深林ニ運

獨逸帝、同盟黨ヲ助フ

ヒ、又ハ寺院ノ梵鐘ヲ熔カシテ彈丸ヲ製スル者モ多カリキ。
 ビリツノ同盟黨ハ、同地ノ意外ニ安全ナク、輒モスレバ露國ノ侵襲ヲ受ケ易キヲ慮リ、又波蘭ノ同黨ト交通ヲ遮斷セラレタルヲ以テ、更ラニ會場ヲ匈牙利ナルエスベリニスニ移シ、又其ノ軍ハ、カーパツアン山道ヲ占領セリ。偶々獨逸帝ヨセフ二世(Joseph II) マリア、テレサ女皇ノ子此ノ山道ノ軍ヲ訪フテ、パツク伯及ヒ其ノ他ノ人々ト對話シケレバ、パツク伯ハ、其ノ翌日ヲ以テ帝ニ伺候セリ。然レトモ凡テ効ナカリキ。サテ又同盟黨ハ、一千七百七十年 我カ明和七年庚寅二月ヲ以テ、ウルソイヨリ四十リグヲ距レル一都府ペトリツコイヲ攻撃シ、漸クソルソニ近ヨリタリ。然レドモ戦利アラシクテ復タカーパツアン山道ニ退キ、其ノ附近ニ於テ屢々小戦闘アリタリ。

要スルニ、同盟黨ハ、波蘭ノ精神ノ代表者ニシテ、其ノ沸騰シタルニ過ギス。而シテ真正ノ精神ハ、波蘭ニ在リテ冥々ノ間ニ働ラキ、破裂スベキ時

同盟黨ハ、單ニ波蘭精神ノ代表者ナリ

機ヲ待チツ、アルナリ。又エベリリスノ小會場ニテハ、一陽來復ノ春ト爲リテ露土ノ間ニ再ヒ交戦アラソフヲ佇望シ、其ノ機會ニ乗シテ、爲ス所アラント企テリ。

第三編 波蘭分割ノ近因(其二)

第一章 露軍大舉シテ土耳其ヲ攻ム

希臘、土耳其ノ羈絆ヲ脱セント

ス

一千七百七十年 我カ明和七年庚寅露軍大舉シテ一撃ノ下ニ土耳其ヲ壓倒セントス。乃チ全軍ヲ二ツニ分チテ、一軍ハ、モルダヴヰアヨリ進ミ、他ノ一軍ハ ニコッセル、グヰア新塞爾維ヨリ進ムヲ定メ、海軍モ亦二ツニ分チテ、一ハ地中海ニ航シ、他ノ一ハ黒海ヨリダルダチルス海峡ニ侵入スルヲ決シ、斯クテ東西

露國ノ大軍土耳其ニ向フ

波蘭分割ノ近因(其二)

「ナ」露國女^{カダリ}皇^{ナニ世}ニ受ケ合ヒタルモノナリ。而シテ心ニ必勝ヲ期シタルヲ以テ、道ツカラ倫敦ニ滯留セル間モ、公然君士但丁堡砲撃ノ計策ヲ演述シテ毫モ隠蔽スルコトナク、且ツ言ヘラク、「音ニ聞エシダレバテルス峽モ、吾人ガ通行スルノ易キコトハ、此麥酒ヲ飲ムニ異ナラズ。是レ吾人ノ所爲ハ、神意ニ稱ヒ、天佑ヲ享クルヲ以テナリ」ト。七月五日、オ海峽ニ於テ、土耳其ノ艦隊ヲ撃チテ、其ノ二十五艘以上ヲ燒キ、ダレダテルス海峽ニ向テ進航ス。ペロポネチサス。セサリ。及ヒ希臘皆露艦ノ來ルヲ見テ兵ヲ起シテ之ニ應セリ。

然ルニ、露國ノ艦隊ハ、エルフヰンストンヲ疑ヒテ之ヲ恐レシカ、將々之ヲ猜忌セシカ、皆之ニ伴フコトヲ嫌ヒシカバ、彼レノ艦隊ハ寂寞トシテ獨リ海峽ノ沖中ニ止マリ、茶ヲ喫シ、喇叭ヲ吹キテ寂寥ヲ慰ムルノミコテ、他ノ艦隊ノ更テ來リ應スルナカリシカバ、エルフヰンストン失望忿恚ニ堪エズ、速カニ職ヲ辭シテ郷土ニ歸レリ。

露國艦隊猜忌ノ爲メニ銳鋒ヲ損ス

史家評シテ曰ク。當時露國艦隊若シ猜忌ヲ挾マズシテ斷然攻撃ニ着手シタランコトハ、土軍ハ忽チ一敗地ニ塗レシナラン。何トナレハ、土軍ハ其ノ豫想外ナルニ驚クベケレバナリ。傳ヘ聞ク、當時土耳其ノ首相ハ、露艦隊ガ南方ヨリ襲ヒ來ルベシトハ思考セズ。左レバ、佛公使ガ豫メ彼レニ忠告セシ時、彼レハ地圖ヲ出シテ之ニ示シ、君ヨ。彼ノ艦隊ハ決シテ彼處ヨリ此處ニ來ルベキノ理由ナキニアラズヤ。予ハ露艦隊ガ北方ヨリ來ルヲ恐ルレドモ、豈南方ヨリ來ルヲ恐ルベキノ理由アラシヤ」ト言ヒケルトゾ。此ノ一事ニ由リテモ、土耳其ガ南方ニ備ヘザリシコトヲ知ルベキナリ。

露國艦隊ハ、右ノ如ク一致ヲ欠キタルヨリ、オノヅカラ戰機ヲ誤リ、一撃ヲモ試ムルコトナクシテ、パロス島ニ冬營ヲ張レリ。左レド、希臘ノ人民ハ自由ノ念止ミ難ク、此ノ年ヲ以テ全ク戰備ヲ整頓セリ。前既ニ述ベシ如ク、露國陸軍ハ、二軍ニ分カレシガ、同年ノ六月下旬ヲ以

普王、獨逸帝ト相會スル同盟黨ノ勢頂點ニ達シ漸ク衰兆ヲ現ハス

テ、其ノ一軍ハ、新塞爾維ヨリ進テ、ニスデル河畔ノベンダーナ園ミ、他ノ一軍ハ、僅カ一萬七千人ノ少數ナルニモ拘ハラズ、モルダヴキアニ入りテ、多惱河畔ノ土軍ヲ攻撃セリ。土軍ハ、十五萬人ノ多キニモ拘ハラズ、過半散逸シタルヲ以テ敗績シ、露軍ハ九月二十六日ヲ以テ、ベンダーナ陷レ、十月ヲ以テイスメルルヲ攻略セリ。

第二章

普ノフレデリック大王、獨逸帝

シヨセフ二世ト相會スル同盟

黨ノ勢頂點ニ達シ漸ク衰兆ヲ

現ハス

フレデリック
大王、獨逸帝
ト相會ス

土軍ノ敗北ハ、同盟黨ノ爲メニ不幸ノ出來事トヨソ謂フベケレ。左レド同盟黨ノ不幸ハ、實ニ之ノミニ止マラズ、他ニ一種非常ノ凶兆ヲ現ハシ、黨員ヲシテ驚嘆措ク能ハザラシメタリ。凶兆トハ何ツ、普獨兩君主ノ

會合是レナリ。

一是レヨリ先キ、露土兩國ノ間ニ戰ヲ交ユルヤ、埃國ハ、國勢平均ノ上ヨリ

露國ノ版圖ヲ加フルトニ異議ヲ唱ヘ、又普國ハ、埃露兩國孰レノ版圖ヲ

加フルモ權衡ヲ失センコトヲ恐レテ、思慮スル所アリシガ、茲ニ至リテ、普

ノフレデリック大王ハ、一千七百六十九年我カ明和六年己丑八月二十五日ヲ以テ

獨逸帝シヨセフ二世ト會合シ、翌七十年我カ明和七年庚寅九月三日ヲ以テ再ヒ相

會セリ。此ノ第二回ノ會合ニ於テハ、土耳其ノ使節モ亦其ノ席ニ列リテ、

露土媾和ノ仲裁ヲ乞ヘリ。

是ノ時ニ當リテ、依然トシテ同盟黨ニ同情ヲ有スル邦國ハ、獨リ佛蘭西ア

ルノミ、左レバ、佛相シウーショール公(Duc de Choiseul) 西曆一七一九年(我カ享保四年己亥)生レ、同一七八

五年(我カ天明五年乙巳)死ス。ハ、一方ニ於テハ、前ノ如ク土耳其ニ軍器ヲ與ヘテ以テ一臂

ノ力ヲ貸シ、又ター一方ニ於テハ、一千七百六十八年我カ明和五年戊子末ヲ以テ、タ

ウレー(M. de Tauler)ニ命シテ、同盟黨ト會シテ、巨額ノ金錢ヲ送ラシメ、尤

獨リ佛蘭西ノミ
獨同盟黨ニ同
情ヲ有セリ

普王、獨逸帝ト相會ス。同盟黨ノ勢頂点ニ達シ漸ク衰光ヲ現ハス

モタウレハ、同盟黨ノ到底効ヲ奏スベカラザル事ヲ復命セリト云フ。
又輓近ノ戦ニモ、十人乃至十二人ノ佛國士官ヲ同盟軍中ニ加ヘ、本年又
佛相ヨリ毎月六千デユカット一デユカットハ、凡ソ我カニ四二十五錢ニ當ル。ノ補助金ヲ同盟黨ニ送リテ、
維也納駐劄領事デユイロン(M. Durand)ニ運送ノ事ヲ命ジ、デユームーレ
ー(M. Dumourier) 佛國將官ニ同盟黨ノ顧問ト爲リ、且ツ彼レ等ノ爲メニ戦争ニ
從事スルノ任ヲ托セリ是ニ於テ、デユームーレノハ、八月ヲ以テ、エペリ
ースニ着シ、同盟黨ヲシテ彼此ノ間ニ能ク一一致聯合セシメント勉メタリ。
彼レノ報告ニ據レバ、當時同盟黨ハ、シトラツツ伯ワリユースキ(Wal-
ewski, Palatine of Siemdz)ノ部下ニ屬スルモノ凡ソ千五百人、某首領
ノ部下ニ屬スルモノ一千人、ツアレムバ(Zarembski)及ヒプロロースキ
ノ部下ニ屬スルモノ四千五百人乃至五千人アリ、然レドモ時々増減アル
ヲ以テ、精算ハ立テ難シト。
ツアレムバハ、ツラン、ボイランド大波蘭ノ將官ニ選ハレ、屢々同地ニ侵入ヲ企テタルモ

ノナリ。

同盟黨 波蘭
王位欠ケタリ
ト宣言ス

同盟黨ノ議會ハ、正式ヲ以テ、波蘭王位ノ欠ケタル旨ヲ布告シ、波蘭諸官
術ヲシテ悉ク之ヲ記録セシメタリ。又同盟黨員三名ハ、ワルソーニ行キ、王
宮ニ到リ、而シテ其ノ一名ハ、亦正式ニ從テ波蘭王ニ一書ヲ呈セリ。是レ
ハ同盟黨ノ議會ヨリ王ニ宛テタル召喚狀ナリ。然ルニ王ハ之ヲ請願書ト
思考シ、受理セラレシガ、總テ之ヲ讀下セラル、間ニ、三名ハ早ヤ群集ノ
中ニ紛レテ、踪跡ヲ失ヒタリトゾ。

同盟軍、セン
ストコロニ據
ル露軍之ヲ圍

プーロロースキハ、一千七百七十年 我カ明和七年庚寅 八月下旬ヲ以テ、エペリースヲ
發シ、ワルタ河畔センストコロノ堅固ナル、一寺院ヲ占領セシガ、翌七十
一年 我カ明和八年辛卯 一月四千ノ露軍之ヲ圍メリ。是ノ時ニ當リテ、愛國者ノ方ニ
於テハ、衣服漸ク欠乏ヲ告ケ、北風肌ヲ劈クノ時節ニ際スルモ、多クハ襦
衣一枚ヲ着スルノミナリシト云ヘリ。然レドモ露軍ト戦フ毎ニ、新ニ衣
服ヲ得、遂ニ城兵悉ク露國ノ軍服ヲ服スルニ至リシコソ可笑シケレ。既

波蘭分割ノ近因(其二)

露軍敗レ去ル

同盟黨最強ノ時期

露土休戦

魯王、獨逸帝ト相會ス。同盟黨ノ勢、頂点ニ達シ、漸ク衰光ヲ現ハス。

一〇四

ニシテ寄手連戰連敗シ、死亡一千二百人ノ多キニ達シケレバ、圍ミヲ解キテ去レリ。

一千七百七十年我カ明和七年庚寅ノ冬ヨリ、翌七十一年我カ明和八年辛卯ノ初ニ掛ケテハ、同盟軍最強ノ時期ト謂フベク、アラユル利便ノ地位ヲ占メテ、彈藥糧食最モ富メリ。

一千七百七十一年ニ於ケル露土戦争ハ、毫モ同盟黨ヲ喜ハシムルコト能ハズ。同年ノ戦争ハ四月ヲ以テ開ケタレドモ、露軍ハ奮ニ依リテ勝利ヲ博シ、土軍ハ連戰連敗ノ極、頗ル疲弊ニ陥リテ、士氣振ハズ。是ニ於テ埃普兩國ヲ仲裁トシ、五月三十日ヲ以テ媾和ノ申込ヲ爲シ、其ノ談判翌年ニ涉レリ。海戦ニ於テハ、兩國共ニ何ノ得ル所モナク、只レヴァントノ貿易ヲ衰ヘシメ、基督教回教ノ諸國ニ損害ヲ與ヘタルノミ。

一千七百七十一年ノ初ニ於ケル同盟黨ハ、プーロースキガ部下ニ屬スル騎兵凡ソ五千人、匈牙利國境ナルクラコー伯爵領ニ在リ、ツアレムバ

西曆一七七一年ノ初ニ於ケル同盟黨

ノ部下ニ屬スル騎兵凡ソ四千人、ワルタノ西ナル大波蘭ニ在リ。ゼンストコイ寺院ヲ守レル歩兵凡ソ八百人アリ。其ノ他孰レノ部下ニモ屬セザルモノ枚擧ニ暇アラス。又リチユニアニ在リテ戰備ヲ整ヘタルモノ凡ソ三千人アリキ。

以上ノ諸軍ハ、皆顧問タル佛國士官ヂユームーレー前ニ在リノ嚴格ナル薰陶ノ下ニ操練ノ功ヲ積ミタルヲ以テ、昨年ニ比スルニ、其ノ數ハ大ニ減少シタルニモ拘ハラズ、其ノ力ハ遙カニ加ハレリ。然ルニ佛國首相シユワール前ニ在リニ、一千七百七十年我カ明和七年庚寅十二月ヲ以テ其ノ職ヲ罷メ、エーギヨン公(Duc d'Anguillon)代ハリテ首相ノ職ニ就キシカバ、ヂユームーレーハ、首相ヲ指揮シテ仰クノ檢束ヲ免カレテ、漸ク權威ヲ張リ、同盟黨ノ公會ヲ指揮スルノ傾向ヲ顯ハセシガ、偶々プーロースキガ露將スワロー(Suvarrow)ニ屬スル三千餘兵ノ爲メニ不意ヲ撃タレテ退去シタルヲ見、其ノ高名ノ愛國者ニシテ、人望家タルヲモ意トセズシテ、飽ク迄モ其

波蘭分割ノ近因(其二)

一〇五

普王、獨逸帝ト相會ス。同盟黨ノ勢頂点ニ達シ漸ク衰兆ヲ現ハス

ノ怯懦ヲ誹譏シツ、其ノ後久シカラズシテ、己レモ亦クラコト附近ノ
ランヅコロ又ランコロニ於テ同一ノ運命ニ出逢ヒシカバ、是レヨリ其ノ聲
價頓ニ地ニ墜チ、同盟黨中、何人モ之ヲ顧ミルモノナキニ至レリ。
デュームレーノ敗走シタルハ、六月二十二日ノ事ナリ。

鄙劣ナルデュームレーハ、己レノ失策ヲ掩ハンガ爲メニ、故サヲニ同
盟黨ヲ非難シ、彼レ等ハ保護ヲ與フベキノ價値ナシ。速ニ戰爭ヲ終リタ
ル方マシナラメト言ヘリ。兎角スル間ニ、佛相ハ、デュームレーヲ呼ビ
還ヘシ、ヅオメル男(Baron de Viomenil)ヲシテ其ノ後任ヲ襲カシメ
タリ。

キッチンノ佛國史(Kitchin's A History of France)ハ、一千七百七十一年八月、ヅオメル男、敵名ノ士
官ヲ率非テ巴里ヲ發シ、同盟黨ヲ助ケンガ爲メニ波蘭ニ向ヘリトアリ。

ヅオメル男ハ、同盟軍ニ重キヲ置カズ。其ノ書翰ニ記シテ云ク。
見渡シ候處、軍中一體ニ紀律又ハ秩序ト申スモノ無之、且ツ疲弊ノ色
ヲ顯ハシ居リ候。兵卒ニハ、給金ノ渡リタルヲ無之、殆ント裸體ノ姿ニ

テ、食物、兵器共ニ惡シク、殊ニ甚未熟ニ御座候。
同盟黨ノ軍勢ハ、騎兵六千二百人、歩兵一千八百人ニテ、ノウヰグ
ナル匈牙利境ノ地ヨリ、遙カニポーセン少許以外ナルワルタニ至ル
迄、凡ソ百四十リグノ間一線ノ地ヲ占領イタシ居リ、又此ノ同盟ノ
軍ニ對スル露軍ハ、步騎兩兵合シテ凡ソ二萬零五百人、近衛兵五千人
許、以上ノ兩地ニ陣取り居リ申候。其ノ他又リチニアニ露軍凡ソ
三千人、同盟軍モ亦三千人ホド御座候。

第三章 露軍、殘酷ヲ極ム。墺普兩軍波

蘭ニ入ル。同盟黨、波蘭王ヲ擁

セントシテ誤ル

是レヨリ先キ、ワルソト駐劄露公使ヴタルコンスキハ、本國ニ召還サレ、
サルドレン(Saldren)其ノ後任ヲ襲ギテ、ワルソトニ來リシカ、此ノ人ハ、同

波蘭分割ノ近因(其二)

露公使サルド
レン、俘虜ヲ
罪囚視ス

露軍、殘酷ヲ極ム。東普魯兩軍、波蘭ニ入ル。同盟黨、波蘭王ヲ擁セントシテ誤ル。一〇八

情心ノ最モ乏シキ人ニシテ、同盟黨ヲ「盜賊及ビ奸徒」ト稱ヘ、且ツ各司令官ニ命スラク。汝等彼ノ俘虜ヲ俘虜トシテ待遇スルヲ勿レ。須ラク罪囚トシテ之ヲ待遇セヨト。

司令官等ハ、謹テ其ノ命ヲ奉シ、戰近ノ戰爭ニ於テモ、此精神ヲ以テ俘虜ヲ待遇シタリ。佛國士官ベルコール(Belcour)ハ、其ノ現況ヲ記シテ曰ク。

露軍ハ、到ル處掠奪ヲ恣ニシ、最モ殘忍ナル、最モ酸鼻スベキ處置ヲ行ヘリ。予ハ現ニ彼レ等ガ劫掠物ヲ車五百輛ニ積ミテ本國ニ運ヒ去レルヲ目撃シタリ

ト。露國陸軍大佐ヅレウヰッツ(Drewitz)ノ如キハ、惡行者中ノ尤トモ稱スベキモノニシテ、彼レガ同盟黨ヲ虐待シ、其ノ苦痛ノ態ヲ視テ愉快トスルヲハ、夫ノ有名ナル印度ノ暴君スラジャ、ダウラ(Suraja Dowra)又ハ支那ノ夏桀殷紂モ三合ヲ避クベキナリ。ベルコール又其ノ實驗スル所ヲ記シテ曰ク。

ヅレウヰッツ大佐ハ、俘虜ノ手ヲ斷テ、足ヲ截リ、若クハ其ノ他ノ部分ヲ削ギテ、強テ其ノ口中ニ投シ、又其ノ容貌ノ己レガ氣ニ合ハザル者ハ、之ヲ寸斷セシメ、始終其ノ苦痛ノ狀ヲ目撃シテ以テ無上ノ快樂ト爲セリ。豈人面ノ鬼ト謂ハザルベケンヤ。

「人面ノ鬼」ト云ヘル綽名ハ、獨リヅレウヰッツ大佐ノミノ專有スベキニアラズ。凡テ露國將校ハ、ミナ同一様ノ人々ナリキ。而シテ司令長官ウエイマオン(Weymann)ノミハ、此ノ例外ノ人物ニシテ、慈悲ノ何者タルヲ知リタリシガ、暴惡ナルサルドレン公使ハ、却テ之ヲ喜ハズ。竊カニ其ノ職ヲ剝ガント企テタリキ。

「波蘭王ノ驕臣等モ亦寵遇ヲ買ハントノ鄙劣心ヨリ、愛國者ニ惡名ヲ附シテ誹謗ヲ極メタリ。左レバ其ノ一人ナルソリグナツク(Solignac)ハ記シテ曰ク。波蘭王國ハ、スウニスラス、アウガスタス王ニ對スル讒書ヲ以テ充滿セリ。此ノ讒書ノ作者、即チ明君ヲ讒謗スル人ハ誰ナリヤ。言フ迄モ

波蘭ノ驕臣、
婦ヲ獻ス

露軍、殘酷ヲ極ムルニ至リ、埃國兩軍、波蘭ニ入ルル同盟黨、波蘭土ヲ擁セントシテ謀ル一〇

ナク彼ノ賊徒、群ニ言ヘハ、血ニ汚レ、國家ノ敵ト同盟セル賊徒ナリト。賊徒ハ、同盟黨々宛モ亦甚シカラズヤ。吾人若シ同盟黨ヲランニハ、左ノ如ク答フルヲ以テ、至當トスベシ。曰ク「咄、汝等ハ、我カ邦ヲシテ壓制者ノ羈絆ヲ脱セシメント勉ムル有志者ニ叛徒ナル汚名ヲ蒙ラシメントスルガ、身ヲ殺シテ國法ト自由トヲ保護スル人々ニ公安妨碍ノ罪ヲ負ハセントスルカ。波蘭人中ニ於テ、最モ智識ニ富ミ、最モ尊敬セラルベキノ價値アル君子ヨリ成リ立ナタル團體ヲ一揆暴徒トシテ待遇セント欲スルカト。」(フレツナヤ一著、波蘭史)

埃國兩國ノ界

ウ井オメコル前ニ在リ。佛一千七百七十一年、我カ明和八年辛卯ノ末ニ、其ノ『雜錄』ノ中ニ記シテ曰ク「同盟黨ハ、既ニ萬事ニ就テ望ヲ失ヒ、只露土未ダ干戈ヲ戢メザルノ一事ノミ其ノ望ヲ屬スル所ナリト。ソモ同盟黨ハ、是レヨリ先キ、獨逸帝シヨセフ二世ガ其ノ本營ヲ訪問セシヨリ、竊カニ望ヲ同國ニ屬シタリシガ、豈圖ランヤ、其ノ望ハ全ク水泡ニ歸シ、西曆一千七百七十年、我

明和七年庚寅ニ於テ、既ニ埃軍ノ爲メニ本國ヲ侵サレ、チツプスヲ零セラレントハ。

チツプスハ、カーバシアン山間ノ一小州ニシテ、十六箇ノ小都會ヨリ成レリ。元ト匈牙利ノ版圖ニ屬セシガ、四曆一千三百八十七年、我カ元中四年丁卯、即波蘭ニ抵當ト爲リシヨリ、遂ニ同國ノ有ニ歸セリ。猶委シクハ次チ足利三代義隆ノ時、

左レバ、波蘭王スタニスラス、アウガスタスモ亦其ノ不法ヲ憤リ、書ヲ送リテ之ヲ詰問セシニ、埃國女皇マリア、テレサ(Maria Theresa) 四曆一七七年(我カ享保二年丁酉)生レ、同一七七八年(我カ安永九年庚子)崩ス。翌七十一年一月ヲ以テ甚ニ不満足ナル答辨ヲ與ヘシノミカ、其ノ軍ヲ波蘭ヨリ退ケズシテ、却テ益々進入セシメリ。埃國既ニ斯ノ如クナレバ、普ノフレデリック大王モ亦他國ノ爲メニ我カ意中ノ國ニ先鞭ヲ着ケラル、チ嫌疑シ、西北ノ方シレシアヨリ侵入シテ、遠クポーセン及ビトルンニ進ミ、四千ノ騎兵ハ、馬匹購買ヲ辭柄トシテ、ニステル河ニ到リ、河畔ニ陣營ヲ構ヘリ。是レ則チ西曆一千七百七十一年末ノ狀況ナリ。

波蘭分割ノ近因(其二)

同盟黨、波蘭
王ヲ擁セント

露軍、殘酷ヲ極ムニ墮普爾軍、波蘭ニ入ルリ同盟黨、波蘭王ヲ擁セントシテ誤ルニ

是ノ時ニ當リテ同盟黨ノ一人ナル「スツロロインスキ」(Strawinski)ハ、波蘭
王ヲ擁シテ事ヲ爲サント欲シ、此ノ事ヲ「スツロロインスキ」ニ謀レリ。プーロ
「ススキ」ハ、之ヲ認可スルヲ否ムト雖モ、心竊カニ望ム所アルガ如ク、敢テ
之ニ異議ヲ唱フルヲ爲サズ。言ヘラク「足下若シ龍體ニ恙ナキヲ保証
スルナラバ、予ハ勿論此ノ計畫ニ賛成スベシト」。スツロロインスキハ、此
ノ一言ニ力ヲ得、且ツ答フラク「噫々貴下ニモ似合ハヌ仰テ承ハルモノ
カナ、予若シ陛下ヲ害セント思フナラバ、害スベキノ機會ハ二十回モア
リキ然ルチ今日ニ至ルモノハ、害セザラント思ヘバナリ。抑モ予ガ陛下
ヲ執ヘント望ム所以ハ、彼レヲ我カ黨ノ手ニ擁シテ以テ利スル所アラ
ンコト庶幾ヘバナリト」

左レバ、プーロロインスキハ默許ノ名義ノ下ニ、竊カニ之ヲ獎勵シ、十一月三
日ヲ以テ、實行ノ期ト定メ、且ツ謀ヲ設ケテ露軍ヲ誘引シ、僅々二百ノ露
軍ヲシテ、ソルソ一府ニ駐在スベカラシメタリ。スツロロインスキ先ツ

スツロロイ
ンスキ波蘭王ヲ
擁

王ガ其ノ夕刻ヲ以テ、叔父ノ家ヨリ還御セラレベキ通路ヲ確カメタレ
バ、豫メ其ノ通路ニ到リテ待テ受ケ、ルニ、九時三十分トモ覺ボシキ頃
王ハ兩名ノ者ヲ陪乗トシテ馬車ニ駕セラレ、侍從、馬丁各々兩名ヲ隨ヘ
テ叔父ノ家ヨリ出テ來ラレ、近衛兵、從僕各々兩名モ亦歩シテ之ニ供奉
セリ。スツロロインスキハ、豫メ同志ヲ三隊ニ部署シテ、甲ハ前衛タル近
衛兵ニ當ルベカラシメ、乙ハ龍體ヲ擁シ奉ルベク、丙ハ、府外ナルピラ
コソ森ノ入口ニ埋伏スベカラシメタリ。既ニシテ甲隊ハ、兩名ノ近衛兵
ニ向ヒテ容易ク之ヲ殺シ、乙隊ハ龍體ヲ目指シテ進ミケルニ、供奉ノ人
々驚キテ之ニ抵抗シタレドモ、事ノ意表ニ出テタルヲ以テ、充分ニ防禦
ノ術ヲ盡シ難ク、殊ニ愛國者ハ必死ヲ究メテ爲セタル事ナレバ、數分ノ
間ニ首尾能ク王ヲ馬車ヨリ引き出シテ、馬上ニ乗セ、愛國者皆一同ニ馬
ニ乘リテ豫定ノ場處ヘト急ゲリ。

途ニシテ復ビ

波蘭分劃ノ近因(其二)

王ヲ取り回へ
サル

獨軍、邊境ヲ極ムル邊境兩軍、波蘭ニ入ルル同盟黨、波蘭王ヲ擁セントシテ誤ル一二四

テ、他ニ行クベキノ道ナシ。跳ビ越エントシケルコ、御乗ノ馬誤リテ脚ヲ傷ケ進ムヲ能ハズ。倉皇ノ際、乙隊ハ甲隊ヲ見失ヘリ。彼地此地ト搜索スレドモ、暗夜咫尺ヲ辨セザルヲ以テ、如何トモ爲シ難ク、偶々沼澤ニ陥リテ、彼此亦互ニ相失ヒ、波蘭王ハ、只一人ノ愛國者ト共ニ跡ニ遺サレタリ。此ノ愛國者ハ、コシンスキ(Kosinski)ト呼ベル者ニテ、豫テ同盟黨中、大膽ノ聞ユ高ク、スツロインスキヨリ特ニ波蘭王捕獲護送ノ兩任ヲ託セラレタリシガ、陛下ノ威光ニヤ怖ヂケン、頗ル畏縮シテ復タ平日ノ勇壯ニ似ズ。ミヅカラ俘虜ト稱シテ、只管ニ平身低頭スルノミ。王ハ彼レヲ近傍ナル磨舎ニ伴ヒ、宸翰ヲワルソノ府ニ送リテ四十名ノ近衛兵ヲ召サレシカル、近衛兵ハ、天未ダ明ケザルニ、馳セ來リテ王ヲ護衛シ、徒黨ハ悉クコサツク兵ノ逐フ所トリテ、其ノ一名ハ生命ヲ失ヒタリ。左レド、コシンスキハ、懦夫タリ、裏切人タリシガ爲メニ、却テ生命ヲ全フシ、王ノ生命ヲ助ケ奉リタル人トシテ厚ク恩賞ヲ賜ハリタリ。

豫テ同盟黨ニ反對スル人々ハ、此ノ報ヲ聞キテ、益々彼レ等ヲ侮ツケント欲シ、彼レ等ハ、全ク賦逆ノ罪ヲ送ゲンガ爲メニ、此ノ擧ヲ行ヒタルモノナリト言ヒ觸ラセリ。

第四章 露、奧、普ノ三國同盟ヲ結フ——同盟黨解散ス

是時、波蘭王、暗殺ヲ免カレタリトノ風評忽チ四方ニ傳播シ、王モ亦彼レ等ガ殺意ナキノ確証ヲ實驗セラレタルニモ拘ハラズ、暗殺ヲ免カレタリト信セリ。左レド、剛氣ヲ裝フテ言ヘラシク、朕ハ同盟黨ノ誘フガ儘ニ任カセズ、ゼンストコノ城ニ行カザリシヲ悔ユ。何トナレバ、朕若シ之ニ行キタランニハ、不平ノ徒ヲ諭シテ其ノ志ヲ改メシムベク、而シテ此ノ一事コソ、朕ガ治世ニ最モ榮光ヲ加フベクレバナリト。外國ノ朝廷モ亦交々王ガ暗殺ノ禍ヲ免カレタルヲ祝シ、斯クテ弒逆ノ風評ヲ一般ニ傳播スベカラシメタリ。蓋シ心アリテノ事ナラン。

波蘭王暗殺ヲ免カレタリトノ風評

同盟黨ノ勢力衰フ

既ニシテ徒黨ノ二人ハ捕ヘラレテ死刑ニ處セラレ、其ノ他此ノ徒黨ト認定セラレテ、未タ縛ニ就カザル者モ亦死刑ノ宣告ヲ蒙ムレリ。但シプロロリスキモ其ノ中ノ一人ナリキ。

此ノ惡評ヨリ、愛國者ノ勢力頓ニ衰ヘ、叛徒、弒逆人、賊徒等ノ惡名荐リコ彼レ等ニ加ハリテ、殆ソド彼レ等ヲ願ミル者ナシ、遂ニ翌七十二年我が安永元年辰ニ於ケル波蘭ノ不幸ヲ促ガスニ至レリ。蓋シ虎狼ト狐鼠トノ造意ニ出ツル所ナルベシ。勿論ウヰオメニル前ニ在リ。佛國ト其ノ部下少數ノ人々トハ、同盟黨ニ向テ、飽ク迄モ死戰セシコトヲ勸メ、プロロリスキ。コツサコリスキ (Kosakowski) ツアレムバハ、僅々六千ノ兵ヲ以テ、ゼンストコロヨリ、大波蘭ウヰダワニ一線ヲ造リ、有名ナル佛國士官シヤイシイ (Choisij) ハ、二月一日ノ夜ヲ以テ、シラコロ城ヲ拔キテ、ミツカラ之ヲ守レリ。左レド斯ル盡力モ凡テ挽回ノ功ヲ奏スル能ハザリシコソ遺憾ナレ。

同盟黨公會ハ、三月十八日、大波蘭駐在ノ兵ニ向テ命令ヲ發シ、聯合シテ

ツアレムバ衰

切ヲ爲ス

在ヒロトルコロ露國分隊ヲ擊ツトス。然ルコツアレムバ命令ニ應ゼズ。兎角スル間ニ、普軍益々大波蘭ニ進入シテ遠クワルタニ到リ、同盟黨ニ向テ、其ノ數箇處ノ陣營ヲ明渡スヘキ旨ヲ照會シタリシカバ、同地ノ諸軍ハ殆ソド全ク瓦解シタリ。當時普將ツエルナツツ (General Czeltitz) ヨリ同盟軍ノ將校ニ宛テタル書翰ハ左ノ如シ。

拜啓。去ル十六日ハ、花墨ヲ賜ハリ、難有奉深謝候。然者其折御訊問ニ相成候、スヅリ、コブリン等附近ノ食物奪取ノ儀ハ、我ヲ國王陛下ノ命令ニ由リテ致シタル次第ニ御座候間、何卒不惡御領承被成下度候。將々又我カ遠クワルタノ地ヘ進軍ノ議ヲ決シ、且ツ同時ニ、フロロエンスダット、ラウヰツツ等ノ諸市、及ヒ其ノ周圍ノ地ヨリ軍隊立退方ノ儀ヲ同盟黨ノ紳士諸君ヘ御掛合申候様、小生ヘ命令ニ御座候。陛下ハ、實ニ此ノ儀ヲツアレムバ將軍ヘ御掛合申候様、小生ヘ命令ニ御座候。依テ相成ルベシハ、一日モ早ク御立退キ被下、後日ノ紛紜無之様ニ御取

波蘭分割ノ近因(其二)

露、普ノ三國同盟ヲ結ブニ同盟黨解散ス

計有之度、此段御照會申上候。

一千七百七十二年 我カ安永元年壬辰 三月二十二日

ヘムスタットニテ ツエルチツツ印

シトラツチノスキ君

侍史

ツアレムバガ今回ノ舉動ヨソ、最モ疑ハシト云ハザルベカラス。否、其ノ反迹ハ、諸種ノ事ニ於テ顯然タリシナリ。ウヰオメニルハ記シテ曰ク、ツアレムバノ行爲ハ、實ニ憎ミテモ餘リアル事ト謂フベシ。彼レノ心事ヲ察スルニ、(第一)己レガ一身ノ無事ヲ謀ルガ爲メカ、否ラザレバ、(第二)己レガ部下ノ諸軍ヲ各自ニ普軍ヘ編入セラレンガ爲メニ、此ノ舉ニ出テシモノナランカ、畢竟孰レノ場合ニ於テモ、同盟黨ハ全ク瓦解セザルヲ得サルナリ。當時大波蘭ヨリ到着セシピウヰスキ君 (M. Pivnicki) ハ、予ニ告グラシク、普軍ハ本月(四月)二日、及び三日ノ兩日ヲ以

ツアレムバ露ニ降ル

テ、フロイエンスダット、レツノ、スヅリノ三小都會ヲ占領セルツアレムバノ軍ヲ攻撃シタリ。コレツ普軍ガ一時ニ攻メ來ルベキ前兆ナレバ、日ナラズシテ、其ノ右翼ハ、シラコーニ、又其ノ左翼ハ、ダマナヒニ現ハルベシト云々。

埃軍波蘭ニ入ル
クワコー陥リ
同盟黨解散ス

爾來僅カニ數日ヲ經テ、ツアレムバハ、同盟黨ノ公會ニ向テ辭表ヲ呈シ、而シテ露公使サルドレンニ向テ大赦ヲ乞ヘリ。殆ント同時ニ、同盟黨ハ維也納駐在ノ我カ代表者シヤブローノスキ公 (Prince Jablonowski) ヲリノ書翰ニ接シ、埃露普ノ三國既ニ同盟ヲ結ビテ、波蘭版圖内ノ某々地攻略ヲ決セリトノ報ヲ得タリシガ、果シテ四月二十二日、埃將エステルハツナー伯 (Count Esterhazy) 一萬ノ軍ヲ率ヰテ、匈牙利ヨリ波蘭ニ侵入シ、ツラコー城ニ迫リシカバ、同城遂ニ陥リテ、同所ニ在ル同盟黨ノ公會ハ解散セザルヲ得ザルニ至レリ。而シテ此ノ公會ノ解散ト共ニ、同盟ノ諸陣ニ在ル兵ミナ潰ヘテ、同盟全ク瓦解シタルコソ口惜シケレ。

波蘭分割ノ近因(其二)

是ニ於テ同盟黨ノ領袖等ハ、凡テ外國ニ逃ル、トニ決シ、プーロースキ
ハ、米國ニ去レリ。其ノ後、サヴアナ近傍ニ於テ、自由ノ爲メニ仆レタリト
云フ。又其ノ他數名ノ愛國者ハ、^{バウアリア}巴威里ノプローノニ集マリテ、外軍襲
來ヲ非トスルノ意見書ヲ草シ、之ヲ歐洲各國ノ朝廷ニ送レリ。左レド毫
モ省ミラレザリキ。

ハ、同盟黨ノ運命ハ此ノ如シ、吾人ハ波蘭史ヲ讀ミテ茲ニ至ル毎ニ、未
タ嘗テ其衷情ヲ嘉ミシ、其薄命ヲ憐マズンバアラザルナリ。世ノ阿諛奸
曲ノ人、輒モスレバ、此流ノ愛國者ヲ目スルニ頑陋不法ノ徒ヲ以テシ、叛
賊人ノ汚名ヲ蒙ラシメントスルコトナシトセズ。豈誤レルノ甚キモノ
ニアラズヤ。ソモ彼レ等ガ兵ヲ擧ゲタル所以ノ理由ハ、(第一)俄リニ國會
議員ヲ捕ヘ、國會ヲ中止シテ、其ノ自由ヲ奪ヒタル事、(第二)外人跋扈跳梁
ヲ極メテ、波蘭ヲシテ獨立ノ實ナカラシメタル事、(第三)國民中ノ重モナ
ル人々ヲ捕ヘタル事等ノ數項ニ在リ。而シテ、チニアニアノ近衛將軍オ

同盟黨ニ對ス
ル結論

ジンスキ伯(Count Oginski)ハ、一千七百七十一年^{我カ明和八年辛卯}九月十二日ノ檄
文ニ於テ述ブラシ、波蘭ニ於ケル最モ舊キ權利ノ一ツハ、外敵ノ襲來ス
ル毎ニ、各將軍ガ自國ノ軍ヲ集ムル等ニ在リト。同盟黨ハ實ニ此ノ權利
ヲ行ヒタルモノナリ。而シテ百計蹉跌、國土ノ分割之ニ從フ。彼等ノ爲メ
ニ悲マサラント欲スルモ、其レ得ンヤ。

第四編 波蘭第一回分割

第一章 波蘭分割策ノ起原——普奧露三

國互ニ氣脉ヲ通ス

夫レ隣國互ニ相猜忌スルヲ見テ、決シテ我レヲ襲ヒ、我レヲ壓スルノ悞
ナシト思フコト勿レトハ、識者ガ波蘭ノ爲メニ常ニ痛論スル所ナリキ。彼
ノ國勢平均ト云ヘル説ハ、必ラズシモ人ノ國ヲ蠶食スルヲ禁スルコト

波蘭分割ノ時
節來レリ

ラズ之ヲ平等ニ分割スルハ固ヨリ其ノ許ス所ナリト云フイナ忘ル、
ト勿レトハ、愛國ノ士ノ常ニ波蘭ヲ戒ムル所ナリキ、而シテ今ヤ此ノ豫
言適中ノ時期來レリ。

波蘭累代ノ諸王中、賢明ノ聞ニアリタルスタニスラス、レスクジンス
キハ、曾テ此ノ惡運ノ將來必ラズ來ルベキヲ前知シ、最モ明瞭ニ、且ツ
最モ痛切ニ、波蘭人民ニ忠告シテ曰ク。

噫々危キカナ、危キカナ、吾人ハ何ノ力アリテ隣國ノ襲來ヲ禦グベ
キヤ、ソモ吾人ハ耻ツベキ平和他國ノ爲メニ左右セラレ
ルカ故ニ斯ク言フナリニ安ソワテ、常ニ熟
睡シツ、アルト雖モ、一朝有事ノ日ニ臨マバ、如何シテ我カ國ヲ衛
ラント欲スルヤ、或ハ條約ヲ輕信シテ國家安穩ナリト思フカ、論ヨ
リ証據ハ、最モ嚴格ナル條約ト雖モ、屢々破棄セラル、ニアラズヤ。
將々隣國互ニ相妬ムガ故ニ、我カ國ハ安泰ナリト想像スルカ、咄嗟
ムベキ妄想ヨ、笑フベキ失神ヨ、匈牙利ハ曾テ此ノ空想ノ爲メニ欺

波蘭王スタニスラス、レスクジンスキノ名

カレテ自由ヲ失ヒタルニアラズヤ、吾人若シ之ニ鑑ミルコトナクン
バ、早晚必ラズ同一ノ運命ニ出逢フコトアラソ、我カ忠愛ナル同胞ヨ
恐ルベキ虎狼ハ前後ニ爪牙ヲ磨キツ、アルコトヲ記臆セヨ、戦々澁
々トシテ兵備ヲ擴張セヨ、否ラザレバ、或ハ有名ナル勝利者ノ爲メ
ニ餌トセラル、カ又ハ隣邦相約シテ我カ邦土ヲ分割スルコトアラ
ソ、(Euvres Choisis de Stanislas)

ト、然ルニ馬耳東風然タル波蘭ノ人民ハ、此ノ名言ヲ聞クモ、毫モ心ニ
銘スルコトナク、空々寂々トシテ一日ノ安ヲ偷ミシガ故ニ、愛來リ、禍起
リテ、始メテ周章狼狽スルモ、寸効ナカリキ。

予既ニ前敷編ニ於テ、波蘭ガ漸ク衰頹シテ、遂ニ全ク隣國ノ爲メニ囊中
ノ鼠トセラル、ニ至リタル顛末ヲ叙述シタレハ、本編ニ於テハ、更ニ一
歩ヲ進メテ、如何シテ普塊露ノ三國ガ一時ニ舊來ノ行キ懸リテ棄テ、同
心協力シテ波蘭分割ノ事ニ力ヲ用シシカノ顛末ヲ叙述セン。

普塊露ノ三國如何シテ一
致セシヤ

初メ露土戦争ノ起ルニ當リテ、埃國ハ、普魯兩國ノ敵タリ。而シテフレデ
 リツクハ、曩キニ露國ト同盟ヲ結ビタルニモ拘ハラズ。普魯兩國ハ、西曆一七六
 三年（我カ寶曆十三年癸未）ヒウベルツアルケノ講和ノ後、條約ヲ結ベリ。而シテ其ノ條約ハ、八年間有効ノモノトセリ。又竊カニ土廷ヲ助ケタレバ、彼ノ三國同
 盟ノ如キハ、所詮行ハルベクモアラザリキ。然ルニ事豫想ノ外ニ出テ、三
 國ハ管ニ一時ノ連衡ヲ爲シタルノミカ、凡ソ二十五年ノ其ノ間、恰カモ
 異軀同心ト爲リテ波蘭ノ肉ヲ肝ニシタル有様ハ、譬ヘハ虎狼相競フテ
 羊豚ノ肉ヲ啖フコ鬻鬻タリ。

埃國女皇マ
 ア、テレサノ
 動靜

讀者ノ知ラル、如ク、當時埃國ニ君臨セルハ、マリヤ、テレサ女皇第百十一
 頁參看
 ナルガ、女皇ハ春秋既ニ高クシテ、永ク餘喘ヲ保ツベクモアラズ。女皇ハ、三
 國同盟ヲ結
 ビタル年、即チ西曆一七七二年（我カ安永元年壬辰）ニ於テ五十六歳ナレドモ、兵馬控徳ノ間ニ處シ
 テ十六子ヲ學ケタルヲ以テ、心身オノンカラ枯槁シ、殊ニ肺患ニ罹リタルヲ以テ、頗ル衰弱セリ。殊ニ即位
 以來三十餘年ノ其ノ間、彼ノ有名ナル七年戦ヲ始トシテ、數度ノ戦争ニ
 フレデリック大王等ノ攻
 撃ヲ防キタル戦多シ。心身頗ル疲勞シ、國力亦衰弱シタレバ、平和ノ餘命ヲ送
 ラント欲シ、室内ニハ、亡夫皇獨逸帝フワ
 シニス一世ガ臨終ノ肖像ト、死人ノ首數箇ト、

シヨセフ二世
 ノ戦争熱

掲ゲテ専ラ信心ヲ旨トシ、餘念ナキガ如ク、殊ニ女皇ガフレデリック大
 王ヲ憎ムトハ、蛇蝎モ管ナラズ。女皇、フレデリックヲ目シテ「敵人」ト爲シタ
 リ。生ガ著ハス所ノ「普魯戰史」ヲ參看スベシ。又カタリナ
 大女皇ニ對シテハ、憎惡ト輕蔑トノ二念ヲ懷ケルガ故コ、女皇ハ、カタリナチ、
 「女皇」トハ言ハズ。
「戰婦」ト云ヒテ之ヲ呼カシメタリト云フ。是レ其ノ素性ノ戦シキニ由リテナリ。苟クモ埃國女皇ノ消息ヲ耳ニセル者ハ、三
 國同盟ノ行ハレントハ、思ヒモ寄ラザリシナルベシ。只多年首相ノ職ニ
 在リテ國政ヲ主レルヨリニツツ（Kanitz）西曆一七一一年（我カ正徳元年辛卯）生レ、ガ
 戦乱ノ餘弊ヲ補フニ汲々トシ、フレデリックニ對スル抵敵ノ念ノ逐
 日減衰スルアルノミ。
 女皇ノ子ニシテ、其ニ萬機ヲ主宰セルシヨセフ二世西曆一七六五年（我カ明和二年
 乙酉）ヨリ獨逸帝タリ
 ハ、平和政略ヲ喜バズシテ、頻リニ戦争ヲ熱望セリ。然レモ女皇ノ爲メニ
 制セラレテ志ヲ達スルヲ能ハズ。是ニ於テ女皇ニ向テ、屢々其ノ不可ヲ
 諭シ、他國ニ勝チテ財政ヲ改良スベキヲ勸メ、三十萬ノ兵ヲ指揮スルヲ
 ナ得テ、ライシト將軍（Field-marshal Lasey）ニ命シテ之ヲ整理セシメタリ。

ジョセフ、始メテアレデアスツク大王ニ會

ジョセフ普王ノ人物ニ服ス

左レド、其ノ心裏ノ戰爭熱ハ益々烈シキヲ加ヘシカバ、一千七百六十八年我カ明和五年戊子各處ノ戰場露土戰爭ノ戰場ナリヲ巡覽シ、我カ部下ノ諸將ヲ就テ勝敗ノ原因ヲ研究シタルノ後、普領シレシアニ至リテ、普軍大演習ノ實況ヲ目撃セシニ、普王アレデアスツクハ、毎年此ノ地ニ於テ大演習ヲ行ヒタルナリ。普王ハ、ジョセフ來レリト聞キ、懇ニ書信ヲ通シ、面會ヲ請ヘリ。ジョセフ以爲ラシク、フレデリックハ、帝室舊來ノ警敵ナレバ、豫メ母皇ニ謀ラズシテハ、其ノ請ヒニ應シ難シト。依リテ諾否ノ返答ヲ翌年ニ延バシ、一千七百六十九年我カ明和六年己丑八月二十五日ニ至リテ、シレシアノ一府ナイツスニ於テ、兩君主始メテ面謁シケル。

是ノ時ニ當リテ、露土戰爭ハ、歐洲各國ノ最モ刮目スル所タリシヲ以テ、亦普埃兩君主ノ重モナル談柄タリシナラン。然レドモ、此ノ對面ニ於テハ、別ニ重大ナル問題ヲ議セザリキ。フレデリックハ、慇懃ノ有ラン限リヲ盡シテ、少帝ヲ優待シタリシカバ、時ニジョセフ帝二十九歳、フレデアスツク大王ハ、五十八歳ナリ。少帝心ニ斯ル英雄ノ爲メニ尊崇セラレタルヲ榮トシ、頗ル満足ノ色ヲ顯ハセリ。フレ

デリックハ、猶モ巧言ヲ弄シ、屢々少帝ヲ以テ、ナヤールス五世(Charles V)西曆一五〇〇年我カ明和九年庚申、即チ足利十一代將軍義澄ノ時生レ、同一五〇〇年、我カ永祿元年戊午、即チ桶狭間合戦ノ二年前、崩ス。獨逸有名ノ帝ナリ。ヨリモ優レリト述ベシカバ、經驗ニ乏シキジョセフ帝何ゾ喜バザラン。深クフレデリックノ人物ニ感シテ、歸國ノ後モ熱心ニ之ヲ頌讚セリ。

史家マコーレー。カーライル。フ曰ク。フレデアスツクハ、苟クも痛ビテ益スル所アルトキニ、痛ブルヲテ痛モ厭ハザル人ナリト。

普埃ノ間日ニ親密ヲ加フ

兩君主再ヒ相會ス

マリヤ、テレサハ既ニ老テ、恰カモ夕陽ノ如シ。是ヲ以テ埃國內閣ノ眼ハ漸ク旭日セフノ方ニ注ギ、コーニツツノ如キハ、普國ト交誼ヲ厚クスルノ得策ナルヲ悟リシカバ、兩朝ノ間ハ日ヲ逐フテ親密ニ赴キ、互相ノ音信漸ク頻繁ナリ。是ニ於テ一千七百七十年我カ明和七年庚寅九月三日、兩君主再ヒモラヴネア州ノユスタットニ會シ、コーニツツ亦其ノ席ニ陪セリ。普王ノ慇懃ハ前回ニ倍シ、埃國ノ軍服ヲ着シテ會合ノ席ニ現ハレ、而シテ埃領ニ留マル間、常ニ之ヲ着セリ。一日晚餐ノ席ヨリ退カントスルニ際シ、帝

セフハ、王ヲフレデニ歩ヲ讓ラントセシコ、王ハ帝ノ後ニ退キテ敢テ當ラズ。傲
 笑シツ、言ヘラク。陛下若シ親征セラル、ノ場合モアラハ、朕ハ驥尾ニ
 附キテ寸功ヲ奏セント。埃相コニコツツハ、傲然トノ敢テ普王ニ屈セズ。
 「王ハ予ニ至當ノ禮ヲ盡サル唯一ノ人ナリ」ト云ヒケレバ、王其ノ惡感
 ナ消サシメント欲シテ、亦彼レニ慰勸ヲ盡セリ。コニコツツハ、露國ノ野
 心ニ抵抗スルコトノ必要ヲ論シ、「我カ女皇陛下ハ、カタリナガ、モルダヴ
 ア、及ヒワラシアヲ攻略シテ、境ヲ埃國ニ接スルヲ決シテ許ササルベク、
 猶露軍ガ更ニ一層土耳其ノ地ニ進入スルヲ許ササルベシ」ト述べ、且ツ
 「普埃兩國ガ同盟ヲ結ブハ、單ニカタリナノ權力ヲ制シテ、増大セザラシ
 メンガ爲メナリ」トノ一言ヲ加ヘケレバ、フレデリックハ答ヘテ言ヘラ
 シ。我カ普國ハ現ニ露ト同盟國タルガ故ニ、朕ハ只平和ノ一手段トシテ、
 カタリナコ、埃國ニ對シテ友情ヲ懷カシムルノ一事ヲ能クスルノミ」ト。
 其ノ翌日、急使土軍敗走、土艦破滅ノ報ヲ齎ラシ。維也納、伯林ノ兩朝廷ニ

普王、獨逸帝ヲ讚美
 ソテ其ノ心ヲ
 容フ

普王、獨逸帝
 兩國ノ調停ニ力
 ナス

仲裁ヲ乞ヒシカバ、兩朝廷ハ速ニ之ヲ承諾セリ。左レト別ニ何ノ條件ヲ
 モ約セザリキ。

フレデリックハ、舊ニ依リテ、獨逸帝ヲ籠絡セント欲シ、帝ヲ稱シテ「朕ガ
 アラユル計畫ノ友」ト言ヘリ。斯ル諛言ハ若キ王公ノ心ヲ最モ奪フベキ
 モノナリ。伯林ニ歸レル後モ猶百事埃地利風ニ倣フト稱シ、ソヨセウガ
 對面ノ際ニ、タツソ(Tasso) 西曆一五四一年、我カ天文十年辛丑、即チ東照公出生ノ前年、生レ、同一
五九五年、我カ文祿四年乙未、即チ秀次自殺ノ年、死ス。伊太利有名ノ詩
人ナリ。句ヲ諳誦シ、パスター、フアイド(Pastor Fido) タツソノ作ノ戯曲ノ凡ソ半齣許ヲ諳
 誦シタルヲ頻リニ讚美シテ才子ト稱セリ。是レ亦思フ所アリテノ事ト

知ルベシ。

斯クテ、フレデリックハ、埃國ト水魚ノ交ヲ爲シ、而シテ維也納、聖彼得堡
 兩廷ノ間ヲ調停セントス。然レドモ兩廷共ニ其ノ君主ハ女性ナルガ故
 ニ、オノヅカラ感情ノ左右スル所ト爲リテ彼此相憎ミ、マリア、アレサハ
 カタリナチ「賤女子」ト稱シテ之ヲ蔑視スレバ、カタリナガ、マリア、アレサ

ヲ嫌忌スルコトモ亦決シテ之ニ讓ラズ。普埃兩國相共ニ辭ヲ卑フシテ、露土ノ間ヲ調停スルニ當リテモ、猶カダリナハ、埃國ノ我カ意ニ稱ハザルヨリ、併セテ普王ヲモ卻ケントシ、其ノ干涉ヲ拒絕シ、手ヲ引カンコトヲ望メリ。

然レドモ、フレデリックハ、猶種々ニ魂膽ヲ碎キテ、兩廷間ノ媒介ト爲リシレバ、兩廷遂ニ緩和シテ互ニ交誼ヲ通シケル。是ニ於テ更ニ第二段ニ移リ、三國孰レカ波蘭分割ノ發議者ヲラザルベカラズ。然レドモ此ノ事タル至難中ノ至難ト謂フベシ、何トナレバ、孰レノ國モ其ノ主謀者タルノ惡名ヲ避ケント欲スレバナリ。左レバ、只以心傳心、無言ノ間ニ夫レト推シ、如何ハセント心ヲ勞スルノミ。

第一章 三國ノ政略并ニ同盟

三國孰レカ波蘭分割ノ發議者ダリシヤ。或ハ曰ク、露國コソ其ノ發議者

三國遂ニ交誼ヲ通ス

波蘭分割ノ發

議者ハ誰カ

タリシナルベシト。然レドモ、カダリナ女皇ハ、既ニ久シク波蘭ノ實權ヲ掌握シ、波蘭王ハ、其ノ實、只借住者タルニ止マリタルカ故ニ、露ガ波蘭全國ヲ併呑スルハ敢テ難キコアラズ。何ヲ苦ンデ、埃普ニ分割ヲ謀ルベケンヤ。然ラバ埃カ普カ否々、埃モ普モ明カニ之ヲ發議セシコハアラザルベシ。只一千七百七十年我カ明和七年庚寅以來、更ニ一層明白ニ之ヲ其ノ舉動ニ顯ハセシナラン。

普國ノ政界

然ラバ普國ハ、如何ニ之ヲ舉動ニ顯ハセシヤ。フレデリック大王ハ、翌年西曆一七七年ヲ以テ、暗ニ波蘭ノ版圖ニ向テ、我カ權利ヲ主張シ、波蘭領普魯士ノ人民ニ迫リテ、強テ穀物、軍馬ヲ賣ラシメタリ。而シテ是レ等ヲ購買スルガ爲メニ用ヰタル貨幣ハ、或ハ波蘭銀貨ノ贋造物ニシテ、表價三分一ノ價格ヲ有スルモノカ、否ラザレバ、和蘭銀貨ノ贋造物ニシテ、僅カニ一割七分ニ通用スベキモノナリキ。左レバ、普王ハ此ノ手段ニ由リテ、七百萬弗ノ利潤ヲ得タリ。

波蘭第一回分割

普王ハ、西曆一千七百七十一年我カ明和八年辛卯十月二十九日ヲ以テ、一編ノ勅令ヲ發シ、何人ニ拘ハラズ、普軍ヨリ拂ヒタル金銀ハ、異議ナク領取スベキ旨ヲ命セリ。

普王又波蘭ノ少年ニ迫リテ、強テ之ヲ普軍ニ編入シ、又ボスナニア州ノ各都府村落ヨリ、結婚期ノ少女若干名ヲ普領ニ送リテ、人口蕃殖ヲ謀レリ。是レ普領ハ、多年ノ戦乱ニ由リテ、人口減少シタルハナリ。是レ等ノ少女ハ、一人毎ニ、臥床一具、豚二匹、牛一匹、金三ダカツト一ダカツトハ、凡ソ我カチ與ニ圓二十五錢ニ當ルヘリ。世ニ傳フル所ニ據レバ、普將ベリンク(Belling)ノ手ヘ強テ携ヘ行キタル少女ノ數ハ、一小都會ノミユテモ五十人ナリ。又ダマツツノ地方官ガ徴兵ヲ妨碍シタリト云フヲ口實トシテ、軍ヲ同地ニ進メテ、十萬ダカツトヲ課シ、一千人ノ少年ヲ強テ普軍ニ編入セシメタリ。夫レ斯ノ如ク、普軍ガ、ボスナニアト、波蘭領普魯士トヲ占領シタルハ、則チ暗ニ蠶食ノ意ヲ示シタルモノニシテ、其ノ恣ニ兵ヲ募リタルハ、取リモ直サズ其ノ他ヲ奪有シタルモノナリ。

奥國モ亦南方ニ於テ、同一ナル舉動ヲ行ヘリ。初メ一千七百六十九年我カ明和六年己丑ノ春、波蘭同盟軍ノ將ビルチンスキ(Bizynski)少數ノ同盟軍波蘭ノ同盟軍ナリ

ヲ率ヰテ、チツプス州ノ一府ルポーラニ入り、軍資ヲ徴収セントス。此チツプス州ハ、クラコト伯爵領ノ南方、カーパシアン山脈ノ間ニ在リテ、元ト匈牙利王國ノ一部タリシモノナリ。會々露軍追尾シテ、同府ニ突入シタリシカバ、同盟軍例ノ如ク、匈牙利ニ避ケタリ。是ニ於テ維也納朝廷ハ露軍ガ隣境ニ集マリタルヲ奇貨トシ、國防ヲ辭柄トシテ兵ヲ同地ニ出セシガ、其ノ兵ハ、同地方ニ屯在スルノミニ止マラズシテ、更テ近傍ノ地方ニ進入セシメント欲シ、其ノ口實ヲ舊記ニ求メタルノ末、更ニチツプス州ヲ占領セシメ、土木師ヲサシマシツ。ノウヰタルヒ、ツタルツチン三州ニ沿ヒタル境界線ノ處ニ遣ハシ、數多ノ鷲章旗奧地利ノ國旗ヲ建テ、以テ區劃ヲ示セリ。

波蘭王スタニスラス、アウガスタスハ、奥國ノ此ノ舉動ヲ聞キテ大ニ之

チ不當トシ、一千七百七十年^{我カ明和七年庚寅}十月二十八日、書ヲ送リテ之ヲ詰問
 シタリ。然ルニ埃國女皇ハ翌七十一年^{我カ明和八年辛卯}一月ヲ以テ答フラシ、平和
 ノ曉ニ至ラハ兩國ノ和交ヲ旨トシ、双方ノ一致ニ由テ境界論ヲ決スベ
 シ。然レドモチツプス州ハ朕ガ權利ヲ有スル所ナレバ、今ニ於テ其ノ界
 線ヲ區劃セザルヘカラズト。當時ノ事情ニ由リテ推察スルニ、埃國女皇
 ノ意ハ、必ラズシモ蠶食ノ慾ヲ恣ニセント欲シタルノミニハアラザル
 ガ如ク、露軍ガ隣境ニ接近シタルノ一事モ亦彼ノ女ヲシテ戒心セシメ、
 猜忌ノ念ヲ起サシメタルニ似タリ。
 然レドモ、狡猾ナル普王、露女皇ハ埃軍ノ此ノ舉動ヲ見テ、忽チ一策ヲ按
 出シ、朕等ガ波蘭ノ地ニ兵ヲ派出シタルハ、實ニ同國ノ平和ヲ恢復セン
 ト思ヘバナリ。故ニ我レ等ガ同國ノ版圖ヲ占領スルハ、只一時ノ占領ニ
 過ギズシテ、彼ノ埃女皇ノ永久ニ占領スルトハ同日ノ論ニアラズト稱
 シ、分割首謀者タルノ咎ヲ彼ノ女ニ歸セント勉メタリ。然リト雖モ、彼レ

等豈後世ヲ欺シテ得ンヤ。

普王ノ摺策

抑モ波蘭分割ニ關シ、三國始メテ氣脈ヲ通シタルハ、一千七百七十年^{我カ明和七年庚寅}十二月、翌七十一年^{我カ明和八年辛卯}一月トノ兩回ニ在リ。今先ツ十二月
 ニ於ケル交通ノ頗末ヲ述ヘンニ、當時露女皇カマリナハ、豫テ相識ナル
 普王ノ弟ヘンリー親王(Prince Henry)ヲ招待セシガ、狡猾ナル普王ハ胸ニ
 一物アルヲ以テ、頻リニヘンリーニ向テ此ノ招待ニ應センコトヲ勸メ、親
 王遂ニ露國ニ到レリ。時ニ聖彼得堡ニ於テハ、公衆舉ツテ今回ノ戦勝^{其ニ勝チタルヲ云フ}ニ
 其ニ勝チタルヲ賀シ、今正サニ祝捷會ノ開カレタル最中ナリキ。ヘンリー亦兄
 王ニ似テ、頗ル追従ノ名人ナリシカバ、口ヲ極メテ露國ノ武功ヲ稱シ、術
 ナ盡シテ女皇ノ盛徳ヲ讚メケルニ、流石男優リト怖テ恐レテレタルガ
 マリナモ、女儀ノ事ニシアレバ、其ノ自負心ニ附ケ入ラレタル諛言ニハ
 オノツカラ心魂ヲ奪ハレテ、只ホク々々ト喜ブノ外ナク、ヘンリーヲ
 復タナキモノトシテ熱心ニ之ヲ款待シケル。ヘンリー固ヨリ左ルモノ

分割ノ議ノ定
マリタル願未

ナレバ、此ノ虚ニ乗シテ、徐々ニ埃國ノ仲裁露土戰爭ニ關スル仲裁ナリヲ承諾アレカシト
 説キ、終ニカタリナシテ承諾セザルヲ得ラシメ、兄王依囑ノ重任ヲ
 遂ゲ得タリ。波蘭分割ノ舉ハ、此ノ際第一着ト見做シテ可ナリ。
 初メヘンリーガ、カタリナニ向テ、埃國ノ仲裁ヲ承諾アレカシト望ミ
 シ時、カタリナハ、モルダヴィキア、及ヒアテヤハ、拋擲スルヲ遺憾ナ
 思ヒテ、躊躇シタリシガ、會々埃軍、ホメプス夫、占領シタリトノ報ヲ接
 セシガハ、大ニ驚キテ言ヘラク、埃國果シテ波蘭ノ版圖ヲ奪ヒヌヌヤ
 ハ、我レ等二國雖モ亦其ノ例ニ倣ヒテ、之ヲ奪ヒ、埃國ガ手ヲ引クニ至
 リテ、始メテ止マザルベカラズト。ヘンリート此ノ一言ヲ聞クヤ、忽チ心
 中會得スル所アリ。以爲ラシ、露女皇ガ埃國ノ仲裁ヲ承諾セザル所以
 ハ、只埃國ガ彼ノ女ニ向テ、モルダヴィキア、ワラシヤ占領ニ異議ヲ唱フ
 ルノ一事ニ在レバ、此ノ一事ダコナクハ、彼ノ女ハ容易ク仲裁ヲ承諾
 スベシ。而シテ埃軍ノ今回ノ占領ニ就テ考察スルニ、維也納朝廷ガ版

圖ノ擴張ヲ熱望スルコトハ、聖彼得堡朝廷ニ讓ラザレバ、埃國ヲシテ露
 國ガ二地占領ニ對スル猜忌心ヲ和ラゲマムルコトハ、彼ノ女ニモ亦同
 一様ノ版圖ヲ領有セシメザルベカラズ。而シテ露埃ノ間既ニ調停ス
 ルモ、兄王亦同一様ノ版圖ヲ得ズンバ不可ナラズト。ヘンリーハ、
 此ノ理由ヨリ三國分割ノ考案ヲ起シテ、之ヲカタリナニ
 呈セシム。カタリナ稍々熟考ノ後コ言ヘラク、貴策頗ル可ナリ。然レモ
 第一露軍難キニ波蘭ニ進入スルニ當リ、朕ハ、決シテ尺寸ノ地ヲモ
 攻畧セサルベキ旨ヲ堅ク誓ヒタレバ、今ニ及ヒテ之ヲ分割スルハ、
 渝盟ノ議ヲ如何セン。第三良シヤ一步ヲ譲リテ、渝盟ノ議ハ意ヲ介ス
 ルニ足ラズトスルモ、埃國恐ラクハ、我レヲ疑ヒテ、分割ノ議ヲ納レザ
 ランカト。左レド、ヘンリーハ、猶辭ヲ盡シテカタリナニ説キ勸メシガ
 ハ、カタリナ終ニヘンリーノ考案ニ從ヒ、且ツ第一渝盟ノ議ハ願フザ
 ルコト爲シ、第二又露埃ノ間ハ、普國之ガ調停ノ責ニ任スルコトヲ

事始メテ調ヒタリ。

(参考) 露國ハ、一千七百六十七年我が明和四年丁亥ニ制定セル法典第九條ノ中ニ「波蘭ノ國土ハ、一部ヲトモ分

フレデリック
最肩ノ史家ノ
叙事

ラレデリック最肩ノ史家が叙スル所ニ據ルニ、普王ハ、當時夢ニダモ
此ノ奸計ヲ知ラズ。ヘンリイ歸國ノ後、之ヲ説キ出ヌヲ聞キテ、大ニ驚
キ、且ツ波蘭ノ爲メニ深ク歎キテ、痛ク其ノ説ニ反對シ、更ニ用ニベク
モアラザリシガ、既ニシテ以爲ラク、波蘭斯ク吸血鬼ノ爲メニ見込マ
レタル以上ハ、逆モ挽回ノ策ハ講シ難シ。徒ニ隣國ノ版圖ヲ増サンヨ
リモ、我レモ亦其ノ配當ニ與カリタル方ニシテナラズト。是ニ於テ、心ナ
ラズモ分割ノ議ヲ承認シタリト云フ。左レド此ノ叙事ノ眞偽ハ保シ
難シ。或ハ足利直義ノ奸策ヲ以テ尊氏ノ毫モ知ラサル所ト爲シ、秀頼
ノ自殺ヲ聞キテ、東照公深ク嘆カレタリト爲スノ類ニハ、アラザレガ。
普露兩國既ニ波蘭分割ノ議ヲ決シタレバ、フレデリックハ、維也納朝廷

英國、分割ノ

露ニ同意ヲ表
ス

ニ向テ此ノ議ヲ通シ、加撥ノ事ヲ勸誘シケル。埃國ニ於テハ、ジヨセフ帝
ト、首相コトヒツットハ、直ニ普國ノ勸誘ニ應ゼント欲スレドモ、マリ
ア、アレキ女皇兎角不同意ヲ唱フルヲ以テ決セザリシガ、既ニシテ女皇
遂ニ意ヲ在ク、埃國ハ此ノ勸誘ニ同意ヲ表セリ。

分割ニ關スル商議ノ概界ハ以上述フルカ如シ。然レド其ノ詳細ハ知ルニ由ナシ。何トナレハ三國ノ帝王
共ニ飽ク迄ニ秘密ヲ守一トシ、ミツカラ其ノ事ニ當リテ、可及的代人ヲ用サレマナリ。

フレデリック大王ノ筆ニ成リタル「隨筆」(Memoirs)ニ據ルニ、埃露ノ間
ニ商議ノ速ニ調ハザリシ所以ハ、露國女皇ガ、マンナツヒ市チ己レガ
手ヲ得ント主張シタルニ由レルガ如シ。左ニ大王ノ叙記セシ所ヲ掲
グン。
「分割條約ハ、露人ノ緩慢ト不決斷ト入爲メニ速ニ結了ノ運ビニ至ラ
ザリキ。露人若シマンナツヒ市チ得ント主張セザリシナランニハ、條
約ハ容易ク締結セラレシナランモノナ、彼レハ此ノ小都會ノ自由ヲ

擔保シタリト云フナ口實トシテ之ヲ得ント主張シタリシガ故ニ結了ハ意外ニ遅々シタリシナリ。然レドモ元來此ノ港ノ自由ヲ擔保シタルハ、英人ニシテ、露人ニアラズ。英人ハ露人ガ之ヲ得ンコト忌ミテ其ノ自由ヲ保護シ、且ツ露女皇ニ向テ、普王陛下ノ要求ニ應スル勿レ下勸告セリ。然レドモ、普王ハ露國ノ要求ヲ速ニ許否スベキノ必要ヲ感シタルガ故ニ、且ツウヰスナスラノ領主ト、ダマナツヒハ港トハ、到底ダマナツヒ市ニ屬スベキコトノ明カナルガ故ニ、單ニ早晚領収スベキ利益ヲ今領収セザルノ故ヲ以テ、斯ル重要ナル商議ヲ中止スルノ不得策ナルヲ信シ、斷然一時之ヲ拋擲スルコトニ決セリ。是ニ於テ秘密條約ハ、西曆一千七百七十二年我カ安永元年壬辰二月十七日ヲ以テ、聖彼得堡ニ於テ締結セラレ、六月ヲ以テ各自ノ目的地ヲ占領スルコトニ定メ、且ツ埃女皇ニ説キテ此ノ議ニ與カリ、分割ニ加擔セシムルコトニ決セリト。既ニシテ、フレデリックハ、右ノ決議ニ從ヒ、埃國ニ此ノ事ヲ説キタリ

普露兩國ノ間ニ於ケル秘密條約

埃國女皇、分

割ニ異議ヲ唱

シニ、ヨセフト、コーニツツトハ、早速ニ領承シタレドモ、女皇ハ更ラニ承諾スベクモアラズ。朕ノ良心ハ之ヲ許サズト稱シ、恣ニ他人ノ所領ヲ奪フ所ハ、地獄ニ墜ルノ恐レアリト説キテ、兩人ノ意見ヲ斥ケタリ。兩人猶推シ返ヘシテ言ヘラク「若シ我が邦ニ於テ異議ヲ唱ヘタルガ爲メニ、波蘭ナシテ分割ノ禍ヲ免カレシムベキノ好方便ニテモアルナラバ、聖諭固ヨリ間然スヘキナキナリ。然レドモ普露二國ハ、此ノ異議ニ恐レテ絶念スベキモノニアラズ。孰レニシテモ波蘭ハ割地ノ災ヲ被ルベキモノナリ。而シテ我レ若シ之ヲ救ハント欲シテ此ノ事ニ亦異議ヲ挿マバ、干戈忽チ起リテ數万ノ生靈ハ、不時ニ生命ヲ失ハザルヲ得ザラン。是レニ由リテ之ヲ觀レバ、我レ寧ロ之ヲ承諾シ、三國分割シテ平和ニ局ヲ結ブナ上策トスベキナリト。女皇遂ニ其ノ議ニ從ヘリ。

埃國既ニ分割ノ議ニ同意シケレバ、先ツ一千七百七十二年我カ安永元年壬辰三月四日ヲ以テ普埃兩國ノ間ニ條約ヲ結ヒ、同八月五日ヲ以テ、三國遂ニ判然タル分割條約ヲ結ヒ、此ノ條約ニ由リテ、左ノ如ク定メリ。

(第一) 露國ハポロツク、ウヰテブスク、シスローフ三伯爵領、即チツウヰナ、ニステル兩河ニ至ル迄、凡ソ三千平方リীগ一リイグハノ地ヲ領スルナリノ地ヲ領スルベキ事、

(第二) 埃國ハ、赤露西亞レド(カリシヤ)ポドリヤノ一部、小波蘭、即チヰヰスチエラ河ニ至ル迄、凡ソ二千五百平方リীগノ地ヲ領スルベキ事、

(第三) 普國ハ、波蘭領普魯士但シダンナツヒ及ヒトルント、彼レ等ノ部落トテ除ク。大波蘭ノノテツク河チツツ河ニ至ル迄ノ部分、合計凡ソ九百平方リীগノ地ヲ領スルヲ以テ足レリトスベキ事、

(第四) 波蘭王國ノ自餘ノ部分ハ、依然スタニスラス、アウガスタス所領タルベキ事ノ所領タルベキ事。

第三章

三國各々分割ノ理由ヲ公ニスル
三國、波蘭ニ分割ノ承諾ヲ迫ル

三國、各自ノ行爲ヲ辨解ス

普埃露ノ三國ハ、ミヅカテ分割ノ不條理ナルヲ知ルガ故ニ、強テ之ノ理由ヲ附シ、公ニ向テ辨解セザルモカラズト爲シ、各自理由書ヲ世ニ出シテ、其ノ正當ノ理由アル事ヲ証シ、今回兵力ニ依リテ之ヲ奪ヒタルハ自己ノ領地ノ久シク同國ニ侵掠セラレタルモノヲ恢復シタルニ過ギザルヲ述ヘテ以テ世人ヲ瞞着セント企テケル。

露國ノ辨解

露女皇カマリナハ、他ノ迄モ道德家ノ体面ヲ装ヒ、露國ガスタニスラスノウガスタスチ波蘭王ノ位ニ即カシメタルノ事實ヲ擧ゲテ、深切ノ所爲ナリト喋々シ、且ツ曰ク。

スタニスラス、アウガスタスノ即位ハ、波蘭ノ自由ヲシテ昔日ノ光榮

ヲ回復セシメ、長ヘニ選王權ヲ鞏固ナラシムルニ必要ナリキ。彼ノ深ク同國ニ根底シテ、斷エズ紛争ノ源ト爲ル所ノ外國干涉ノ如キモ、亦此ノ即位ト共ニ消滅スルヲ得ベカリキ。吾人ハ能ク此ノ事情ヲ知ルガ故ニ、百事ヲ抛テテ此ノ事ニ盡力シタリ。其ノ波蘭ヲ念フ心ノ切ナルハ、此ノ一事ニテモ知ルベシ。

然ルニ、彼レ同盟黨ハ何者ゾヤ。宗教ノ特權ト、法律ノ維持トヲ名トシテ、竊カニ野心ヲ包藏シ、貪婪厭クナキノ慾ヲ遂セント望ミ、其ノ禍全國ニ蔓延シテ、波蘭ヲ零落ノ淵ニ沈マシメントス。早ク之ヲ勦滅シテ禍根ヲ絶テザルベカラズ。是レ我カ露國ガ波蘭ニ代ハリテ征討ニ從事シタル所以ナリ。

女皇ハ先ツ右ノ如ク、専心一意、波蘭ニ盡セル所以ヲ述ベテ露國得意ノ瞞着手段ヲ試ミ、次ニ分割ノ正當ナル所以ヲ示サント欲シテ、波蘭ノ版圖ハ、一千六百八十六年我カ貞享三年丙寅マデ、ヅケ井十河口、及ビニコルメル河畔ノ

ストイカ府キヨウウチ附近ノ地ニ在リ。以外ニ擴ガラザリシ事ヲ舊記ニ徵シ、同年ノ條約以來、露領久シク波蘭ノ手ニ入りタリト云ヒテ、露國ガ今回之ヲ回復スルノ權利アルヲ論シ、牽強附會ノ說ヲ述ベテ曰ク。

當時露國ガ忍ンデ此ノ讓與ヲ爲シタル所以ハ、遠ク干戈ヲ戢メ、生靈塗炭ノ苦ヲ救ハント欲シテナリ。然ルニ波蘭ノ臣民ハ、輒モスレバ、兵馬ヲ動かシ、近隣ノ變寧ヲ擾シ、以テ露國ノ厚志ニ反セリ。露國ガ今回固有ノ權利ヲ回復シタルモ謂ハレナキコアラザルナリ。管ニ然ルノミナラズ、此ノ讓與ハ只一時ニ止マレ、レノヲ注意セザルベカラズ。何トナレバ、同條約ノ明文ニ「否ラザルモ和好ヲ修メ得ル迄讓與云々」ト記シアレバナリ。左レバ今回壤地ヲ回復シタルノ主旨ハ、互相ノ舊怨ヲ散シ、紛争ノ種子ヲ除キ、永ク平和ヲ將來ニ維持センガ爲メナリ。

露國ハ斯ル薄弱ナル議論ヲ以テ世人ヲ瞞着セント勉メタリ。世人誰レ

カ其ノ不正ヲ怒リ、其ノ暴行ヲ憎マザルモノアラシヤ。然レトモ弱肉強食ハ十九世紀ノ今日ダモ猶依然トシテ國際上ニ跋扈セリ。况ハシヤ十八世紀ノ當時チヤ。豈長大息セザルベクンヤ。

英國ノ史家リンド(Lind)ハ、『波蘭之現況』(Present State of Poland) 西曆一七七二年(我カニ記シテ曰ク)「現彼得堡ノ國務大臣ハ、如何ニ此ノ已レ等ニ在ル時ト雖モ、之ヲ公衆ノ前ニ辨解スルニ當リテ、恬然トシテ毫モ耻ツル色ナシ。顧フニ、彼得ノ廟御^{カトリック}カトリック、其ノ夫^{シヨハ}夫^{シヨハ}皇^{シヨハ}親王(Prince John)ノ暗殺等ノ爲メニ漸ク憤レテ、面色ヲ厚^{シタル}シタルナリ」云。

埃國ノ辨解

埃國モ亦壤地回復論ヲ播甲トシテ説チ爲シテ曰ク「昔者西曆一千三百八十七年^{我カ元中四年丁卯(足利三代將軍義隆ノ時)}匈牙利王ノ位ニ即キタル、シハ、スヤノド(Sigismund)ハ、同一千四百十二年^{我カ慶永十九年壬辰(足利四代將軍義持ノ時)}ナツプスノ地ヲ抵當トシテ波蘭王ウラヂヌラス二世(Wladislas II)ヨリ若干金ヲ借用セタリ。故ニ埃國ハ今之ヲ回復スベキ權利アリト。今一步ヲ讓リテ、假リニ抵當トシタル土地ハ、回復スベキ權利アリトスルモ、舊記ニ據ルニ、シハ、マノドハ、之ヲ讓與シタルナルベシ、抵當トシタルニハ、アラザルベシ。埃國ハ此ノ事ニ

就キテ述ベテ曰ク「匈牙利累代ノ諸王ハ、即位ノ際ニ、必ラズ版圖ノ一部ダモ他國ニ割キ與ヘザルベキヲ誓ヘリ。是レシハ、スマノドガ土地ヲ讓與セザリシノ確證ナリト。然レモ此誓約ハ、一千五百廿七年^{我カ大永七年丁亥(足利十三代將軍義晴ノ時)}フエルヂナノド一世(Erdinand I)即位ノ際ニ始マリタルモノニシテ、是レヨリ以前ニハ、斯ル誓約ノアラザリシナ如何セン。

埃相コローニツツハ、又埃女皇ハ、匈牙利女皇トシテ、ガリシア、及ビポドリアナ領スベキ權アリ、ホヘミア女皇トシテ、オスウヰ^{シム}シム、及ヒツアートル兩公國ヲ領スベキ權アリト主張セリ。今其ノ理由ヲ聞クニ、左ノ如シ。

舊記ヲ按スルニ、匈牙利累代ノ諸王ハ、其ノ印章又ハ証書ニ於テ、ガリシアノ名義ト紋章トヲ用ヰタルノ証アリ。而シテ其ノ後更ラニ之ヲ棄却シタルヲナシ。故ニ埃地利家ハ、此ノ領地ヲ回復スベキ正當ノ權アリ。……

三國各々分割ノ理由ヲ公ニスルニ三國、波蘭ニ分割ノ承諾ヲ道ル

フレデリック大王ハ民法ノ原理ニ基キテ辨解ヲ爲セリ。王曰ク。
 凡ソ甲國、乙國ノ版圖ヲ取リテ我カ版圖ニ爲サソコハ明白ニ讓與セ
 ラレタルノ確証ナカルベカラズ。否ラズンハ、正當ノ版圖ト稱スルコ
 ト得ザルナリ。或ハ言ハシ、久用權^{免除}ニ由リテ正當ノ版圖ト爲ルト。然
 レドモ世人ノ知ル如ク、久用權及ヒ天賦權ノ議論ヲ取リテ、之ヲ主權
 者互相ノ間若クハ自由國互相ノ間ニ應用スルヲ得ベキヤ否ヤハ、學
 者間ニ於テ未決ノ問題タルニアラズヤ。然ラバ久シク權利ヲ使用セ
 ザリシ人ハ之ヲ棄却シタルモノト假定スト云ヘル議論ハ甚薄弱ナ
 リト謂ハザルベカラズ。故ニ其ノ主張者ト雖モ、之ヲ斷言スルコトハ能
 ハザルベク、舊領主ノ權利特權ヲ拒否スルコト能ハザルベシ。况ハンヤ
 兵力ニ依リテ、強テ舊領主ヨリ奪ヒタルニ於テチヤ。斯ル場合ニ於テ
 ハ如何ナル主張者ト雖モ、全ク此ノ假定ヲ取消サハルヲ得ザルナリ。
 我カ普國ガ波蘭ノ爲メニ版圖ヲ奪ハレタルカ如キハ、正サシク此ノ

場合ニ當ルモノトス。

歲月ノミニコテハ、不正當ノ所有ヲ正當ニ變スルコト能ハズ。而シテ自由
 國ト自由國トノ間ニハ、正不正ヲ判定スベキ判事ナシト雖モ、理論ニ
 二様ハアルベカラザルガ故ニ、前條ノ理論ヲ推スルハ、普國ハ波蘭ニ
 於ケル我カ所領ヲ回復スベキ權利アルコト明カナリ。

以上掲グル所ハ、普埃露三國ガ波蘭分割ニ關スル辨解ナリ。其ノ理否曲
 直ノ如キハ、既ニ世上ノ定論アルヲ以テ、編者ハ之ヲ論セズ。只『嗚呼』ノ二
 字ヲ以テ議論ニ代ヘンノミ。

三國、波蘭ニ
批准ヲ道ル

三國ハ、波蘭國會ニ迫テ分割ノ條約ヲ批准セシメント欲シ、一千七百七
 十三年^{我カ安永二年癸巳}四月十九日ヲ期シテ、同國會ヲソルソニ開カシメ、自己
 ノ利便ノ爲メニ恐迫的手段ヲ行ヒ、全國到ル處ニ、各自ノ兵ヲ排置シ、殊
 ニ京城ソルノ如キハ、三匝ニ之ヲ圍メリ。埃公使レウヰスキ(Bewiski)普公使
 ベノイト(Benoit)露公使スタケルヘルロ(Sakelberg)ハ、ミツカラ議場ニ出

テ、議事ヲ監督シ、苟クモ我レ等ノ意見ニ反對セル代議士ハ、波蘭國ノ敵トシテ、并ニ三國ノ敵トシテ之ヲ處理スベキ旨ヲ宣言セリ。

三公使ハ、各代議士ニ向テ、諸君若シ毅然トシテ反對脱ヲ主張スルナラバ、波蘭全國ハ忽チ土崩瓦解ノ災ヲ被ムラザルヲ得ズ。之ニ反シテ、若シ又異議ナク、我レ等ノ意見ニ從フナラハ、外國軍ハ漸次ニ分割以外ノ地ヲ引キ上ケベシト述ベタリト、フレテリツク大王ノ手書中ニ見ユ。

第四章 愛國者激シク分割ノ議ニ反對

スル分割遂ニ行ハルハ外國冷

然タリ

三國ノ聯合軍ハ、議院ノ周圍ヲ三匝シ、三公使ハ傲然トシテ議場ヲ睥睨シケレバ、多數ノ議員ハ其ノ勢力ニ畏怖シテ敢テ言語ヲ發スルモノナカリキ。然レドモ波蘭豈一人ノ硬骨男兒ナカラシヤ。レイトン (Reyton) ノ如キハ實ニ其ノ一人ナリ。レイトンハ世々リナユアニアニ住シ、墨キニ

硬骨男兒レイトン

硬骨男兒サムエル、コルサツク

パリノ同盟黨ニ加ハリテ頭角ヲ見ハセシヨリ、大ニ世ノ信用ヲ博シ、ウチグロデツクノ選舉人ノ爲メニ選バレテ今回ノ議員ト爲レリ。サムエル、コルサツク (Samuel Korsak) モ亦レイトント力ヲ戮ハセ、一身ノ安危ヲ度外ニ置テ國ニ誠忠ヲ盡サントノ覺悟ヲ爲セリ。初メコルサツク、議員ニ選ハレテ將ニワルソトニ赴カントセシ時、父之ヲ誠メテ曰ク「噫々我カ子ヨ、今ヤ豺狼^{野蠻}相黨シテ我カ^{波蘭}肉ヲ啖ハントス。實ニ危急存亡ノ秋ナリ。汝須ヌク全身ノ力ヲ竭シテ彼レ等ニ抵抗スベシ。予ハ數名ノ老僕ヲ汝ニ隨行セシメ、汝ガ萬一卑怯未練ノ舉動ヲ爲シタル場合ニハ、汝ノ首ヲ斷ナテ携ヘ歸ルベキヲ命ゼリ」ト。コルサツクハ能ク此ノ父ノ誠ヲ守レリ。

三國ノ助力ニ由リテ議員ニ選バレタルポニンスキ (Poninski) ト呼マレ賣國奴アリ。三公使ハ彼レヲ議長ニ舉ゲント欲シテ盡ス所アリキ。開會ノ當日、彼レハ虎威ヲ借リテ得色ヲ呈セシガ、一人ノ議員ニ由リテ議長

賣國奴ポニンスキ

硬骨男兒氣短
ヲ吐ク

ニ指名セラレ、ヤ否ヤ他ノ選舉ヲモ待タズシテ直チニ議長ノ席ニ就
カントセリ。是ニ於テ衆議員ハ起テ其ノ犯則ヲ答メ、彼ノレイトメノ
如キハ烈火ノ如クニ怒リテ叫ブラシ。諸君ヨ。議長ハ吾人ノ之ヲ選舉ス
ベキモノナリ。ボコンスキ何者ゾ。敢テ規則ヲ犯シテミヅカラ議長ニ任
スルヤ。予ハ勿論彼ノ犯則ヲ答メ、且ツ彼レノ議長タルニ異議ヲ唱フル
モノナリ。諸君請フ別ニ議長ヲ選バレヨト。レイトメガ此ノ演説ノ畢ル
ヤ否ヤ、レイトメ君萬歳「真正ノ波蘭男兒萬歳」レイトメ君議長タレノ
聲ハ硬派議員ノ熱騰ヨリ出テ、耳ヲ聳スルバカリナリキ。是ニ於テ流
石無耻鉄面ノボコンスキモ悄々トシテ議長ノ席ヲ退キ、議事ハ明日ニ
延期セラレタリ。

愛國者ノ苦心

翌朝ボコンスキハ、亦テ議場ニ顯ハレテ、議事ヲ猶一日間延期スベキ旨
ヲ述ベシガ、猶テ開會ノ時間ト爲ルヤ、外兵ヲ護衛トシテ議場ニ到リ、黨
員若干名ヲ入口ニ置キテ公衆ノ入來ヲ遏メシメタリ。既ニシテ、レイト

露公使ノ亡狀

メ。コルサツク。其ノ他少數ノ愛國者^{執レモ}次第ニ出頭シテ各自ノ席ニ就
キシガ、レイトメ、議會ガ傍聴人ヲ拒絕スルヲ見テ、叫ブタリ。諸君、予ニシ
テ苟クモ生命ノ在ル間ハ、ボコンスキヲシテ今日ノ議長トラシメザル
ベシト。時正サニ正午ナリキ。然ルモボコンスキハ、猶出頭セズ。只書面ヲ
以テ、議事延期ノ旨ヲ申シ越セリ。レイトメ答フタリ。ボコンスキハ吾人
之レヲ議長ニ選ビシコトナシ。何ノ權アリテカ延期ヲ命スルコト得ント。
多數議員ノ將サニ退出セントスルヲ見テ、急ニ出入口ニ到リテ、兩手ヲ
擴ゲテ其ノ退出ヲ遏メントス。左レド續々歸リ去リテ制スベクモアヲ
ザリシカバ、レイトメ、聲ヲ嘎ラシテ絶叫スラシ。行ケ、行ケ、軟骨漢ヨ。ミヅ
カラ已レノ國ヲ滅ボセ。外敵ヲシテ隨意ニ名譽ト自由トヲ奪ハシメヨト。

今ヤ議場ニ留マルモノ僅々十五人ニ過ギズ。中ニ就テ、レイトメ。コルサ
ツク。ヂエーリン(Durin)タルシマノースキ(Turshnowski)ヨツシヨース

波蘭第一回分割

キ(Kozuchowski)ペンシツコースキ(Penczkowski)ノ六人ハ、義心金鉄ノ如ク、
 國ニ殉スルノ志ヲ決セルモノナリ。時辰十時ヲ報セル時、露公使ヌケ
 ルベルヒヨリ書翰ヲ以テ、議員ヲ自宅ニ招キ、會議ニ與カラシメントノ
 事ナレバ、コルサツク等四人ハ、不滿ナガラモ招キニ應ジケル。ヌケル
 ベルヒハ、當初故サラニ温顔ヲ装ヒテ、愛國者ノ意見ヲ枉ゲシメント試
 ミタリシガ、其ノ決心ノ動カヌベカラザルヲ見テ、忽チ聲ヲ勵マシ、所有
 地沒収ヲ以テ彼レ等ヲ恐迫セリ。是ニ於テ、コルサツクハ起チテ宣言ス
 ズク、予ノ所有地ハ、既ニ露軍ノ掠奪スル所ト爲リテ、餘ス處甚多カラズ。
 左レト所望トアラバ、何時ニテモ之ヲ獻スベシ。予ハ一身ノ苦樂ヲ慮リ
 テ自説ナ二三ニスル者ニアラズト。依リテ我カ財産目錄ヲ出シテ公使
 ニ授ケテ曰ク、是レ予ガアリタクノ財産ナリ。予ハ敢テ我カ國敵ニ與ヘ
 テ以テ其ノ貪慾ヲ憂カシメントス。彼レ等或ハ予ノ生命ヲモ奪フニア
 ラシ。左レト如何ナル壓制者ト雖モ、富ヲ以テ予ヲ腐敗セシムルヲ能ハ

露公使、波蘭
 王ヲ脅カシテ
 分割條約ニ同
 意セシム

レトテノ決
 心非ニ失望

ズカチ以テ予ヲ恐レシムルヲ能ハザルナリト。
 レトテシハ、此ノ間、始終議場ニ殘留セリ。四人ノ愛國者ハ、議院へ歸リ來
 リシニ、門戸閉ヂテ入ルヲ能ハズ。戶外ニ一夜ヲ送レリ。翌朝ニ到リ、三公
 使ハ王宮ニ行キテ、ヌケニヌケ、アウガスタス王ニ謁シ、露公使ヌケ
 ルベルヒハ、恐迫ヌケテ、陛下若シ彼ノ分割條約ヲ裁可セズンバ、直チニ
 京城ヲ覆滅セシムベシト。亡狀モ亦極マレリト。聞フベシ。波蘭王ハ、輔弼
 ニ諮詢ノ上、返答ヲ與ヘント言フニ、空囑(ソラウソナイテ)一言ヲ覆セズ。
 暗觸ナル王ハ、且ツ恐レ、且ツ狼狽ヲ答フル所ヲ知ラズ。遂ニ言ヒ甲斐
 ナクモ、三公使ノ要求ニ從ヘリ。
 議院ニ於テハ、硬骨男兒レトテシ、飽ク迄モ分割ニ抵抗スルノ志ヲ決シ、
 議場ニ根ヲ生シ、更ニ動クベキ色ナカリシカバ、硬骨腐敗ノ國會議員ハ
 彼レ一人ヲ恐レテ、議場ニ入ルヲ能ハズ。議場外ニ於テ、議事ニ着手セリ。
 四月二十三日、ボニススキ、及ヒ其ノ黨ノ人々、議場ニ到リ、見ルニ、豈圖

レーテンノ無
懸井ニ横死

ランヤ、レーテンハ、熟睡シテ殆ンド死セルガ如クナリシ。此ノ熟睡ノ
 時間ヲ量ルニ、三十六時間許ナリシナラント云フ。是レ彼レガ初メニ
 國家ノ危急ヲ救ハント欲シテ義氣、度外ニ凝リ、後ニ救フベカラザル
 ナ知リテ失望落膽シタルヨリ、遂ニ感覺ヲ失ヒタルナルベシトゾ。
 初メ三公使ハ、レーテンノ痛ク己レ等ニ抵抗スルヲ怒リテ、之ヲ法外
 ノ刑ニ處セシガ、既ニシテ、流石虎狼ノ心ニモ、彼レノ誠忠ヲ感セシコ
 ヤ、ポニンズキヲ以テ、宥免ノ旨ヲ傳へ、旅費二千ダカツト凡ソ我カ五
千圓ニ當ルヲ與
 フベケレバ、何方ナリトモ、志ス方ニ出發セラレヨト言ハシメケル。雪
 ノ如キレトテ、更テ此ノ旅費ヲ受ケ取ラントモ爲サズ、厚志ハ
 謝スルニ餘リアレドモ、思フ所アレバ敢テ辞スト答へ、又、ポニンズキ
 ニ向テ、予ハ茲ニ五千ダカツト有セリ。足下若シ議長ノ職ヲ辞シ、同
 時ニ從來ノ腐敗ヲ洗ヒ、不名譽ヲ滌ガル、トナラバ、予ハ謹テ之ヲ足下
 ニ獻セント言ヒケルトゾ。或ル普將ハ、親シク其ノ席ニ在テ彼レガ無

三國再ヒ恐迫
手段ヲ用ニ

波蘭王ノ心事

怨ノ狀ヲ目撃シ、思ハズ感嘆ノ聲ヲ發シタリト云フ。レーテン、國家ノ
 日々ニ危急ニ迫ルヲ見、衰運ノ挽回スベカラザルヲ察シテ、失望ノ餘
 リニ自殺ノ念ヲ起シ、一日飲酒ノ際、酒盃ヲ啣ミ碎キテ之ヲ飲下シタ
 リシカバ、遂ニ胃ヲ傷ケテ死セリ。時ニ西曆一千七百八十年我カ安永
九年庚子八
 月八日ナリ。
 三國ハ再ヒ恐迫手段ヲ行ヒ、議員ニ向テ、今後猶前説ヲ固執スルナラバ、
 波蘭全國ヲ分割スベシト脅カセリ。然レドモ國會ハ依然トシテ紛争止
 マズ、過激ノ議論ヲ吐ク者モ少ナカラザリキ。
 此ノ場合ニ臨ミテ、思ヒ遣ラル、ハ波蘭王ノ心事ナリ、不幸ニシテ末世
 ニ出テタルヲ以テ、食國鬼ノ爲メニ、咬ミ傷ケラレテ、名譽上、財産上ノ損
 失一時ニ輻輳シ來リ、慚憤ノ念、我カ身ヲ責メザラント欲スルトモ、豈得
 ベケンヤ。左レバ、屢々痛切ノ演説ヲ爲シテ以テ人民ニ訴へ、人民モ亦彼
 レガ暗弱ノ罪ヲ恕シテ、坐ロニ哀憐ノ情ヲ催フセリ。

波蘭第一回分割

經界區劃委員

五月十七日、國會ハ、ボニンスキノ建議ヲ容レテ、委員ヲ命シ、三公使ト共ニ四國ノ經界ヲ區劃セシムベキヲ議決シ、同十八日、王ト、ボニンスキトノ名ヲ以テ委員ヲ命セリ。

分割條約批准セラレ

行政評議員

委員ノ中ニハ、未ダ全ク自由ヲ失ハザル者アリテ、往々薄弱ナル抵抗ヲ爲セリ。然レドモ三國ハ例ノ如ク、恐迫ヲ行ヒ、暴力ニ訴ヘシカバ、遂ニ之ガ爲メニ壓倒セラレ、八月五日ヲ以テ、分割條約ヲ批准シ、永ク評議員ヲ設ケテ、之ニ行政權ヲ委テリ。此ノ評議員ハ、四十名ヨリ成リテ、四部ニ大別シ、萬般ノ事務ヲ掌レリ。而シテ王ハ其ノ議長ノ職ニ擧ケラレタリ。然レドモ其ノ實權ハ露公使ニ在ルナリ。

分割ノ業全ク卒ル

未來ノ分割ノ兆

分割ノ業ノ全ク終リタルハ、一千七百七十四年我カ安永三年甲午ニ在リ。時ニ普埃兩國ハ、漸ク所定以外ノ地ニ經界ヲ擴ゲリ。謠ニ云ク、霜ヲ履テ堅氷至ルト。蓋シ將來第二分割ノ起ルベキ前兆ト知ルベキナリ。

外國ノ冷淡

當時諸外國ガ此ノ分割事件ヲ冷眼視シタルハ、實ニ驚クベキニ似タリ。然レドモ細カニ其ノ事情ヲ考察スル時ハ、敢テ驚クベキコアラザルナリ。例ヘバ佛國ノ如キハ、世人ノ豫テ異議ヲ挿ムベシト期スル所ナリシガ、會々路易十五世(Louis XV)ノ病ニ罹リタルト路易十五世ハ、西曆一七七四年即チ分割條約ノ定メタル翌年ヲ以テ崩リ。宰相ノ暗弱ナリシトノ爲メニ、内治スラ注意ヲ全フスルニ暇アラザリシカバ、外交上ノ事ノ如キハ如何トモスル能ハザリキ。左レド、斯クテハ世上ノ取沙汰モ加何アラント掛念シタルニ依リ、各チ維也納駐劄公使ニユワーシユール(Choiseul)ニ歸シテ以テ責任ヲ逃レントシタリ。

佛國內閣ハ言ヘラリ。公使ハ專ラ狩獵ノ事ニ心身ヲ委テ政治ヲ忽セニシ、分割ノ事全ク定マルニ至ル迄、夢ニダモ之ヲ知ラザリシト。路易十五世ハ故サラニ逆鱗シテ言ヘラク。佛公使若シユワーシユールニアラザリシナランニハ、斯ル不都合ハナカランモノナト。推シテ以テ彼レ等ガ自國ノ公使ヲ咎メテ、天下ニ謝シタルヲ知ルベキナリ。

英國ニ於テモ、此ノ處置ノ不正ヲ喋々シタルモノナキニアラズ。然レドモ、當路者ハ、租稅ノ事ニ就キテ、米洲殖民地ノ人民ト激争ノ最中ナリシ

波蘭第一回分割

波蘭ノ志士挽回ノ策ヲ講スル露國益々波蘭ノ根ヲ絶タント謀ル

カハ、是レ亦他ヲ願ミルニ暇アラザリシナリ。

一千七百六十四年我カ寛文四年甲辰英國政府ハ夫ノ惡ムベキ印紙條例ヲ米洲殖民地ニ施行シタルガ爲メニ、官民ノ間

ニ激争アリ。同七十四年我カ安永三年甲午米洲殖民地人民、大陸聯合議會ヲフサイタルフイア費府ニ開ク。同七十五年我カ安永

命ノ乱起リ、七年ノ苦戦ノ後、米洲殖民地ハ獨立國ト爲リテ合衆國ト稱セリ。珠江保著(神靈)

是レ等ノ事情ヲ酌量スルキハ、英佛諸國ガ分割ノ事ニ隙ヲ容レザリシ

モ敢テ怪ムコ足ラザルナリ。

第五編 波蘭第二回分割

第一章

波蘭ノ志士挽回ノ策ヲ講ス

露國益々波蘭ノ根ヲ絶タント

謀ル

波蘭ノ悲況

波蘭屈指ノ忠臣義士ハ、多クハ、同盟黨ノ滅亡ト運命ヲ共ニシ、殘餘少數ノ愛國者モ亦露國ノ苛虐ノ爲メニ終ヲ全フスルコト能ハズ。是ヲ以テ

志士漸ク起ル

一タヒ感慨悲歌ノ士多キヲ以テ世ニ稱セラレタル波蘭國民モ、今ハ唯々諸々トシテ露ノ嚴命ニ默從スルニ至リタル其ノ醜サ痛マシサハ、實ニ目モ當テラレザル次第ナリ。

然レドモ志士未タ全ク滅セズ、慷慨シテ露國ノ羈梏ヲ脱セント謀ル者ナキニアラズ。多數ノ人々モ亦爲メニ長夜ノ眠ヲ覺マサレタルコソ快

ケレ。是レヨリ先キ波蘭ノシエヌイト宗コナリスキ(Konarski)ノ爲メニ其ノ勢力ヲ滅殺セラレテ、萎靡不振ノ有様ニ陥リタリキ。左レド少數

ノ人々ハ舊ニ依リテ之ヲ信奉シタリシガ、一千七百七十三年我カ安永二年癸巳又

羅馬法王クレメント十四世(Clement XIV)ノ有名ナル禁令出テ、ヨリ同宗全ク其跡ヲ絶テシカバ、波蘭ノ國會ハ、彼ノ宗徒ノ所得ヲ取リテ悉

ク之ヲ國民教育ノ費用ニ充テ、委員ヲ選ビテ之ニ監督ノ任ヲ囑セリ。爾來教育ノ普及ト共ニ漸ク國民獨立ノ精神ヲ發揮シ、露國ノ暴虐ニ抵抗シ、其ノ苛政ヲ脱卻セントノ計畫ハ、既ニ冥々ノ間ニ起リケル。

左レバ一千七百七十六年我カ安永五年丙申ノ波蘭國會ニ於テハ、王ミツカラ憲法改正ノ必要ヲ促ガシ、前大臣ツアモイスキ(Nabobski)コソ此ノ修正ノ事ニ當ラシムベキ適任ノ人ナラント言ヘリ。ツアモイスキハ愛國心深キ人ニシテ、曩キヨ一千七百六十七年我カ明和四年丁亥ニ大臣ノ職ヲ辭シタル時ノサマハ其頃尙世人ノ記憶ニ存スル者ナリ。サテ王ノ意見ハ全院ヲ贊成ヲ得タリシカバ、ツアモイスキ選バレテ委員ニ任シ、同八十年我カ安永九年庚子以テ新憲法ヲ國會ニ提出セリ。此ノ憲法ノ中ニ記セル改正ノ要件ハ左ノ如シ

(第一) 自由不認可リベラム、グザル、ト、可決スルヲ能ハザルヲ云フヲ廢スル事

(第二) 國王選舉ノ制ヲ廢スル事

(第三) 奴僕第十一頁參看ヲ解放スル事

(第四) 商人ニ代議士選舉ノ權ヲ與ヘ之ニ由リテ參政權ヲ得セシムル事

(第五) 貿易ヲ獎勵スル事

要スルニ此ノ改正ノ精神ハ波蘭ナシテ歐洲文明國ト相馳騁セシメシト欲スルニ在リト雖、其主義ヲ貫シノ精神ニ至テハ薄弱ナルヲ免レザリシ也。

此ノ改正憲法ノ草案者タルツアモイスキハ、ピーツアムノ我カ領地ヲ住スル奴僕ヲ解放シテ以テミツカラ先例ヲ示シ、且ツ彼レ等ヲシテ國家ノ盛衰ニ利害ヲ有セシメ、王姪スタニスラス、ポニアトリスキ(Stanislus Poniatowski)及ヒ其ノ他ノ貴族モ亦ツアモイスキノ例ニ倣ヘリ。然レトモ貴族ノ多數ハ短見ニシテ、真正ノ利益ヲ解スルヲ能ハズ、好惡ナル露國ハ彼レ等ニ迫リテ此ノ有益ナル改正ニ反對セシメシカバ、一千七百八十年我カ安永九年庚子國會ハ新憲法ヲ否決シタルノミナラズ、其ノ多數ハツアモイスキヲ誣ユルニ國敵ヲ以テセリ。左レバツアモイスキガ折角ノ苦心モ一朝水泡ニ歸シタルニ似タリ、然レドモ間接ノ結果ハ早晚歴

波蘭貴族ノ短見、露國ノ干渉

波蘭王。露女
皇及ヒ埃帝
ト約束ヲ結ブ

露土復々干戈
ヲ接ユ

普國、波蘭ニ
同盟ヲ望ム

然トシテ見ハレリ。

波蘭王ハ猶心ニ此ノ計畫ノ實行ヲ希ヘリ。然レドモ露國ノ干涉ヲ恐ル
ガ故ニ、一千七百八十七年我カ天明七年丁未五月、カタリナ女皇ガ哥里米ニ旅行
ノ際、彼ノ女ヲ訪ヒテ、親シク將來ノ事ヲ談シ、憲法改正ヲ以テ露國ガ侵
襲ノ口實ト爲サソルベキ旨ヲ堅ク約束セシメリ。時ニ埃帝モ亦カタリ
ナニ訪問シタリシカバ、波蘭王又埃帝ニ向テモ同一ノ約束ヲ爲サシメ
タリ。

同年八月露土復々干戈ヲ交ユ、而シテカタリナヨリ波蘭ニ向テ、攻守同
盟ヲ結バント望ミ來リシカバ、波蘭ニ於テハ翌年ノ國會ニ此ノ議ヲ提
出シテ其ノ可否ヲ問フ。偶々此ノ時、普王フレデリック、ウヰリアム(Friederick William)
西曆一七四四年(我カ延享元年甲子)生レ、同一七九七年(我カ寛政九年丁巳)崩ス。フレデリッ
ク、ウヰリアムニ世ト云フ。フレデリック大王ノ姪ナリ。西曆一七八八年(我カ天明八年戊
申)フレデリック大王崩シテ、英、蘭、瑞典ノ三國ト同盟シテ將サニ露埃ノ二國ヲ擊
共ノ後嗣ト爲リタルナリ。英、蘭、瑞典ノ三國ト同盟シテ將サニ露埃ノ二國ヲ擊
クントシテ、波蘭ニ同盟ヲ乞ヒ、貴國果シテ露ヲ棄テ、我レ等ニ同盟セ

波蘭ノ志士挽回ノ策ヲ講スニ露國益々波蘭ノ根ヲ絶タント謀ル

ラル、ナラバ、我レ等ハ管ニ貴國ガ憲法改革ノ舉ニ反對セザルノミナ
ラズ、寧ロ双手ヲ舉ゲテ之ヲ贊成セント言ヘリ。時ニ波蘭王ハ一千七百
八十八年我カ天明八年戊申九月三十日ヲ以テ國會ヲ召集シ、國會ハ既ニ不便ナル
自由不認可權ヲ廢シ、多數決議ノ法ニ由リテ議事ニ着手シタリシガ、十
月十二日、普公使ハ國會ニ向テ、波蘭ガ露國ト同盟シテ土耳其ヲ伐ツノ
不可ナルヲ陳シ、露ヲ棄テ、普ト同盟ヲ結ブベシト勸ム。國會ハ回答ス

ラシ。我レ等ハ、決シテ露ト進戰同盟ヲ結バント欲セザルナリト。
國會ハ又同時ニ、一個獨立ノ改革ニ着手シ、他國ニ謀ラズシテ改
革ニ着手スルヲ云フ兵數ヲ十萬人
ニ増加シ、軍務省ヲ置キテ、王又ハ内閣ニ對シテ全ク獨立ノ位置ヲ保クニ
メ、露兵ニ向テ直チニ波蘭國內ヨリ退去センコトヲ要ム。露公使ハ、大ニ此
ノ要求ヲ不可トシ、異議ヲ述ベテ曰ク、予ハ貴國ガ他ク迄モ一千七百七
十五年西曆ナリ。我カ安永四年乙未ニ當ル。憲法ヲ變更スルコトナカラシムコトヲ望ム。貴國若シ聊
カコテモ變更セラル、ナラバ、予ハ條約違犯ト見做サソルヲ得ズト。噫

露國ニ撤兵ヲ
要ム
露國大ニ怒ル

波蘭第二回分割

普ノ意見全ク露ニ反ス

波蘭人、普王ニ欺カレテ同盟ヲ結ブ。波蘭新憲法ヲ發布ス。一六六
々不法モ亦甚シカラズヤ。左ルニ普公使ハ全ク反對ノ意見ヲ懷キ、普王陛下ハ貴國ガ如何ナル改革ヲ行ハル、トモ、將タ如何ナル事ヲ計畫セラル、トモ、毫モ干渉セザルベシト言ヘリ。既ニシテ國會開會ノ期限既ニ滿ナシガ國會ハ無期延會ヲ議決シタリシカバ、露國ハ之ヲ聞キテ怒ルヲ益々甚シカリキ。

第二章

波蘭人、普王フレデリック、ウヰリアムニ欺カレテ同盟ヲ結ブ

波蘭新憲法ヲ發布ス

露國黨及ヒ普國黨
此時波蘭國內ニ露國黨ト普國黨ノ兩派ヲ生シ、國是泛々トシテ定ラズ。甲ハ論シテ曰ク、吾人苟クモ露國ノ爲メニ全ク運命ヲ左右セラル、問ハ公然之ニ反對スルハ愚ノ至ト謂ハザルベカラズ。寧ロ其ノ保護ヲ仰ギテ憲法ヲ改革シ、政体ヲ鞏固ニスルニ如カザルナリ。然ルレハ、或ハ既ニ

波蘭人輕信ノ弊

失ヒタル版圖ノ三分一ヲ恢復スルヲ得ルヲラント。之ニ反シテ、乙ハ普ト同盟ヲ結ビテ、新憲法ヲ確定シ、併セテ露ノ保護ヲ蒙ルベキノ利益ヲ喋々セリ。蓋シ波蘭人ノ流弊ハ他國ヲ輕信スルニ在リ。人誰レカ露國ガ一旦奪有シタル壤地ヲ返還スベシト思考スル者アラソ。然ルニ波蘭人ハ獨リ其返還ヲ信シテ疑ハズ。又人誰レカ普王ノ保護ヲ誠實ヨリ出テタリト思考スルモノアラソ。然ルニ波蘭人ハ獨リ夢ニダモ之ガ奸猾ヲ悟ラザルガ如シ。ソモ普王ガ波蘭ニ同盟ヲ求ムル所以ノ内心ヲ察スルニ、彼レハ、夙ニトルン、及ヒダソチツヒノ兩府ヲ得テ、ウヰキスヤエテ河貿易ノ權ヲ專占センコトヲ望メ、其ノ容易ニ承諾セサランコトヲ恐レ、先ツ條約ヲ結ビテ、然ル後徐カニ爲ス所アラソト欲シ、サテハ之ヲ求メタルナレ。左レバワルソ一駐劄ノ普公使ルーケシニ(Lucchesini)ニ内意ヲ含メテ、條約ノ明文ニ之ヲ記載スルコトナク、只暗ニ其ノ意ヲ諷示セシメタリ。妄信ノ弊アル波蘭人ハ毫モ此ノ内心ヲ悟ラズシテ、只管普王ヲ恃ム

普王が同盟ヲ求ムル理由

波蘭ノ尊國黨
ガ露ヲ嫉忌シ
タル理由

波蘭人普王ニ欺カレテ同盟ヲ結フニ波蘭新憲法ヲ發布ス

ノ心ヲ起シ、頼リテ以テ挽回ヲ遂ケント思ヒタルヲ淺マシキ。
ソモ波蘭ノ地ヲ分割セル埃普ノ二國ハ、速ニ兵ヲ撤シ、寡奪ノ地ヲ収メ
テ國ニ歸リタレド、獨リ露國ハ依然トシテ官吏ヲ置キ、兵ヲ駐屯シテ、掠
奪侮辱ヲ恣ニセシムルヲ以テ、波蘭人民ガ露國ヲ恐レ憎ムトハ蛇蝎モ
管ナラズ。伶俐ナル普公使ハ、此ノ事情ヲ知レルヲ以テ、更ラニ一層憎惡
ノ念ヲシテ甚シカラシメント欲シテ、露國ハ竊カニ波蘭王ニ向テ、一ノ
難題ヲ出シ、王若シ露土戦争ニ局外中立ヲ守ラズンバ、大波蘭ノ地ヲ奪
ハント言ヒタリトノ虚説ヲ捏造シ、是レハ確カナル筋ヨリ聞キ込ミタ
ル説ナリト稱シテ話シ出セシカバ、口ヨリ口ニ傳ヘテ、一般ニ擴マリ、波
蘭國會ハ其ノ奸策ニ陥リテ、露ヲ憎ミ、普ヲ親ムノ念ヨリ、一千七百九十
年^{我が寛政二年庚戌}三月十五日ヲ以テ、遂ニ普國ト同盟ヲ結ビ、猶通商條約ヲ改正
セント議シケル。

普波同盟

普王、波蘭ニ
割地ヲ望ム

普王フレデリック、ウヰリアム既ニ詭計ヲ設ケテ、波蘭ニ露國ノ羈絆ヲ

脱セシメケレバ、波蘭ハ、普ト普ノ同盟國^{英、蘭、瑞、丹}トナ特ミタレバ、コソ、昔テ
露ノ羈絆ヲ脱シタルナレ。否ラザレバ、決シテ之ヲ脱セサリシナリ。願望
成就ノ時節來レルヲ知リテ大ニ喜ビ、公然波蘭ニ向テ、トルン、及ヒダ
ナツヒノ二地ヲ割カン^トヲ望ミ、且ツ之ヲ恐迫シテ、言ヘラク、「貴國若シ
二地ヲ割ク^トヲ謝絶セラル、ナラハ、朕敢テ望マズ。朕ハ只同盟ヲ絶ツ
ノ一事アルノミ。然レドモ試ニ思ヘ。貴國ハ曩キニ露國ト堅ク約束ヲ結
ビツ、今ニ及ビテ之ヲ破ラレタルニ依リ、露國ハ恐ラクハ好意ヲ以テ
貴國ヲ遇セザルベシ。露土戦争終リテ告グルノ時ニ臨マバ、必ス違約ヲ
詰責シ、過分ノ割地ヲ迫ルナラン。此ノ場合ニ至ラバ、貴國ハ他ニ強國ノ
援ナク、思フガ儘ニ露國ノ爲メニ蠶食セラル、^トナカランカ。竊カニ貴
國ノ爲メニ取ラザルナリ。若シ之ヲ愛ヒラル、ナラバ、早ク我レニ二地
ヲ讓リテ他日ニ備フルノ愈レルニ如カズ^ト。普王ノ此策ヤ、俗ニ所謂「波
蘭ヲ『板挟ミ』^ト爲シタルノ策ナリ。狡猾モ亦極マラズヤ。普王又一千七百

波蘭第二回分割

九十年 我カ寛政二年庚戌 八月十一日書ヲ波蘭王スダニスラヌニ送りテ曰ク。

朕ハ貴國ガ通商條約ヲ現在ノ儘ニ置カルトモ、將々之ヲ改正セラ
ル、トモ、此ノ点ニ於テ更ラニ異議ノ唱フベキナシ。朕ハ只貴國ガ朕
ノ憂キニ申シ出デタル要求、即チ普國ガ關稅上ノ著シキ損失ヲ酬ユ
ルガ爲メニ、トルン、ダンチツセノ二地ヲ割讓セラレタリトノ要求ヲ
以テ、波蘭國ノ貿易ヲ隆盛ナラシムベキ唯一ノ正シキ方便タルヲ理
會セラル、ナラント信スルノミ……

然ルニ波蘭人ハ、ウヰスナユラ河ノ貿易ヲ悉ク普國ニ壟斷セシムルヲ
嫌忌シ、普王ノ要求ヲ避ケンガ爲メニ、各同盟國派遣ノ公使ニ命ジテ、其
ノ朝廷ニ援ヲ求メシメタリ。左レド毫モ其効力ナカリキ。

倫敦駐劄波蘭公使オジンスキ伯 (Count Oginski) ハ、此ノ事情ヲ英國内
閣ニ打チ明ケ、其ノ助力ヲ乞ヒタリシニ、總理大臣ピット (Pitt) 小ピットナ
七五九年(我カ寶曆九年巳卯)生レ、同
一八〇六年(我カ文政三年丙寅)死ス。ハ、斷然之ヲ拒絕シテ曰ク。現在貴國ノ如キ、露

英相ピットノ
忠告

廷ノ保護ノ下ニ煩悶セララル、ヤウナル微力ノ有様ニテハ、彼ノ兩地
ヲ物産輸出ノ港ニ充テタリトモ、如何ナル利益カアラソ。ソモ普王ハ
貴國ニ向テ、友情ヲ表シ、同盟ヲ結ビタレバ、貴國ハ王ニ頼ミテコソ煩
悶ヲ免カル、トヲ得ベケレ。然ラバ其ノ代價トシテ兩地ヲ彼レノ言
フガ儘ニ與フルトモ、豈遺憾トスルニ足ランヤ」ト。ミカエル、オジンス
キ傳 (Memoires de Michael Oginski)

夫レ斯ノ如ク、同盟國ハ、一モ波蘭ヲ援ケテ普國ノ要求ヲ拒絕セントス
ル者ナク、英國ノ如キハ、却テ波蘭ニ忠告ヲ試ミタリ。然レドモ波蘭ハ猶
割讓ヲ嫌忌シ、國會ハ、一千七百九十一年 我カ寛政三年辛亥ノ初ヲ以テ、波蘭ハ自今
永遠ニ至ル迄、尺寸ノ地モ割讓スベカラザルノ議ヲ決シケレバ、是ヨリ
全ク普國ノ保護ヲ失ヒテ、孤行單立ノ姿トハ爲リヌ。

國會ハ猶大膽ニ改革ノ歩ヲ進メ、同年四月ヲ以テ、各都會ノ地ニ選舉權
ヲ與ヘ、馬鹿ラシキ自由不認可ヲ廢シテ、只複議決ノ法ヲ存シ、宣戰又ハ

波蘭、普ノ要
求ヲ拒絕ス

憲法改革

波蘭人普王ニ欺カレテ同盟ヲ結フニ波蘭新憲法ヲ發布ス

條約ニ就テハ、四分ノ三以上ノ同意ヲ要スルコトシ、租税ニ就テハ、三分ノ二以上ノ同意ヲ要スルコト爲セリ。

右ノ如ク種々ノ改革ヲ行ヒタルノ末、豫メ五月三日ヲ以テ新憲法發布ノ日ト定メタリキ。ソモ此ノ新憲法ハ、制定以來既ニ數多ノ日子ヲ經過シ、スタニスラス王ガ熱心ニ嘉納シタルコトハ言フ迄モナシ。然レドモ改革黨ハ、猶反對者ノ存スルアルヲ知レルガ故ニ、其ノ團結ニ先チテ、之ヲ發布セント欲シ、初メ五月五日ヲ以テ發布ノ當日ト定メタルニモ拘ハラズ、卒然發布ノ期日ヲ早メ、サテハ前述ノ如ク、同三日ニ變更シタルナリ。

愈々當日ト爲リシカバ、數千ノ男女ハ、自由ノ光ヲ放ツベキ儀式ノサマヲ目撃セント欲シテ、ワルソノ王城(即チ國會開會ノ場處)ニ群集セリ。既ニシテ愛國心ニ富ミタル議長マラシヨリスキ(Malchowski)ハ、此ノ嚴格ナル儀式相當ノ演説ヲ爲シテ、外務委員ノ報告ヲ朗讀スベシト促

カセリ。是レハ露國ノ奸計ヲ暴露シ、之ニ應スベキ良策ヲ提出セント欲シテナリ。此ノ報告ノ朗讀セラル、ヤ、ポトキ(Potocki)ハ、王ニ請フラク、陛下ハ獨リ政黨以外ニ立タセラレ、孰レノ嫉妬偏執ヲモ受ケ給ハザルガ故ニ、願ハクハ、修正ノ最良手段ヲ御教示アラマホシト。是ニ於テ、スタニスラス起テ勅スラク、我カ國ハ、從來立法上ノ惡弊ノ爲メニ危險ニ陥リタレバ、此ノ危險ヲ禦キ、國家ノ長久ヲ謀ラント欲セバ、須ラク惡弊ヲ芟除シ、完全無比ノ新憲法ヲ確定セサルベカラズ。是レ朕ガ久シク此ノ事ヲ沈思シ、憲法ノ草案ヲ國會ノ議事ニ附シテ遂ニ今日アラシメタル所以ナリト。

是時ニ當リテ、反對黨ハ猶激シク新憲法ヲ非難セリ。然レドモ改革黨ノ數遙カニ優レルヲ以テ、如何トモスルコト能ハズ。リヅナニ選出ノ議員ツアビエロ(Zabiello)ハ、王ニ向テ、直チニ新憲法遵奉ノ旨ヲ一同ニ誓ハシムベシト奏セシガ、場内ノ喝采ハ涌クガ如クナリキ。王ハ、先ツクラヨ

僧正ヲ主命者ニ命シタル後、ミツガラ其ノ前ニ至リテ、朕ハ今新憲法ヲ
遵奉スベキヲ誓フ。永ク此ノ誓ニ背カシ。滿場ノ愛國士、望ムラシハ朕ニ
教會ニ從テ宣誓ノ式ヲ行ハソト勅セリ。王率先シテ教會ニ行幸セ
ラレケレバ、國會議員一同(但シ十二名ヲ除ク)及ヒ僧正、大臣等悉ク隨從
シテ式ヲ行ヒス。

新憲法ノ要綱

新憲法ノ綱領ハ左ノ如シ

- (第一) 天主教ハ依然國教タルベシ。然レドモ凡テ信教自由トス。
但シ王ハ天主教ヲ奉ス。
- (第二) 選王ノ制ヲ廢シ、今王スタニスラス百歳ノ後ハ、索遜厄家ヨリ
其ノ後ヲ嗣ガシムベシ。
- (第三) 行政權ハ王ニ委ヌベシ。
- (第四) 王ノ輔弼ハ、六人ノ大臣ヨリ成ルベシ。
國會多數ノ決議ニ由リテハ、大臣ノ職ヲ免スルコトヲ得ベシ。

(第五) 國會閉場中ハ、王ハ外國ト條約ヲ結ブコトヲ得ベシ。
又此ノ憲法ニ由リテ、市民ニ議員選舉權ヲ與ヘタル四月十八日ノ改革
ヲ確定シ、自由不認可ノ惡弊ヲ廢シ、每二十五年ニ憲法ヲ改正スベキコ
トヲ決セリ。

第三章

歐洲各國、波蘭ノ改革ヲ祝ス
露國獨リ激シク之ニ反對ス
露軍、波蘭ニ入ル
普軍亦波蘭ニ入ル

歐洲各國波蘭ノ改革ヲ祝ス

及ヒハ、心ニ之ヲ喜ブ

波蘭ガ新憲法ヲ發布シタリトノ報、歐洲各國ニ達スルヤ、歐洲各國ハ、舉
ツテ賀詞ヲ送リテ之ヲ祝シ、羅馬法王スタモ亦祝賀者ノ一人ナリキ。中
ニ就テ、英國ノ政治家ハ、最モ熱心ニ之ヲ頌讚シ、フナツクス(HOM) 四九七
(我カ宛延二年己巳)生レ、同一八〇六年、我カ文化三年丙寅)死ス。英國有名ノ政治家ナリ。
チャーリス、ジエームス、フナツクス(Charles James Fox)ト云フ。拙著「神童」ニ傳アリ。ノ如キハ「荷ク
モ真正ノ自由ヲ愛スルモノハ、深ク此ノ盛舉ヲ喜ハサルベカラズ」ト述

ベ、パロク(Burke) 西曆一七一九年(我カ嘉慶十四年己酉)生レ、同一七九七年(我カ寛政九年丁巳)死。有名ノ政治家ナリ。拙著「雄辯法」ノ中ニ小傳アリ。ノ如キハ、人情アルモノハ、波蘭ノ改革ヲ喜ビ、祝セザルヲ得ズト述ベタリ。

普王フレデリック、ウヰリアマモ亦五月二十三日附ノ書翰ヲ波蘭王ニ送リテ之ヲ祝シ、且ツ曰ク、朕ハ、朕ガ波蘭國民ノ自由獨立ヲ維持スルヲ助クベキ力ヲ有スルヲミヅカラ祝ス。而シテ朕ガ最モ愉快ニ注意スベキ事ノ一ツハ、兩國ノ同盟ヲ維持シ、益々之ヲ固クスルニ在リト。

波蘭王スタニスラスハ、熱心ニ此ノ改革ニ從事シタルニモ拘ハラズ、其ノ人ト爲リ、小膽ニシテ剛毅ニ乏シキガ故ニ、竊カコ王ノ之ヲ固守スルニ堪ユルヤ否ヤヲ疑フ者モ少ナカラザリキ。王之ヲ聞キテ涙ヲ流シ、嘆息シテ曰ク、噫々何ゾ朕ヲ知ラザルノ甚シキヤ。朕不幸ニシテ百事常ニ意ノ如クナル能ハズト雖モ、未ダ嘗テ國民ニ背キタルコトアラズ。朕今日リ永ク死ヲ以テ憲法ヲ守リ、民福ヲ固フセンコトヲ誓フト。前既ニ述ベシ如ク、普王ハ、陽ニ他ノ帝王ト同シク、波蘭ノ憲法改革ヲ祝

普王亦之ヲ祝ス

波蘭王、憲法ト死生ヲ共ニスベキヲ斷言ス

普王ノ心事

シタリト雖モ、其ノ心中ハ、決シテ然ラズシテ、寧ロ爲ス所アラント欲シテ竊カニ時機ノ來ルヲ待テリ。是ヨリ先キ一千七百九十年 我カ寛政二年庚戌一月獨逸帝ジョゼフ二世崩シ、其ノ弟レオポルド二世(Leopold II)繼テ位ニ即クヤ、帝位ノ甚ダ鞏固ナラザルヲ知リテ、心ニ危ブム所アリ。普王ニ結ビテ平和ヲ買ヒ、來襲ヲ避ケント欲シ、同年七月二十七日、ライセンバツクニ於テ兩國ノ間ニ同盟ヲ結ビ、土耳其モ亦盟約ニ加ハレリ。此ノ同盟コソ普王ノ政略ヲ一變セシメ、歐洲ノ大勢ニ大關係ヲ生シタルモノニシテ、普埃土ノ三國ハ、均シク澁ヲ波蘭ニ垂レタレバ、波蘭ハ殊ニ此ノ變化ノ影響ヲ被ムラザルヲ得ザリキ。露國ハ埃國ノ爲メニ棄テラレテ、三國ノ敵ヲ持ナタレバ、暫ラシ他ノ方面ニ敵國ヲ有セザルヲ以テ得策ト爲シ、ライセンバツクノ盟約ヨリ十八日以内ニ、瑞典ト和ヲ講セリ。土耳其ハ獨リ露國ヲ敵ニ持ツノミナレドモ、其ノ敵タルヤ、最モ恐ルベキモノニシテ、之ト干戈ヲ交ユルトモ、到底勝算ナキヲ以テ、又露國ト和親ヲ結

露國又注意ヲ波蘭ニ專ラニスルヲ待タリ

ハント欲シ、一千七百九十一年、我カ寛政三年辛亥八月四日、シヤツセトニ於テ、露土兩國ノ間ニ條約ヲ結ベリ、此ノ條約ニ由リテ、露國ハ一變ノ危機ヲ免カレ、注意ヲ波蘭ニ專ニスルヲ得タリ。
左レバ、波蘭ニ取リテ、不幸ナル出來事ト稱スベキハ、(第一)普王ガ其ノ政畧ヲ一變シタル事、(第二)露國ガ外敵ノ危難ヲ脱シテ、波蘭ニ注意ヲ專ラニスルヲ得タル事ノ二事ナリキ。然ルニ又第三ノ不幸ナル出來事コソ起レリ、即チ佛國革命是レナリ。

佛國革命ハ、一千七百九十二年四月二十日起リシナリ。

佛國革命ハ、驚天動地ノ一大奇事ニシテ、サシモ從來尊嚴ノ靈牌タリシ國王其ノ人モ、一朝金箔ヲ失ヒテ國敵ノ汚名ヲ附セラレ、斷頭場裏ノ鬼ト化スルニ至リタレバ、各國帝王ノ驚キハ譬フルニ物ナク、互ニ相結托シテ以テ危險ヲ禦ガント謀レルヨリ、改革ノ名ヲ恐レ憎ムト蛇蝎モ管ナラズ。隨テ其ノ恐ルベク、憎ムベキ改革ヲ行ヒタルヲ名トシテ波蘭ヲ

佛國革命ノ波蘭ニ及ボセル影響

攻撃セントノ念慮ヲ生シケル。是ヨリ先キ、埃帝レオポルドノ世ニ在ルヤ、小心翼々トシテ、公正ヲ守リケレバ、流石狡猾多變ノフレデリツク、ウヰリアムモ幾分カ箝制セラル、所アリシガ、不幸ニシテ、一千七百九十二年三月一日帝崩シケレバ、其ノ波蘭ニ影響スル所蓋シ小少ナラサリキ。加之ノミナラズ、假リニ一步ヲ讓リテ、普王ハ實ニ波蘭ニ對シテ約束ヲ守レリトスルモ、又一方ヨリ言ヘバ、佛國革命ヲ恐レテ之ヲ鎮壓セント欲スルヨリ、オノツカヲ強國ノ妨碍ナキヲ要スルヲ以テ、勢ヒノ然ラシムル所、露國ヲ度外ニ置キテ、波蘭ノ約束ヲ履行スルヲ得ズ。夫レサヘアルニ、露女皇カタリナハ、更ニ再ヒ波蘭ヲ蠶食セント欲シ、普埃ノ妨碍ヲ避ケンガ爲メニ、竊カニ二國ニ謀リケレバ、普王モ亦寧ロ約束ヲ破リテ一塊ノ肉ヲ分タント決心シケルツ情ケナキ。

露國波蘭ノ改革ニ反對ス

一千七百九十二年、我カ寛政四年壬子四月十六日、波蘭ノ外務委員ハ、露國ガ我ガ改

革ヲ不可トシ、今正サニ敵對ノ準備ヲ整ヘツ、アル由ヲ聞キ、之ヲ國會ニ報セリ。然レドモ國會ハ、空前ノ膽力ヲ顯ハシ、依然トシテ改革ニ從事シ、五月三日ニ於テハ、新憲法發布ノ一週年ヲ祝セリ。左レド人心ハ何トナク鬱々トシテ引キ立タズ。改革ニ反對セルフユリツクス、ポトキ(Potocki)、ブラニツキ(Branick)、ルツエウキメスキ(Rzewinski)ノ三貴族ハ、陽ニ孤立ノ姿ヲ爲セドモ、陰ニ同志ヲ造ラント勉メ、不穩ノ徵候スラナキニアラズ。サテ國會ハ、行政ノ全權ヲ王ニ委テ、陸海軍ノ大元帥トシテ外國ノ工兵ヲ用ユルコトヲ許シ、又三千萬メカツトノ軍費ヲ任カセテ、一朝干戈ヲ動カスノ期ニ望ミテ、十萬ノ兵モ猶不足ヲ覺ユルコトアラバ、國民兵ヲ召集スベキノ自由ヲ與ヘタリ。
久シカラズシテ四月十五日非改革ノ貴族等、ダトゴウキカニ於テ徒黨ヲ噓集シタリトノ報アリ。此ノ時、徒黨ノ數ハ、僅カニ十三人ノミナリシト云ヘリ。爾來四日ヲ隔テ、露公使ハ、改革ニ反對セル女皇カタナノ勅書ヲ波蘭政府ニ示セリ。此ノ勅書ニハ、改革ノ念

露國ノ恐迫ハ即チ宣戰ナリ

普王「ナ」化ケノ皮ヲ現ハス

ヲ絶ツモノハ悉ク之ヲ許シ、否ラザルモノハ、之ヲ罰セント脅カセリ。露國ノ此ノ恐迫ハ則チ取リモ直サズ宣戰ナリ。而シテ少シク思想アル者ハ、夙ニ事ノ茲ニ至ルベキヲ先見シタリト雖モ、輕信ノ念ハ彼レ等ヲ驅リテ、恃ムベカラサルノ普王ヲ恃マシメタルゾ不運ナル。果セルカナ、普王ハ忽チ「シ」變化ノ正体シヤウタイヲ現ハシ、五月三十一日ニ於ケル波蘭王ノ書翰ニ答ヘテ曰ク。

花墨拜誦仕候。昨今ノ御困難實ニ御察シ申上候。今ハ何チカ包ミ申スベキ。貴國昨年御改革ノ當時ヨリ、今日ノ事アルハ、豫メ分カリ切タルコトニ御座候。左ルニ依テ、朕ハ、ルイケシニ侯(Marquiss of Lucchesini)ヲ以テ、一度ナラズ、兩三度迄モ、陛下、并ニ要路ノ有司へ御忠告申上ケタル次第ニ御座候。……朕ハ最初ヨリ貴國ノ御改革ニ就テ、虚心平氣ノ考察ヲ下シ、承諾同意仕候儀ニ付、決シテ反對仕候ナドノ了簡ハ無之候得共、左リ迎御改革ノ辨護人トナリ、之ヲ保護仕候ハントハ更ニ

ニ存シ不申候。露國女皇ガ不同意ヲ唱ヘ候由ハ、貴諭ニ依リテ逐一敬承仕候。朕ニ於テハ、斯ル不同意ノ者出來候ガ爲メニ變節仕候等ノ事ハ毫頭無之候得共、前陳ノ次第ニ付、御助勢申上候譯ニハ參リ兼候。申ス迄モナキ事ナカラ、今日歐羅巴ノ事情ハ、曩キニ朕カ陛下ノ御同盟ニ加ハリ候時トハ全ク一變仕候。辭ヲ換ヘテ申セバ、五月三日發布ノ新憲法ノ爲メニ起リ候今日ノ危機ハ、曩キニ陛下ト條約ヲ結ビ候時ニ於テ者ヘ及バザル所ニ御座候。左ルニ依リテ、甚々御氣ノ毒ナガテ朕ハ陛下ノ尊慮ニ從ヒ申候事、相叶ヒ難ク候………

噫々此ノ背信ノ如キハ、實ニ驚絶嘆絶ト謂ハサルベカラズ、佛國ノ史家セーギエール(Segur) 西曆一七五三年(我カ寶曆三年癸酉)生レ、同一年(我カ天保元年庚寅)死ス。曰ク、吾人政治上ニ於テハ、屢々正理ガ野心ノ爲メニ犠牲ニセラル、ヲ見タリ。然レドモ既ニ公然約束ヲ結ビツ、墨痕未タ乾カザルニ、忽チ其ノ約束ヲ破リテ、恬トシテ願ミザルヲ、フレヂリツク、ウヰリアム二世ノ如キ者ハ、未タ嘗テ有ラ

ザルナリト。ソモ破約背信ハ、歐洲政治家ノ常ナレバ、彼レニ在リテハ、深ク怪ムニ足ラザルベシト雖モ、吾人東洋人タルモノハ切ニ鑑ミテ恐レザルベカラザルナリ。

マヘーロー卿(Lord Macaulay) 西曆一八〇〇年(我カ寛政十二年庚申)生レ、曾テ「東洋人ハ容易ク約束ヲ結ビテ、容易ク之ヲ破リ、毫モ顧慮スル所ナシ。我カ西洋人が豫想ノ及バザル所ナリ」ト言ヘリ。勳蓋シ西洋ニヘ、普王フレヂリツク、ウヰリアム二世的ノ人多キヲ知ラザルカ。吾人ハ卿ノ言辭ヲ借用シ、只東洋人ト云ヘル語ト西洋人ト云ヘル語トヲ轉換シテ、敢テ之ヲ歐洲政治家ニ呈セント欲スルナリ。讀者以テ如何ト爲スヤ。(羽化生妄評)

露軍、波蘭ニ入ル

五月十八日、十万ノ露軍、戦列兵八萬人、コサツク兵二萬人命ヲ受ケテ將ニ波蘭ニ入ラントス。波蘭ノ方ニ於テハ、三師團ノ軍ニ命シテ防戦ノ準備ヲ整ヘ、第一師團ハ、王姪ジョセフ、ポニアトスキ(Joseph Dohiatowski)之ガ令ヲ司リ、第二師團ハ、ミカエル、ウヰリルホルスキ(Michael Vielhor)之ガ令ヲ司リ、而シテ第三師團ノ長ハ、波蘭ノ長城タルコスシウスコ後ニ傳 其人ナリキ。

歐洲各國、波蘭ノ改革ヲ祝ス。露獨リ之ニ反對ス。露軍兩軍波蘭ニ入ル

波蘭王ハ、ミヅカラ陣頭ニ進マント約シ、軍隊一般ニ此ノ一言ノ爲メニ奮興シタルガ如シ。然レドモ王ノ人ト爲リチ知レル者ハ、其ノ只一時ノ諭言ニ過ギザルチ知レリ。果セルカナ、戦端チ開クニ及ビテ、王ハ新ニ將官會議チ開キ、シヨセフ、ポニアトリスキニ命シテ、バク河畔ニ退カシメ、ウルソノ周圍ニ軍隊チ集メリ。サテ兩軍ハ屢々小戦チ闘キ、勝利ハ概チ波蘭軍ノ方ニ在リキ。

コスシウスコハ、六月十八日、チーレンスノ戦ニ、頗ル武功チ顯ハシ、モシラノリスキ(Mokranowski)ハ、部下ノ騎兵チ率ヒテ、ポロンヤノ戦ニ名譽チ輝カセリ。然レドモ、此ノ露波戦争中ノ最モ激シク、且ツ最モ目覺マシカリシハ、ヅビエノカノ血戦ニ如クハナシ。此ノ戦ニ、コスシウスコガ部下ノ波蘭軍ハ、三倍ノ多勢ト戦ヒテ、毫モ屈スル色ナク、數千人チ殺シテ後悠々トシテ退キタリシハ、實ニ無比ノ壯觀ナリシト云ヘリ。就中コスシウスコノ働キハ、世人ノ耳目チ驚カシ、波蘭武夫ノ棟梁トシテ天下ニ激

コスシウスコノ武名頼ニ世ニ知ラレ

波蘭王猶痛快ノ言語ヲ吐ク

王、實行相反ス
王、露女皇ニ媚フ

王、露女皇ノ旨ニ從ヒ愛國者ノ軍チ撤ス

賞チ博セリ。
リチニアニアニ於テハ、波蘭軍、衆寡敵スルコト能ハズシテ退キ、露軍向フ所殆ンド敵チナカリキ。

波蘭王猶往々熱心チ粧ヒ、絶叫シテ曰ク、朕ハ、國家ノ信托ニ背キ、人民ノ利益チ犠牲ニセンヨリモ、寧ロ死セント欲ス。噫、何ツ其ノ言フ所、痛快ナルヤ。然レドモ、王ノ行爲ハ、日々ニ其ノ言語ノ虚偽ナルチ証シ、王ガ果斷ニ乏シキノ証ハ、時々顯著ト爲レリ。

六月二十二日、波蘭王ハ、露女皇ニ書チ送リ、コンスタンチン大公(Grand-Duke Constantine)チ己レガ後嗣ト爲スベキ旨チ照會シテ、女皇ノ歡心チ買ハント勉メタリ。左レド、女皇ハ、此ノ事ニ就テ可否ノ回答チ與ヘズ。只王ガ契約ノ條款ニ背キタルチ責メ、ターゴウヰカノ徒黨(第八十頁參看)ニ加盟スベキチ諷セリ。卑怯未練ナル王ハ、女皇ノ旨ニ從ヒ、七月二十三日チ以テ徒黨ノ盟約チ允可シ、波蘭ハ又モヤ露人ノ鼻息チ窺フコト爲レリ。是ニ